
空闘飛走スカイライナー

呉璽立児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空闘飛走スカイライナー

【Nコード】

N3223V

【作者名】

呉璽立児

【あらすじ】

人間自身が空を飛ぼうという概念が生まれなかった世界。
人々はHSA^{ハイス}と呼ばれる人造機人で空を走るといふ手段を生み出した。

飛走都市スカイレイル　ここはHSAが2RBと呼ばれる競技を盛んに行う都市である。小さな工房で働く少年・クリュウは、エリート競技者^{ライナー}を輩出するアカデミーで期待されながらも、岐路に立たされ中退した過去を持つ。夢をかなえられずに燻っていたクリュウが今、『飛走』する！

転機

2体の機械が空を走る。それは鳥のように羽を使って飛ぶ訳ではない。意味の通り、2つは空を走り駆けぬけているのである。

機械は、人型をしている。目を引くものが一つある。人間で言うくもふしと踝に車輪がついている。

車輪は高速で回転して、空を伸びる線を走っている。

その昔、魔法使いと言う者達がいた。魔法使い達は空に自分達の目的地まで線を引き、そこまで空を渡ったとされている。現在はその線”スカイレール”を引く技術を利用し、その上を機械のひとがた人形：High t - Speed Alloy通称 HSAと呼ばれる者達が疾走している。後ろに客車をつけた運送用や荷物を運ぶ運搬用……そして、HSAハイサを駆るのはライナーと呼ばれる人間である。

「うらあ!!」

「フン」

二つの拳が、空でぶつかる。人々の歓声が起こる。

ぶつかり合った2機のHSAハイサはそのままお互いの向かっていた方向へと駆け抜けていく。

Race Rail Batel 2RB用と呼ばれるHSAハイサ達の

空走バトルである。あれらは、己が空を走るスピードを競い、テクニクを競い、そして、動力から生み出されるEngine of

Magic EOMエオムをぶつけ合う。

「……スピードが落ちるが仕方ねえ」

片方のHSAがスピードを下げる。

観客達がどよめき始める。スピードを落とすということは、HSAハイがEOMエオムを使う時の前動作である。2RB用のHSAは、速さを追求する為に一つの機関エンジンしか積まない。EOMエオムを使う為には、どうしても車輪を動かす為の動力をカットしなくてはならないのである。

「炎射 バースト・フレイム!!」

炎のEOM^{エオム}が、対戦相手のHSA^{ハイサ}へと襲い掛かる。
「雷壁 エレクト・ウォール」

だが、炎は展開された雷によって防がれた。

「お互いの、EOM^{エオム}が衝突！！ これは互角か？！」

「互角？ 冗談じゃない。攻撃と言うのはこうやる物だ」

雷を使った方が早くスピードを取り戻す。

そして、拳を握る。ほとばしる雷光。

「サンダー・パワー」

雷のEOM^{エオム}が拳に宿る、そして炎を使ったHSA^{ハイサ}へと叩き込まれた。

叩き込まれた方は、スカイレールが消失した。スカイレールを走れないHSA^{ハイサ}は物理法則の元、落ちるのみ。

「勝負合った！！ 連戦連勝！！ やはり、新機関を搭載したHSAを倒すことは出来ないのか！！」

「くう……やっぱりギドレー・マイルは強えなあ」

「これも雷魔^{らいま}駆動のおかげなのか？」

ここは飛走機都市・スカイレールの工業地区にある、小さな町工場。昼休み男達が、テレビの前で白熱していた。

「いや、それもあるがやっぱりギドレーの飛走技術は本物だ。クリユウの言うことは本当だったな」

クリユウ・イワザキは、同じ工場で働く少年であった。クリユウは、ギドレーと2RBライナーアカデミーという、2RBに用いられるHSA^{ハイサ}ライナーの教育学校の同級生であった。クリユウは途中で学校を続ける資産がなくなったので自主退学したが、当時のクリユウはギドレーと飛走技術を競り合っていた。

「おい、お前ら！！ 昼休みはもう終わりだ！！ いつまで仕事サボってやがる！！」

オークス工場の工場長であり社長である、アドウ・オークスが皆

に発破をかける。

「ったく、オメエらは人の目が無えと仕事も出来んのか!!」

工房は僅か5人しか働き手はいない。それでも、小さな仕事場なのでそれぞれがやるべき仕事を行えば、きっちりと回るのである。

「クリユウを見習らわんか!!」

「へいへーい」

アドウは工房の中を見渡す。今請け負っている仕事は、とあるH^ハSA^{イサ}の組み立てであつた。

小さな町工場の中には全高6メーヤほどの人型の機械が鎮座している。成人男性の平均身長が1.7メーヤだとするとおよそ4倍の大きさがある。これがH^ハSA^{イサ}である。これほどの巨体が空を走るのである。

「……いい機体だなあ」

パーツを磨きながら、クリユウはそう思う。

クリユウはライナーとしての資格を持っている。この工場では技者の真似事をしているが、本来はテストライナーとして雇われている。確かにH^ハSA^{イサ}に乗ることが出来る、がライナーとしてはやはり自分自身のH^ハSA^{イサ}が欲しいと思う。そしてこのような名機を持って2RBに参加したい、そんな思いがいつも突き刺さっている。

「是非とも乗ってみたいなあ」

工房のH^ハSA^{イサ}を見上げる。

「ふーん、アナタにこの子のよさなんて分かるの?」

透き通るような高い声。一部例外もあるが、汗と油臭いそんな工場には相応しくない声がクリユウに問いかける。

「……何だ? このガキンチョは……」

「ガキンチョって何よ! あたしは……ってどこ掴んでるのよ。離しなさい!!」

クリユウは容赦無く、少女……というよりも更に背が低い女の子の首根っこを掴む。

「何ガタガタ騒いでやがる!!」

アドウが騒ぎを聞きつけて怒鳴りつける。

「親方あ、こんな所に女の子が」

クリユウは女の子を高く掲げる。

「そんなもの摘み……ッ！」

少女の姿を見た瞬間、アドウは声にならない驚き声を上げた。

いつもはどつしりと、貫禄を見せて歩いているアドウがこのときばかりは、まるでコマ送りでもしているコントのような勢いで掛けてくる。

「ッーーーー！」

クリユウの頭に鉄拳が振り落とされた。

「バカ野郎！この方を誰だと思っていやがるんだ！！」

アドウは摘み上げられていた少女をクリユウの手から掻っ攫うと丁寧に地面に下ろす。

「は、誰ってただのガキ……」

「オメーはそれでもライナーか！！この方はあのアイザ・ヨーだぞ」

アイザ・ヨー　それは2RBにおいて知らぬものはいない天才ライナーである。様々な重賞を勝ち取りもはや並ぶものはいないとされるライナーである。

「は？　コレがアイザ・ヨー？」

クリユウはパチクリと目を開かせる。

クリユウとて、アイザを知らない訳ではない。だが世界のアイザと目の前の少女はどう考えても結びつかないのである。

「このアホンダラ、なんで彼女の容姿を知らねえんだ！　アイザ・ヨーといえばその腕前もそうだが”天駆ける天女”とまで言われるアイドルだろうが！」

何故この目の前のカナスチが恋人という比喻が相応しい油ギツシユな中年男はそこまで詳しいのだろう……それともクリユウが知らないだけでなのか。

「……まあいいわ」

地面に下ろされたアイザは、乱れた長髪を手で梳く。

「どう？ この《ホープ》は」

「ほぼ完成だ。世界一と言われながら、まだ貴女の機体を弄らせてもらえるとは思って無かったよ」

「ふふふ。アドウの腕は知っているもの」

アドウは自分を褒められ恥ずかしそうに頭を掻く。

「まあ、そういわれちゃ仕方ねえ。この老いばれと言えど新しい技術に着いていくしかねえってこった」

「そうよ、老け込むにはまだ早いわ」

ただ腕は良くても客足は途絶える一方であった。大企業が開発、販売、修理を全て請け負いライナーは自分の飛走技術のみを磨く、それが今の2RBの主流であった。

「昔は、色んな所の部品をかき集めて、そして自分だけのHSAハイスを作り上げたもんだ。だから、部品屋も工場も技術技術を競い合ったもんだ。

それが、今はどうだ……。今のライナーと来たら。型に流されたHSAハイスを使ってそのマシンに会った2RBをしやがる」

アドウはため息をつく。

「この街 飛走都市スカイレイルまでそうなってしまったら2RBは面白くなるわね」

「まったくその通りだ」

「でも このあたしがいる！ そんなHSAハイスに劣りはしないわ」
「ハッハ、天下の天才ライナー様にそう言っていただけなら、この老骨も身体に鞭を打ち続けるしかないってもんだ」

「それで、実際はどの段階まで来てるの？」

アイザは世間話に区切りが付くと自分のHSAハイスの話へと移る。

「実際、テスト飛走の段階までは来てる。この先どうするか相談しようと思ってたんだ」

(とうとう、来たか)

クリュウは心躍らせる。この工房でテストライナーとして雇われている以上テスト飛走はクリュウの役割である。その役割を幾度と無くこなしてきたクリュウは当然自分がやるものだと思っていた。

「テスト飛走のライナーだが……」

「もちろんあたし自身が乗るわ」

なんの迷いも無くアイザはそう言いきった。

「え!？」

クリュウは出鼻を打ち砕かれた。

「いや、だがな今回は初回のテスト飛走だ。アンタが乗らなくても

……」

「あら、いつになく弱気じゃない。アドウらしくない」

アイザはアドウを挑発する。

「なんだと!! おうおう、それなら好きにしろテメエが乗ればいいじゃねえか」

売り言葉に買い言葉、喧嘩口調でアドウは言う。

「^{ハイサ}HSAは手足も同然、このあたしは乗りこなして見せるわ」

笑いあう二人を尻目に、落ち込むのはクリュウである。

「そんなあ……」

落ち込む声は聞こえてはいないが、その落胆振りはアイザも見取れた。

「そういえば見ないヤツだけど、なんなの？」

「ああ、クリュウのことか? そういえば見るのは初めてだったか。

アイツは新しく雇ったテストライナーだ。たまたま教習場で走っている所を見かけてな見るものがあるから声を掛けたんだ。

まあ、一言で言ってしまうえば^{ハイサ}HSA馬鹿だ」

アイザがは「ふーん」と考えた素振りをする。

「アドウがそんな風にいるなんて意外ね」

アドウは経験と私見がある人間である。アイザはアドウがそう評価するクリュウという存在が気に掛かった。

「クリュウは中退したらいいんだがアカデミーに通っていたらしい。その時の同期があゝのギドレー・マイルだ。在籍中は主席を競いあったそうだ」

ギドレーの存在はアイザも当然知っている。期待の超新星と謳われるライナーの名を聞きアイザは目の色を変える。ギドレーは大企業のクロバ工業が誇る最新鋭のHSAハイサを駆る専属ライナーとして記憶していた。アイザの彼に対する評価は、確かに飛走技術は眼を見張るものがあるが、それ以上に気に喰わない、その一言に尽きた。

それに対して目の前のクリュウという少年はどうだろうか？ アイザは考える。一見すると年齢は遥かにアイザの方が年下だが、HSAハイサに乗れる、乗れないで一喜一憂するクリュウは子どもっぽく見える。

（でも、そういうの嫌いじゃないわ）

アイザはそう思う。そして、ある面白い考えが頭に浮かんだ。

「ちよつと、アナタ！！」

「へ？」

落ち込んでいたクリュウがアイザの呼びかけで顔を上げる。

「あたしのテスト飛走の相手をしなさい」

「え！？」／「は！？」

クリュウとアドウは同時に驚きの声を上げた。

「本当か？ オレをHSAハイサに乗せてくれるのか」

クリュウの心は躍った。

テスト飛走で何度か2RB用のHSAハイサに乗ったことはあるが、アイザの言い振りから、いつものただ飛走を行うのではなく、実践形式の相手をするように言われている。

2RB形式の飛走なんていつ以来であろう、とクリュウは思う。

「おいおい、オメエいきなり2RBする気か!!」
アドウが声を上げる。

通常HSAハイサは、組み上がってから何度もテストを重ねて調整をする。まずHSAハイサの調整を行い事故が無いように手を加える、次はライナーがHSAハイサの乗り方を学ぶ為のテストを行う。

それをアイザは2段階目から行おうとしているのである。

「だって自信があるんでしょ？」

「何があっても知らんぞ……」

ハアとアドウはため息をつく。

アドウからの許可が出た。クリュウの胸が高鳴る。

「楽しみだ」

「ええ、本当にね」

クリュウとアイザをお互いに見つめあう。

クリュウは、天下のアイザと戦えることに感動に近いものを感じていた。そんなアイザからは強者の余裕のようなものが感じられる。

「互いにHSAハイサ馬鹿なのは分かるが……クリュウ、オメエ肝心なHSAハイサはどうする気だ？」

そういわれクリュウは我に返る。そう言われれば、テスト用のHSAイサに乗せて貰えないということは自分には乗るものがない。

「ぐおおおお」

HSAハイサが無いこと、どうしてもアイザと2RBをしたい、そんな葛藤がクリュウを苛む。

（どうしよう……こんな機会は滅多にない。今まで貯めてきた金を使つてどこから借りてこようか）

HSAハイサを借りるとしたらそれには貯めた費用をかなり使わなくてはいけなくなる。

だがそれをして自分のHSAハイサを持つという夢はかなり先へと遠ざかる。

2RB用のHSAハイサを借りるというの通常誰もが行うことではない。行つ人とすれば我が身1つで2RBを駆る賞金稼ぎみたいな者だけ

であった。だからレンタル費用というのは何があっても良いように高く設定されていた。

「そうねえ……」

クリユウの横でアイザも何か考えたそぶりをしている。

「変な2RBをして面白くなくなっても困るわ。あたしのHSAをハイサ貸すわ。今連絡したら3日後ぐらいには到着するでしょう。3日後にテスト飛走……それでいい？」

「本当に！？　ありがとう！！」

クリユウはアイザの手を握り感謝した。その行動にアイザは顔を赤らめて動揺したが、ずっと手を切るとクリユウ、アドウに背を向けた。

「ふ、ふん。いい3日後よ。逃げずに待っていなさい」
びしっと指差しアイザは歩き出す。

その背に向かってクリユウはひたすら手を振っていた。

転機（後書き）

いきなりですが続きます。チャンネルはそのまま！！

空を走れ！！

「うひゃーすげえ！！」

クリユウ達オークス工房の一味は、アイザの招きで飛走都市スカイレイルにあるスタジアムを訪れた。HSA^{ハイサ}が走るスタジアムの構造はその場所ごとに違う。飛走都市スカイレイルのスタジアムは全てが海に面しておりHSA^{ハイサ}が走る場所は海の上となっている。

「さすが一流ライナーとなればテスト飛走にスタジアムごと借り切っちゃうのか」

クリユウは感動に近いため息をこぼす。

「よく逃げずに来たわね」

スタジアムの上段でアイザが仁王立ちをしている。

「あつたり前だろう。こっちは昨日なんか興奮して寝れなかったっていうのに」

「まったく、子どもねえ」

実年齢と背格好を見ればアイザにそう言われるのは普段であれば文句の一言も出るであろう。

だがクリユウは目の前の2RBを前にアイザの軽口にくくじらを立てる気も起きなかった。

「……お嬢様」

いつからそこにいたのか、アイザの横にはいつの間にか執事であるうかピリツとしたタキシードの青年が立っていた。

「あらゴンド……遅かったじゃない」

「はっ。お嬢様のHSA^{ハイサ}、《スカイ》を整備してからこちらに向かいました所、遅くなってしまいました。申し訳ございません」

身なりもそうだが、今のアイザからは優雅さの様な物が感じられる。

「そう、じゃあ《スカイ》を彼へ。準備なさい」

「お、お嬢様、今何と！」

執事のゴンドは驚嘆とも言つべき顔を浮かべた。

H S A ^{ハイサ} 大空の名を冠する《スカイ》といえば、天才ライナーアイザの愛機である。彼女をライナー界の頂点に押し上げたと言っても過言ではない。

「お嬢様、それはあんまりです。お嬢様の《スカイ》をこんな野良犬に貸し与えるなど」

これにはさすがにクリユウもむっとした。だが彼らの会話にクリユウが口を挟む余裕はなかった。

「お嬢様は《スカイ》に乗っていても最速です。今更何を……」

「ゴンド、あの子はね……もうあたしについて来れないのよ。だからあたしは《ホープ》を作った。だから、あたしは《スカイ》を降りて更なる高みを目指す」

「もしそうであつたとしても、何も別の輩を《スカイ》に乗せなくても」

ゴンドは食い下がない。《スカイ》を貯蔵するよう説得する。

なんて、H S A ^{ハイサ}を愛している人たちなんだろう、クリユウはそう思う。ゴンドは、アイザと共に天駆けた友を汚されたくないそう思っていることが分かる。濃い日々をとにしたモノだからこそ他の者に乗って欲しくない。そう言う気持ちはアイザには無いのだろうか。

「ゴンド…… H S A ^{ハイサ}は走る為にあるの。もしこの試合で《スカイ》が壊れてしまつても、あたしも《スカイ》も後悔はしない」

アイザは言い切る。

「それにね……」

クリユウは背がビクッと震える。

クリユウとアイザの目がぶつかる。

「あたしが乗る性能は上でも不完全な《ホープ》と、性能が下でも調整が完璧な《スカイ》。いい勝負になるかもしれない、そう思わない？」

アイザはクリユウを挑発する。

そこには、

お前の腕など考慮するに当たらない
と、

この飛走が2RBらしいものになったとしても、それは
お前の腕ではなくHSAハイサの性能によるものだ
そう言っているように感じられた。

「……上等だ」

小声でクリユウは呟く。

この2RB……ただのテスト飛走では終わらせない。

アイザの一言が、ただ子どものようにはしゃいでいた、クリユウ
の心に火を付けた。

『いいか、余計なことは考えるんじゃないぞ！』

HSAハイサ《スカイ》の操縦席。外からの通信でアドウがそう言う。

アドウは、クリユウのいつもとは違う雰囲気を感じ取ったのだろ
うか、何度も釘を刺す。

『いいか、このテスト飛走は《ホープ》の性能、ならびにEOMエオムの
精度を確かめるためのもんだ。だから、テメエはただ《ホープ》の
前を走ってればいい』

「わかってるよ」

そう口では言うものの一度点いた火は中々消すことは出来ないし、
消そうとも思わない。

『準備はいいかしら？』

「ああ」

スタート前の背中を電流が駆け巡るような独特の緊張感をクリユ
ウは感じる。

”シフト カラース”というスタートの合図を前にその一瞬が長
くも感じ、また短くも思う。

電光灯に明かりがとる。赤が青に変わった瞬間に2RBは始ま

る。

ハイサ
H S Aを動かす為の 自分の意思を伝達して動かす操縦石に当たった手が汗ばむ。

この瞬間何度もアカデミーでテスト飛走で体感したが慣れることは無い。こと、今回に至っては、いつも以上に緊張していることがクリユウ自身良く分かっている。

信号が 青に……

《スカイ》の視界を現すモニターに” G O ! S h i f t C o l o r s ”と記される。

「シフト！カラース」 / 「シフト、カラース！！」

2人の声が響いた。

互いのハイサ
H S Aが動き出す前に、海上に2本のスカイレイルが引かれる。そして動き出すと同時に、

「火速 ブーストアップ！！」

クリユウのエオム
E o mを発動させる詠唱が聞こえた。

「なっ！？」

これには百戦錬磨のアイザも驚いた。2 R Bは確かに高速で一見するとスピードを競う競技に思える。だが実際、競技者 ライナ
ーからすれば印象は異なる。一瞬で追いつくことが出来るハイサ
の性能、もしくは《スカイ》が使用したような瞬発的に加速を行うエ
オム
o mさえあれば極端なスピードは必要無いのである。

この火速のエオム
E o mも通常ならば《スカイ》に搭載された剣で接近戦を行う為に使用することが殆どであった。

ハイサ
H S Aにはクラスと言うものが存在する。これはそれぞれのH S
Aの戦闘スタイルに合わせて、接近戦に特化した”ファイター”、
相手の攻撃を防ぎその隙をカウンターで狙う”ディフェンダー”、
エオム
E o mによる攻撃を重視した”ソーサラー”に分類される。そして、
それぞれのクラスにあった武器を装備している。

《スカイ》は分類上”ファイター”に値するが、実際はどんな戦闘も可能とするオールラウンダーな性能を持っている。

《スカイ》は、先手で加速を駆けたことにより、”逃げ”に徹していることが分かる。

2RBでは前に行く者は、不利となる。これは、ドッグ・ファイトという名前から分かる。前に行くモノは獲物、後を追うモノが捕食者なのである。

前に行く者が”ディフェンダー”か”ソーサラー”なら状況は違うが、”ファイター”が前に行くのは理に反している。そもそも、”ディフェンダー”や”ソーサラー”は加速のEOM^{エオム}を搭載していること事態が稀なのだが。

”ファイター”が前に行くことに不利がつくのはこれだけではない。”ファイター”は接近戦を得意とする故に、重要なのは武器を抜いて切りかかるまでのスピードである。これは、それまでに走ったスピードを生かしたり、EOM^{エオム}を用いてスピードを底上げするという2つの方法がある。この通り、後方のHSA^{ハイサ}は敵に攻撃するのにその分のスピードを無駄にすることが無い。だが前方のHSA^{ハイサ}は、反転しなくてはいけない。これは、今まで走ってきた距離を無駄にすることになる。2RBのHSA^{ハイサ}はそれほど長距離を飛走することは出来ない。距離を走ればその分燃料を消費し、EOM^{エオム}を使えば燃料を消費しただけ更に走れる距離が短くなる。

だからライナー達は戦術^{タクティクス}に気を使う。それは、空のスカイレールとなつて現れる。戦術に考えがなくて引くスカイレールが乱雑である。それを引く者を揶揄する、”スパゲッティ・タクティクス”というような皮肉めいた言葉があるくらいだ。

あれだけ炊けつけておいて、それでもテスト飛走に徹しこのような戦術を取るのならば、

(つまらないヤツ……見込み違いだったかしら)

アイザは前に行く《スカイ》を見てそう感じた。

「よし!!」

クリュウは手ごたえを感じていた。

(すごい機体だ)

決して新しい機体とはいえない《スカイ》。だが、幾度と無く改修を繰り返してきた《スカイ》からは洗練された性能を感じた。

(お前、すごいよ……だけど)

《ホープ》の性能は《スカイ》より更に上を行っている。

それは、近くで《ホープ》の組み立てに携わったクリュウ自身良く分かつている。同じ0ゼロからスタートしたのでは、《スカイ》が《ホープ》の前に行くことは不可能であった。

(《ホープ》の売りは、燃費の良さ……そして加速性能)

実際、火速のEOMエオムが終わり開いた距離は詰められつつあった。

(だけど、こちらとそちらではHSAハイスの経験が違う)

HSAハイスにはライナーをサポートする”OS”オペレーション・システムというものが搭載されている。これは瞬時の加速、そしてEOMエオム使用に消費するエネルギー等を経験に基づいて算出、実行するものである。OSの精度が経験に係る分、まっさらな《ホープ》に対して《スカイ》には分がある。

だが弊害もたしかにある。乗っているライナーが違う分、すぐには思ったような行動を取ってはくれないのである。

先ほどの火速のEOMエオムもそうであった。本来ならばあれほど距離を離す必要はなかった。これはアイザの戦術に影響されているのであろう。

(コイツにあった戦術を取らないと)

クリュウは次の行動に移す。

《ホープ》に接近させない。中距離を保つ。そのために、

スカイレイルをUの字に描く。

《スカイ》が《ホープ》に優っている部分がもう1つある。

それはペンデュラム機構というものを搭載することで、コーナリ

ングを得意とする部分であった。

通常であれば、現在の《スカイ》のスピードのままUの字にコーナリングするのは自殺行為である。

これは、スカイレールの上を飛走する文字通りの綱渡りである。

「曲がれええ!!」

腹部のコックピット部分が横に倒れる。

ちょうどそこへ《ホープ》のスカイレールが横に引かされた。

《スカイ》と《ホープ》はすれ違うように入れ違った。

『曲がれええ!!』

そんな声と共に、《スカイ》は後方へと走り抜けていった。

「そう……そうよ。それがその子の正しい乗り方よ!」

アイザは歓喜した。

まさか《スカイ》をそのように乗れる者が他にもいたとは思わなかった。

（面白い……面白いわ、クリュウ!!）

クリュウは決してつまらないライナーなどではなかった。

アイザはここ最近感じてこなかった、強敵との対決に興奮を感じた。

（でも、ここまでのテクニクを持ちながら何故逃げるの）

《ホープ》はスピードを殺さないように大きな弧を描いて曲がる。

《スカイ》はそれに同調させるように再び　今度は直角にコーナリングする。

（もう、逃げさせなんかしない）

アイザは《ホープ》を《スカイ》と平行に飛走するように走らせる。

（貴方はあたしの背格好は知らなくても、あたしの2RBは見て来たのよね。さあ……どうするの?）

《ホープ》は《スカイ》の後継機、同じくオールラウンダーに戦

えるようになっていた。

（つまり”ソーサラー”の真似事ぐらい出来るのよ）

（まずい……）

《スカイ》と《ホープ》の位置関係。今のこれは”ソーサラー”の攻撃態勢ともいえる。アイザは《スカイ》を駆って過去に何度もこの態勢からEOM^{エオム}を放っている。

（来るか？）

中盤でこの態勢に持ち込まれると……特に今のアイザは危険だ。

《ホープ》は《スカイ》よりもオールラウンドに戦える性能が向上している。この状態で打ち合っても勝ち目は無い。

『炎射 ショートフレイム』

詠唱と同時に《スカイ》に向かって小さな炎が飛んでくる。

（これはブラフだ）

クリュウは瞬時に察知する。

これを避けると同時に、避けた地点に向かって伸びたスカイレー
ルから飛走する位置を予測して、強力なEOM^{エオム}が飛んでくる。

考える時間は無い。

クリュウは《スカイ》を曲げる。

でも、ただ曲げるのではない。

スカイレールが前もって螺旋状に上へと……そう描く。

”スパイラル・アップ” この飛走はそう呼ばれている。

本来儀礼用の見せる飛走技術であった。アカデミー在籍中に幾度と無く挑戦し出来るようになった。2RBである以上この飛走はスパゲッティ・タクティクスと言わざるを得ないだろう。そしてこのスピードで螺旋状に昇るのは至難の技であった。

さすがのアイザも意表を付かれたのであろう。”スパイラル・アップ”によって2打目のEOM^{エオム}を交わすことには成功した。

本来であればこれほど強力なEOM^{エオム}を使用した以上、HSA^{ハイサ}は減

速するものである。だが、《ホープ》にはそれを補う機構が搭載されている。

それは”ハイブリット”と呼称されていた。HSA^{ハイサ}の車輪部に電魔駆動のモーターを設置しているのだ。通常は魔油によるエンジン駆動で《ホープ》は動いている。だが、今の状況のような火のEOM^{エオム}を使用し、エンジンに再び火が灯るラグを雷魔駆動によって補うのだ。このときの雷魔駆動のエネルギーはエンジンによって走ることと発電される為に、1つの機関を動かす為に燃料を1つしか積めないという、2RBのルールに違反することも無い。

『やるわね』

アイザがクリュウを賞賛する。

『さあ、上を取ったってことは攻めてくるんでしょ』『当然』

今度はクリュウが攻めに移る番である。

2RBでは上位を取ったものが攻撃の際に有利になる。

これは下って攻撃をする際に慣性の法則により速度が増すからである。また、下ることによって消費するエネルギーも抑えることができる。

故に2RBにおいてライナー達は互いに上を目指し、そして上を取られないように飛走するのである。

アイザの意表をつき、上を取ったクリュウは今有利な立場についていた。

後でアドウに怒られるかもしれない。

それでもクリュウは剣を抜く。

《ホープ》も迎撃する為に剣を抜いた。

《スカイ》が下降を始める。

アイザであればここで剣撃をおとりにしてEOM^{エオム}で攻撃を仕掛けるのである。OSもEOM^{エオム}の使用準備を完了している。

だがクリュウは使わない。

純粹に剣撃のみで仕掛ける。

こちらに向かつて昇ってくる《ホープ》が避けるには機関で加速するにしろEOMエオムを使うにしろ労力が必要になる。

『火速　ブーストアップ!!』

《ホープ》はEOMエオムを使って加速した。

《スカイ》と《ホープ》が交叉する。

金属どうしがぶつかる、火花を散らす、音を鳴らす。

そのまま鏖迫り合いをするでなくお互いは切り抜けた。

そして立場が逆転する。

《ホープ》が上位に立ち、《スカイ》が下方にいる。

『甘いわね。攻撃が甘すぎるわ。せつかな有利な状況を無駄にしたわね』

『クッ』

確かに、《ホープ》にほとんどダメージを与えることが出来なかった。出来たとすれば、《ホープ》にEOMエオムを使わせたぐらいであった。確かに《ホープ》は《スカイ》に対抗する為に多量のエネルギーを消費したであろう。だがそれまでの飛走を鑑みると《スカイ》の方が多量にエネルギーを消費していた。

実際、下る時には《スカイ》の燃料は残り30%を切っていた。

クリュウはこれ以上をスカイを下らせないように舵を切った。

『早い、早すぎるわ』

(あ!!)

クリュウはここで始めて自ら飛走ミスを犯した。

舵を切るのは上位の相手が舵を切るのを見てからで良かったのだ。下位が先に曲がればそれに合わせて、上位の相手もそちらに曲がる。これは決定的なミスであった。

《スカイ》が先に舵を切らなければ、アイザは昇り続けることしか出来なかったはずであった。

《ホープ》が下り始める。

《スカイ》には先ほど《ホープ》が行ったような芸当は出来なかった。

それを行うほど燃料が、無いのだ。

ここで加速してもあまり意味は無い。

クリュウには剣を抜き相手を迎え撃つ他なかった。

『雷装 エレ・エナジー』

ここにきて《ホープ》は下る際に駆動を雷魔駆動に変えていた。
当然EOM^{エオム}も雷属性に変わっている。

《ホープ》の刃が雷を帯びる。

《ホープ》が剣を 《スカイ》はそのままの剣で受け止める。
剣を通して、電気が《スカイ》にダメージを与える。それだけでなく、《スカイ》の剣にヒビが入る。

(まずい!!)

クリュウは、瞬時にEOM^{エオム}を使うようにOSに指示を出す。想定されていなかった分、少しラグが生じたが……EOM^{エオム}が使用可能になった。

「火速 ブースト・ブスター!!」

アイザは罅迫り合いになることを想定したのだろう。剣を押す力が増した。

だが、

『に、逃げた!!』

クリュウは剣を捨てて、ブースト・アップより優る瞬発力で離脱する。

(何故、ここにきて逃げるの!?)

本来あの場面であれば、ブースト・ブスターによって罅迫り合いに持ち込むのが正しかったはずだ。

《ホープ》の電魔駆動もアイザが思ったより性能が低く、馬力が出ていなかった。

ブースト・ブスターは瞬発力が高い分、その加速時間は短い。
逃げるには使うしかなかったとはいえ、どうして、倒すという選択

肢を行わないのか……。

アイザは悪寒に近いものを感じる。

（何！！何をしようとしているの？）

長年の2RBにおいて感じたことの無い嫌な予感をアイザは感じる。

『火速　ブースト・アップ！！！』

（ここにきてまた、火速ですって！？）

《スカイ》に乗っていたアイザだからこそ分かる。《スカイ》の燃料は、その飛走距離を考えるにもう底を尽きかかっている。

それを分かっているながら、クリュウはEOM^{エオム}を使用した。温存するのではないという露骨な選択をした。

アイザはありえない1つの勝利条件が頭に浮かんだ。

（まさか……オーバーラン……）

オーバーラン　2RBにおいて定められた距離を走りきることによって勝利するということを意味していた。だが現在において廃れている勝利条件でもあった。元々、お互いに力が互角であり勝負がつかなかった際にこの距離を走りきった者を勝者としてよう、と制定されたルールであり、超攻撃力、短期決戦が主流の現2RBにおいて、この勝利条件を満たした者はここ十年いないはずである。

もし、初めからオーバーランをクリュウが目的としていたのならば、最初の走り方からして合点がいく。

「そうは……！！！」

エンジンに火を灯し《ホープ》がスピードを上げる。

「させない……！！！」

EOM^{エオム}を使用し、最後の攻撃を仕掛ける。

燃料が底をついた《スカイ》は攻撃を防ぐ手段も無く。脱線し、海に墜落した。

「お嬢様、お見事でした」

《ホープ》を降りた、アイザは汗だくであった。

見ていた立場からすれば、それほど接戦したようには見えないのである。アイザの疲弊している様子をみてゴンドは不思議そうな表情をしている。

「……データを」

「はい、こちらに」

ゴンドはすかさず《ホープ》の飛走データをアイザに手渡す。

「これじゃないわ、《スカイ》との戦闘データは！」

「それは……ごさいません。申し訳ございません」

本来これは、《ホープ》の飛走テストである。旧機のデータは取っているはずが無かった。それでも、主の期待にこたえられなかったことを悔いゴンドは真摯に頭を下げる。

アイザも当たり前のことに気がつき冷静になる。

（危なかったわ、本当に後数メーヤで……オーバーランだったかもしれない）

見れば引き上げられた《スカイ》からクリュウが降りてきているところだった。《スカイ》はボロボロでこれではゴンドの言うとおり表面だけ直して貯蔵するしかないかもしれない。降りてきて早々クリュウは、アイザと出合った当初のように頭をぶたれていた。

だが、彼の表情には悔しさのようなものが浮かんでいた。

（正面から……しかも、ヨー・アイザに……しかも、オーバーランで勝ちに来ようなんて）

ギヤアギヤア騒いでいる工房の一面を見ながらアイザは思う。

（面白い、なんて面白いヤツなの、クリュウ・イワサギ）

アイザは堂々たる舞台上で、クリュウが駆る彼のHSAと戦いたい。そう思った。

空を走れ！！（後書き）

いきなり2話投稿です。

今回はバトルシーンまで、連続で投稿しました。

楽しんでいただけたら幸いです。

今回2個目のオリジナル小説になります。練りに練ったネタを放出した形となりました。ジャンルのにも前作よりも受け入れられやすい物になっていると思います。

これからよろしく願います。

鬱憤

(HSAはキライ)^{ハイサ}

油臭い工房を通りながら、サリナはそう思う。

サリナはHSA^{ハイサ}が嫌いだった。はたから見ればありえないことかもしれない。サリナほど、子どもの頃からHSA^{ハイサ}に関わり続けた者もないだろう。

「嬢ちゃん、おかえり!」

工房の古株、ハタが学校帰りのサリナに声を掛ける。

「ただいま、ハタさん」

この工房で働く人は皆親みたいなものだった。でも一人だけ気に入らない者もいる。

(ライナーはもっと嫌い……)

最近、この工房で働き始めた……HSA^{ハイサ}の話となると、子ども様にはしやぎだす少年。サリナは彼が喉に刺さった骨の様に感じていた。

「……いい機体ね」

サリナはハタにそう言った。

嫌いでも、子どもの頃からHSA^{ハイサ}ばかり見てると自然と見る目も養えて来る。

「だろ!! いいHSA^{ハイサ}だよなあ!」

サリナの言葉に、ハタではない少年が口を挟む。

「……」

「いいなあ、こういうHSA^{ハイサ}が欲しいなあ」

少年は目を輝かせてそう言う。

(この目……)

何か、面白くない。

「うん、どうした?」

少年は話を中断してサリナの様子を伺う。

「……フン」

サリナはまるで少年が目に入らないかのように工房を後にする。

「私は、HSAハイサモライナーも大っツ嫌い！」

「なんだってんだよ」

捨て台詞を残して去ったサリナに対してクリユウはそうこぼす。

「……ボウズ、サリナちゃんに嫌われてるなあ」

ハタはクリユウを哀れむ。

「あんなにいい娘が、なんでボウズだけを……ハッ！！」

ハタが何か思いついた様だった。

「……ボウズ……お前、嬢ちゃんに何か疚しいことしたんじゃないかね
だろうな！」

「いや……」

「テメエ、俺の孫……いや子どもみてえな嬢ちゃんに手を出してみ
ろ！！ 三途の川を3回渡してやる」

工房の面子は皆サリナを猫可愛がりしていた。だから、何かあつ

た時には誰もが必ず気づく。

「誤解だ！！ なんでオレがあんな奴を……」

「あんな奴……だと……」

「しまった！！」

これは失言だった。

「テメエ……嬢ちゃんのどこが気に入らねえつつんだ！！」

「オレにどうしろっていうんだよ！！」

クリユウはハタに胸倉を掴まれながら思わずそう叫んだ。

「相変わらず、ここは賑やかね」

そんな騒ぎの中、上品な声が工房に響いた。

「おお、いらつしやい」

「どう？ 調整は」

アイザがHSAハイサに乗る時とは違う、お嬢様然としたドレスとも取

れる私服姿で現れる。

「バッチリでさあ。とはいっても御嬢の方が絶好調だな」

アイザは《ホープ》に乗り換えて以来、素晴らしい戦果を上げていた。中には2RBにならなかったとすら言われる試合も多々あるほどに。

「そうね。この子は最高ね」

アイザは満面の笑みでそう言った。

その笑みがチクリと、クリュウの心に刺さった気がした。

「どうしたの？ ムっとした顔して」

アイザがクリュウの顔を年相応の表情で覗き込む。

「なんでもねえよ……」

クリュウはアイザから視線を逸らす。

「御嬢、コイツあさつき女に振られたばっかだね」

ハタが、クツクと笑う。

「あら、まあ」

冗談と分かって、アイザも笑う。

「違えよ！！！！」

だがクリュウは大声で怒鳴った。

ハタもアイザも目を大きくして驚いた。

「チツ」

クリュウはバツが悪くなり、その場を後にする。

「なんだかなあ……」

クリュウは一人になってそう漏らす。

最近アイザは、よく工房を訪れる。《ホープ》の調整として何度もアイザは工房にHSAハイサを持ち込んだ。その度にクリュウはアイザと相手を行った。

その度に自分でお金を出すことなくHSAハイサに乗れて、しかも報酬を多く貰えた。

だがそれなのに、最初の《ホープ》と《スカイ》の2RB以来、回を増すごとにHSAハイサに乗っていても満足することは無くなってし

まっていた。

「はあ……」

クリュウのため息は増すばかりであった。

ハタとの会話後アイザはアドウの元を訪れた。そこにはゴンドの姿もあった。

「おお、御嬢」

アドウはアイザを見てヒラヒラと手を振る。

アドウとゴンドは、ちょうど決算をしている様子であった。それも普通の光景とは大分違った。

「ですから、受け取ってください」

色を付けて、多めに費用を受け渡そうとする、ゴンドに

「駄目だ。受け取れねえ」

と、それを拒否するアドウ。

そのように立場が逆転していた。

「御嬢、これは受け取れねえよ」

最後にアドウは、アイザに向かってそういった。

「そう……、確かに、これは貴方のプライドを傷つけるものだったわね。ごめんなさい」

アイザは真摯に詫びる。

「そんなんじゃないよ。これはただの下らない老人の意地なんだよ」

そうアドウは啞えた煙草を口から放し、紫煙を吐き出した。

「それはそうと、調子いいじゃないか」

アドウは話題を変える。

「そうよ。そうなのよ。あの子の走りっぷりったら……くう~~~~」

身悶えるようなアイザの素振りにアドウとゴンドは苦笑する。

「調整は完璧。テスト飛走の相手も悪くない……いや、そこら辺の

ライナーに比べれば格段に上……」

そう言った所でアイザはハツとする。

「そういえば、最近の彼おかしくないかしら？」

付き合いが長い訳ではないがアイザが抱くクリユウの印象は、常にHSAの前では子どもの様にはしゃいでいる少年だった。

ところが最近の彼は、まるで膨らんだ風船が張り裂けそうな……、そう感じていた。

「そりゃあ、そうたる」

アドウは既に理解しているようであった。

「どうして？」

「おめえさん自身がHSAハイサに乗れるが2RBが出来なったらどう思う？」

そんなこと考えられる訳が無い。

「何をバカな……あつ！」

その訳が一瞬で氷解する。つまり、彼は目の前に人参をぶら下げられた馬状態。HSAハイサには乗っているのに2RBに出れない、だから気持ちが悪転してしまっているのだ。

「と、とんだHSA馬鹿ね。しかも、ガキじゃない」

自分の気持ちも律する事が出来ないなんて、とアイザはクリユウをそう評価した。

「プツ」

するとアドウが噴出した。

「ハッハハハハ！」

それはもう、部屋中に響く大声だった。

見ればゴンドもアイザから顔を逸らして口を隠して、笑っている。

「な、何よ……」

アイザはむくれた。

「ヒツヒツ。いや……腹が……擦れる」

苦しそうにアドウがそう言う。

「元祖お子様HSA馬鹿のおめえさんがそれを言うか。はっはっは」

「は」

アドウの爆笑はしばらく収まりそうになかった。

アイザが再び飛走都市を離れて、何時もどおりの工房のある日、
「……ってー!!」

アドウの怒鳴り声と共にゲンコツがクリュウの頭に落ちた。

「テメエ、今日何回目だ!!」

余りにもミスが立て続きアドウが鉄槌を下したのであった。

「もういい、オメエは明日来るな」

（ク、クビ!?）

クリュウはこの世の終わりが来たように落ち込む。

「何おちこんでやがるんだ。久々の休みだろうが、羽を伸ばして来い」

「え……は……ははは、休み……か」

ホツと胸を撫で下ろす。

「なんでも中古のHSA^{ハイサ}市があるらしいじゃねえか。そこにでも行って自分の身の丈でも理解して来い」

アドウは戒めるつもりでいつているのだが、等の本人は、

「親方、それ本当!？」

飛び上がらんばかりに浮かれていた。

（そうか、中古か!）

中古のHSA^{ハイサ}ならひよつとすれば手が届くかもしれない、そうクリュウは心躍らせた。

で、翌日。

「ココ、ドコ？」

クリュウは、街の中で迷っていた。

飛走都市スカイレイルは、大きく分けると工業区、居住区、スタジアム区と3つに分けられる。それぞれ3つは迂回することなく行

き来が出来る。

だが、今回HSA市が行われるのはスタジアム区と居住区の間
のイベント開催であった。

居住区を通って、イベント開催地にショートカットしようと思っ
た末の悪策が裏目にでた。

思ってみれば、クリユウはこの飛走都市スカイレイルに来て以来、
工業区とスタジアム区以外行ったことがなかった。

ものの見事に迷子だった。地図を片手に歩いているものの、居住
区はレンガ造りの2〜3階の建物が入り組んでいるのでまったく頼
りにならない。

「キャッ」

「うお！」

地図にばかり目がいつてしまった為か、曲がり角で人にぶつか
ってしまふ。

「ご、ごめん」

「どこ見て……って新入り!?」

ぶつかった人物は、顔見知りの少女であった。

この人物がクリユウにはこの瞬間神にも見えた。

「さ、サリナちゃん……」

「うわ、何泣いてるのよ!!」

突然涙を浮かべた、クリユウにサリナは動揺した。

「道に迷ったって馬鹿じゃないの」

サリナはそう言って切り捨てる。

そう口では言うもののサリナは学校帰りだと言うのにきちんと道
案内をしてくれていた。どうやら学校は今日午前中で終わりだっ
らしく、それにクリユウは救われた形になった。

「なんだって私がHSAなんかのところに……」

そついうサリナの後姿は、明らかに不満に満ちていた。
クリユウはそう言うサリナに1つの疑問が浮かんだ。

（どうして、そんなにHSAを嫌うんだろう）^{ハイサ}

サリナはアドウの孫である。もし自分が常にHSAと関われる環境にいたならば嫌いになる要素は全くない。

「どうして、サリナちゃんはHSAが嫌いなんだ？」^{ハイサ}

聞いてみるが、

「……」

無視されてしまったようだ。

「ほら……着いたわよ」

明らかに、嫌々案内しました、と言う態度でサリナは言う。

「うおお、すげええ！！」

見ればそこは、HSA^{ハイサ}だらけ。クリュウからすれば天国の様な場所であった。

「もういい？ 私は帰るけど」

そう踵を返そうとする。

「待って！」

そついいクリュウは、サリナの手を掴んだ。

「ちょ、な、何よ」

「帰り道……分からない」

サリナに案内されている間、考え事をしていたので道順などまったく覚えていなかったクリュウは縋り付く。

「分かったわよ！！ 待つてればいいでしょ！」

サリナはヤケクソ気味にそう言った。

（ハア……子どもは良いなあ。お気楽で）

サリナはベンチに腰掛けて頬ずえを付く。

正直こんな所にいたくもなかった。

（でも放って返ったら、じいちゃんに何言われるか分かんないし）
クリュウといえば先ほどから色々なHSA^{ハイサ}を見て回っては大はしやぎをしては落ち込んでいる。

すっげえ、このHSAハイサ欲しい！！

そして、

「ゲエー！！ 高けえ……」

（大方、そんなとこなんだろうけど）

その姿は挫けては立ち上がる、まるでダルマのようだった。

「ふつー、女子一人おいてうるちよろする？」

ぼそつと愚痴がこぼれる。

見れば意外とカップルも多い。平日と言うこともあり2RBが行
われないので、こういうとこしか見るところがないのかもしれない。

（ああいう、甲斐性の一つでも見せればいいのに）

見れば制服を着たカップルが仲良さそうに歩いている。

「いやいや、ムリムリ」

一瞬、クリユウとそうして歩いている姿が目に見え、その光景
を、一蹴した。

「あ、喧嘩してる」

サリナが少し目を離れた隙に、さっきまで仲が良かったカップル
は瞬時にして仲違い……お互い背を向けてしまっていた。

（所詮恋愛ごっこか）

ふつと、分かれた娘の方と目が会う。

「あれ、サリナやないか」。どないしたん、こんなところで」

「なんだ、ソラか」

それはクラスメイトの一人だった。

「なんやん、珍しいなあ」

「それより、いいの？ 彼氏放っておいて」

「ええのええの、どうせ頭冷やしたら帰ってくるやろ」

ソラはあっけらかんと笑う。

「なんや、HSAハイサのライナーになりたい、言ゆうから、アンタならな
れるんちゃう？、って言ったら急に怒り出してしもつてな。難しい
なあ、男の子は……」

「男子なんて皆ガキよ」

クリユウを思い浮かべてそういう。

「そこが可愛いやんか」

ソラがそう言う意味は、サリナには全く分からなかった。

「そっぴや、サリナはそういうことに興味ないん？」

「別に……」

「でも、……ほら、あそこで男の子がこっちに向かって手を振ってるよ」

サリナが顔を上げればクリユウがこっちに向かって手をブンブンと揺らしていた。

顔色が変わったのを見て、ソラがちやかす。

「やっぱ、アンタも虫付きやったんやないか。ほら、手を振りかえしてあげな」

「違う違う、そんなんじゃないって」

本当に違うのだから、サリナは焦る。

「あれは……その……そう、飼い犬の散歩みたいなもんよ」

祖父が雇い主なのだから、間違いではないだろう。

「うわっ！ ワンワンプレイかいな。やるやん、サリナ。そないな風には見えなかったわ」

「わわわわ、違う違う違う！！」

クリユウとサリナは年も似ている。考えて見ればそう言う風に取りられてしまってもしかたがなかったかもしれない。

「それより、ええの？ 行って上げなくて？」

「だから、違うんだってば！！」

いい加減にしてくれ、そうサリナは思う。

「うわ！！ なんかグラサン掛けたのが、ニーちゃんに話しかけるで、行かなくてええん……？」

ソラのその言葉にサリナも目を向けてみれば、クリユウと似たような背をしたサングラスの男がクリユウと話している。

「い、いいのよ。犬なんだもの、自分で勝手に何とかするでしょ」

サリナはフイッと顔を背けた。

（知らない、知らない……）

そう無視を決め込むつもりでいた。

「ほ、ホントにええん？ ニーちゃん懷から札束取り出したで……」
その言葉を聞いて、サリナは全速力で駆け出した。

「おう、任せときな」

「頼んだぞ」

クリユウはすつと手を離す。

そこへ、

「どりゃあああー！」

そんな張り上げ声と共に、クリユウに向かってドロップキックが飛んできた。

クリユウは悲鳴を上げる間もなく横薙ぎに飛ぶ。

クリユウが倒れこむとその上に馬乗りになるようにサリナが着地する。

「グフツ……」

「ちっ外した」

そうサリナが舌打ちする。

「なんだか分からんが、じゃあな……」

そついうとサングラスの男は背を向け逃げるように立ち去る。

「あ、こらー！ 待ちなさい！」

そついつて、サリナはサングラスの男を追いかけてよつとする。

「わわ、サリナ待ちーな。このニーちゃん白目向いとるで！」

サリナの後を追いかけてきた、ソラがあわててそつ言う。

「ちよつと、何気絶してるのよ！ 早く追いかけないとー！」

クリユウを掴みガクガクと振る。

「振ったらアカンー！」

その場でクリユウが目を覚ますことはなかった。

体のいたるところが痛い。頭部に鈍痛、腹部に激痛。
クリユウはうつすらと目を明ける。

日はいつの間に傾いたのだろうか。空は赤く燃えていた。
下は草むらなようだ。青臭い匂いがする。それでいて、首筋はほんのりと温かく心地よかった。

痛いところを摩るような感覚がある。

「……サリナちゃん？」

どうやら、自分はサリナに膝枕をされていることに気が付く。
あのサリナに膝枕をされていることに驚き、起き上がろうとする。
「待って!!」

サリナはそう声を出す。

実際起き上がろうとしただけで、眩暈がした。

「……もう少しそうしていなさい」

「……ごめん……」

「なんでアンタが謝るのよ。悪いのはこっちよ」

サリナがふてくされた顔になりフイツと顔を背ける。

「それにしても、なんであんなにお金持ち歩いてるのよ」

「なんでってそりゃ、^{ハイサ}HSAを買う気でいたからさあ」

「……呆れた。そんなんだからカツアゲになんか会うのよ」

(カツアゲ?)

疑問に首を傾げそうになって、頭に痛みが走った。

「こら!! 大人しくしなさい」

サリナはそう言ってクリユウの頭を戻す。

「……アレ、アンタの全財産でしょ? ^{ハイサ}HSAを買うために貯めてきた」

サリナは悲痛そうな顔をしている。

そこでクリユウはサリナが勘違いをしていることに気が付く。

「サリナちゃん違うんだ」

「へ?」

「アイツ、あれ？ 名前なんつったかな、まあいいや。アイツ、タヌキってあだ名で呼ばれてる、昔なじみでさ。まあ、金にガメツイ男なんだけど、アイツがHSAハイサ譲ってくれるって言ってさ」

ようやく、痛みが引いてくる。少しふらついたが啞然とするサリナの膝から頭を上げる。

「それでも、ありがとう。心配してくれたんだな」

クリユウはサリナを立ち上がらせる為に手を出す。

「ば、ば、馬鹿じゃないの！？ 心配して損した」

プイッと顔を背けた。

「でも、心配されたってことは嫌われてた訳じゃないんだな。オレ、てつきりサリナちゃんに何かしたんじゃないかって……」

「き、嫌いよ。大嫌いよ！！」

サリナはクリユウの手を借りずに立ち上がる。

「……帰るわよ」

「ああ」

クリユウはサリナの後を追うように歩く。

「……ところで、新入り？」

「うん？」

「アンタ、HSAハイサを買ったって置き場所はどつする気？」

「あ、っ……！」

確かに6メーヤもする巨体その辺においそれと置いておけるものでもない。

「やば、早く帰って親方に相談しないと」

ひよっとしたら空いてるハンガーの一つぐらい借りられるかもしれない。

クリユウは早く帰ろうと走り出す。

「ま、待って。アンタ帰り道も知らないくせにどう帰るつもりよ！！」

クリユウとサリナは大声を出しながら家路に着く。

赤く燃える夕日が二人の間にあった距離を少し縮めたようであっ

た。

鬱憤（後書き）

こんばんは。

3話投稿です。ご覧になってくださった方、どうもありがとうございます。

ドラコの中からですが1話毎に新キャラを出す癖が抜けない気がします。

次回、とうとう主人公のHSA^{ハイサ}が登場です。

皆さんの感想をお待ちしております。

錆色の壊身

「きたきた」

ハイサ H S A 中古市でタヌキに会ってから3日後。タヌキに手配された配達業者が、輸送用の2機の^{ハイサ} H S A が貨車にブルーシートの掛かった荷物を運んでいる。

「あそこのトタンの建物に入れてくれ」

クリユウは、配達員に指示を出す。

指示を出したそこはアドウ工場の旧ハンガーである。元々廃材置き場となっていた一角をクリユウはアドウから借り受けた。もちろん無条件ではない。賃貸料は少しであるが給料から天引きされるし、工場の面子は誰一人として力を貸してはくれない、という条件の下であった。

だがクリユウは、燃えていた。元々、^{ハイサ} H S A に関することは中退したアカデミーで習っていたし、わずか半年ではあるがこの工房で働き、修理に携わっていた。

ハンガーに2機の^{ハイサ} H S A に持ち抱えられるよう、ブルーシートで覆われたクリユウの^{ハイサ} H S A が運ばれていく。

「よし、やってやる」

運びこまれる^{ハイサ} H S A を見てクリユウは覚悟を決める。人生初の自分だけの^{ハイサ} H S A。これで心が躍らない訳が無い。

しかし、ここから始まる苦難にこの時のクリユウはまだ気がついていなかった。

「お母さん！ 新入りのご飯は？」

「そこにあるわよ」

工場の一角には併設するようにアドウとその家族が住む家がある。サリナは母親に言われたご飯をトレーに乗せる。

「あら、珍しいわね。サリナがクーちゃんにご飯を持っていくなんて」

サリナの母であり、アドウの義娘でありながらサリナと並んでも姉妹にしか見えないルリは、クリユウのことを「クーちゃん」と呼んでいた。

「別に……、ただアイツこっちにも戻ってこないからさ。もし餓死なんかしてたら、こっちが困るじゃん」

「ブツ」

母は含み笑いをする。

「何よー!!」

「別に」。ただ、サリナが珍しくクーちゃんに優しいなあって」

「もう、そんなんじゃないんだてば」

^{ハイサ} H S A の中古市の一件以来皆が、サリナとクリユウはこのようにからかわれていた。ハタにいたっては、鬼の形相でクリユウを問い埋めていたほどであった。

当の本人^{ハイサ}クリユウにいたっては、^{ハイサ} H S A が到着して以来、仕事と自分の^{ハイサ} H S A の修理に追われ、下宿しているこの家には一切帰ってこない。そういう日々がもう5日も続いていた。

ただ、そういう彼を見ているとただの子どものような人物ではなかったことを思い知らされた。^{ハイサ} H S A に向かつては一直線、よく言えば真摯であった。浮かべる表情はサリナがいつも見ていたような子どものようなものだけでなく、とても真剣で言葉をかけることが躊躇われる。そんな様子も多々見受けられた。

(少しは応援……って訳じゃなくて、協力してあげてもいいかな)

サリナは少しそう思うようになっていた。

「新入り!! ほら、ご飯ぐらい食べなさいよ」

サリナが旧ハンガーにやってきてクリユウを呼び止める。

「うーん、ああ」

クリユウはいまいち気乗りのしない返事をする。

「ちよつと、新入り？」

「うお、サリナちゃん！？」

「なによ……」

サリナは膨れる。

「いや、いると思わなくて……あーびつくりした」

「わざわざ、晩御飯持ってきたのに、その言い草は何よー！」

「いや、ごめんごめん」

クリユウは平謝りをする。

「そんなにHSAの方が大事なの？」

「うーん、なんていうか早くコイツを動かしてやりたくてさあ」

クリユウは熱く語る。

「はいはい、HSA馬鹿はもういいって。ほら、洗い物片付かないから食べちゃいなさいよ」

クリユウは急かされて食事ハイサに手をつける。

その間にサリナは、クリユウのHSAハイサを見ているようである。

「ちよつと、新入り……これ本当に動くの？」

クリユウは自分のHSAハイサに目をやる。

ハンガーに置かれているHSAハイサは、確かにみすばらしい。

HSAハイサと呼ばれる人造機人はその名の通り、人の形をしている。

と、いうよりもHSAハイサは人の形をしていなければ動かすことは出来ないハイサとすら言われている。

「HSAハイサつてさ……」

クリユウは食事の手を止める。

「……実をいうと、直すのは恐ろしく簡単なんだ」

「え、そうなの？」

サリナは意外そうな顔をする。

「HSAハイサを動かす為の技術って言うのはもう一世紀近く変わっていないんだよ」

「そんなの嘘よ」

ハイス
H S Aの技術は日々進歩している。そして常に現れる目新しい新技術が2 R Bのファン達を魅了する。それがH S Aの魅力と言われている。

「普通そう思うだろ？ だから、オレもこのことを知ったときは驚いたんだ」

クリユウは爛々として語る。

それに対してサリナは面白くなさそうであつた。

「もったいぶらないで早く言いなさいよ」

「ごめんごめん。」

ハイス
H S Aが、2つの力で動いているって事は知ってる？

これは、H S Aに関わる人間でしか、知らない知識かもしれない。実際、サリナも疑問を浮かべた顔をしている。

2 R BのルールにH S Aにあらかじめ搭載する動力源は一つでなくてはいけないと定義されている。これが誤解を招く一つの要因となっている。

ハイス
「それじゃあ、サリナちゃんはH S Aを2つに分けるとしたらどことどこで分ける？」

「そうね……人の形をしている部分と車輪かな」

サリナのいうその回答は正解であつた。

「そうその通り。そしてね、普通の人はA l l o y部分……って人の形をしているところが重要だと思うだろ？ でも、そうじゃないんだよ。一番重要なのは、車輪を動かす為の動力なんだよ」

「どうして？ 走っているのはそのA l l o yの部分でしょ」

ハイス
H S Aは確かに、空を滑走する。だが走っているのはA l l o y 人造機人なのは変わらない。ローラスケートに乗っている人間とスケートどちらが走るのに重要かと問われれば、もちろん人間だろう。

ハイス
「でも、そこが違うんだよ。H S Aには、魔油液と呼ばれる一般的なディーゼル機関と最近登場した魔雷駆動の電気機関があるだろ。この2つが違う点はどのエネルギーで車輪を動かしてるかってだけ

なんだ」

「つまり、A l l o y部分の構造は一緒ってこと？」

「そうそう。で、どうして動力と車輪を動かすことが重要かって言うと、H S AのA l l o y部は実は車輪を動かすために作り出した時に生まれる、”魔素”^{まそ}という力によって動いてるんだ。

これで分かったでしょ。つまりH S Aは、エネルギーによって動力を生み出さないと”魔素”が生まれなくて、A l l o yが動かないんだ」

そうクリュウは、子どもが母親に新しいことを発見したことを語るように嬉々として言う。

「それなら、このオンボロ直すのも簡単なんじゃないの？」

「そう！ そんなだよ」

クリュウは突然大声を上げる。サリナが驚きビクつと体を震わせた。

「問題はそこなんだよ。何で動いてたのかまるで分からないんだよ」
頭を抱える、クリュウ。H S Aを見上げると、コレがただのH S Aで無いことがよく分かる。通常、2 R BのH S Aは軽量化に勤めている。これは、軽いほうが減速、加速が容易になるからである。2 R Bは戦況が移り変わる競技であるので、身が軽い方がメリットは多い。

それに比べてこのH S Aはそこが違う。例えば”ディフェンダー”と呼ばれるクラスのH S Aは、相手の攻撃を被弾することがある為、”ファイター”、”ソーサラー”に比べれば装甲が厚い。このH S Aはその”ディフェンダー”が鎧を着ているかというほど装甲が厚かった。

それだけでなく、更に特異点とも言える部分がある。H S Aの胸から腹の部分にかけて、動力部分 ここには全ての機体に動力が積んである。このH S Aとて例外ではない。だが、その円筒状の動力部が明らかに飛び出ているのであった。

この様なH S Aをクリュウは見たことが無く、そのことで3日も

の間、手を焼いていたのであった。

「あ！ ちょっと新入り！！ まだご飯食べてないの！？」

「ごめんごめん。今食べるから」

サリナに怒られ、クリユウは再び食事に戻る。

一通り食べ終わると、お茶を飲み、湯飲みをトレーの上に置いた。

「それにしても、サリナちゃんってさ」

「何よ」

食べ終わって一息ついた、クリユウは今気がついたことをサリナに投げかける。

「サリナちゃんって、自分で言うほど^{ハイサ}HSAが嫌い……っていうより、好きじゃなくないでしょ」

サリナはその一言で目を大きく開かせた。

「はっ！？ なんでそんなこというのよ」

「だって、嫌いだったらこんな話聞いてくれないだろ？ ほら嫌いじゃないじゃん」

クリユウにとってみれば、^{ハイサ}HSAも2RBも嫌いになる要素はま

たく無い。だから、このように好きなことを前提に考えてしまう。

「な、何を馬鹿なこと言って……るのよ。私は嫌いよっ！！ ^{ハイ}HS

^サAも……ライナーも……大っっ嫌い！！」

サリナは、食事を運んできたトレーを持つとまるで逃げ出すように立ち去ってしまう。

ボタンと思いつき、ハンガーのドアを閉じられてしまう。それはサリナの心情を表しているようであった。

それから、僅かに時間を置いて、

「ありやりや、クリユウ……おめえとんでもねえ地雷踏んだなあ」

サリナと入れ替わるようにハタがやってくる。

「ハタさん？」

「クリユウよう。おめえは餓鬼だから……なんつーんだっただか……そうデリバリーが足りねえんだよ」

「……ハタさん……それを言うならデリカシーだろ」

そういうと問答無用でゲンコツが飛んでくる。

ハタもアドウより少し若いぐらいなのに、その力はその年を思わせないぐらい強く脳天に強く響いた。

「ったくよう」

ハタはポケットから紙巻タバコを取り出すと火を付けた。

「なんでも、嬢ちゃんが最近おめえと仲いいから、心配になって覗きに來たら……結局、嬢ちゃんは嬢ちゃんのままだったな」

ハタは紫煙を吐き出し、なんともいえないような、いまいち感情が分からない顔をする。

「それにしても、どうやって嬢ちゃんと話出来るようになりやがったんだおめえは……！」

そついいハタはタバコを地面に投げ捨てると、クリユウの首に腕を絡めて絞める。

「な、なんもして……て、ちょっと、ギブ、ギブ」

「HSAなんか買つてきやがっ、て……………」

絞まっていた腕が急に緩む。

「クリユウ、おめえ……コイツが何なのか分かつてるのか？」

「っ……！」

その言葉をクリユウは聞き逃すことが出来なかった。

「ハタさん……！何か知ってんの……！」

「いや……まあな」

動力が分からなくて頭を抱えていたクリユウはその言葉に飛びつきそうになった。

「あああ……！でも、親方から工房の人に手助け貰うって言われてるんだよなあ……」

クリユウは再び頭を抱えた。

ハタは無言でクリユウと、そしてこの錆色の壊身を眺めた。

「親方あ。入っていいかい？」

工房に隣接するように建つアドウ宅。ハタはクリユウのハンガーを尋ねた後、アドウに会う為に夜も遅いがアドウの部屋を訪れた。
「入んなあ」

肯定の言葉を受け、ハタは扉を開ける。

そこでアドウは一人で晩酌をしていた。

「ハタさん、久しぶりだなあ。まあ、ここに掛けなよ」

ハタが椅子に腰掛けると、アドウは机に置いてあったもう一つのグラスをハタに寄越す。

「悪いね。これ親方の取って置きだろ？」

ハタは瓶を傾けて、質の良い紫色の液体を自分のグラスに注ぐ。そして、グラスが空きかけていた親方の方にも注ぐ。

2人は、チンとグラスをぶつけ合うとグラスに口をつけた。

「いやあ、年寄りになると小便も酒の切れも悪くなっていけねえ」
「はっは、違うない」

机上にある酒の瓶の隣にはいくつかの書類が置いてあった。

「親方、これは？」

ハタが書類を手に取り。

それは、2RBの日程表であった。それも実力者が出るようなAランクやBランクの試合ではなく、Cランクのものであった。

ライナー達にはそれぞれ格付けされており、それはS、A、B、Cと分けられていた。Cランクとは、ライナーが始めに格付けされ、いわゆる出発点となるランクであった。そして、Cランクではもっとも多く2RBが開催されている。だがそれでありながら、実際ライナーの出発点となる2RB自体は少ないのが実情だった。

「今は、学校出て……そのまま学校が主催の試合にでてデビューするライナーが多いからなあ」

ではそれ以外の2RBがどうなっているかというところ、2RBの主催者自体がお気に入りのライナー達を集めたり、莫大な出走料が必要であったり、知名度が必要であったりした。新規のライナーには、とても門が狭いのである。

「年を取るとと、これがいけねえ」

アドウは嘆く。

「実力のある若モンを見るとすぐに応援しちまいたくなる。自分で手伝うな」、といっておきながら情けねえ」

アドウはグラスの中の酒を一気に煽った。

（親方……きつと、それだけじゃねえよ）

その理由についてはハタもいまだに口にする気になれず、結局重く口を閉ざす。

だがそれとは別にハタはアドウに申し送らなければいけない、言葉があつた。

「それは、そうと親方。アンタ、クリユウのHSAハイサは見たかい？」

「いや、見てねえよ」

きつと、そうだろうとハタは思っていた。

「それなら、親方自身が助言してやったほうがいい」

そのほうがクリユウも納得するだろう、ハタはそう考えていた。クリユウは変にHSAハイサに頑ななところがある。恐らくハタが言っても言うことを聞かないだろう。

「いや、絶対に行かねえ。アイツは実力がある分、今のうちに苦労しとくべきだ」

酒の入ったアドウは何時も以上に頑固であつた。だがそれ以上にアドウには予感があつた。クリユウはライナーとして2RBをした以上必ず何かをしでかす奴だと。実際、アイザとのテスト飛走を取つてみてもそうだった。実際にアドウは気がついていて、あの2RBでクリユウが何をする気だったかを。

「……親方。一つ言っておくが、あのHSAハイサは走れない。そして絶対に勝てない」

ハタはそう断言する。

「馬鹿な。アイツなら4流、5流のHSAハイサに乗ろうが勝てるだろう」
クリユウは荒削りだが、Sランクのアイザ、Aランクのギトレーといった名だたるライナー達が持つような実力を秘めている。一度

その道に飛び込んだなら才覚を表すだろう、そうアドウは思っていた。

それに対して、ハタはまったく逆の考えを持っていた。今、クリユウにあのHSA^{ハイサ}を諦めさせないと、その才覚を潰すことになりかねないと。

「なら言うがな、アイツが買ってきたHSA^{ハイサ}は……どこで手に入れたのか知らんがな、とんでもないものだったぜ」

今度はハタが酒を一気に煽る。

「一目見てすぐ分かった。あのオンボロは、”S系”だ。まったく、どこで騙されて買ったんだか……」

その言葉を聞いて、アドウはあまりの驚きの余り言葉がでなかった。

錆色の壊身（後書き）

とうとうクリュウ専用機の登場です。

だが、その機体には様々な問題が……この後の展開にご期待ください。

ご意見感想を募集しています。

友人から1、2話の特に戦闘シーンが分かりにくいという意見をいただいたのでこれに対する修正も考えています。これが単に修正するのかそれとも新話で補うのかはまだ決まっていますので決まり次第ご報告します。

ディーゴ

現在主流になっているHSA^{ハイサ}の原動力は2つある。

一つは、魔油液といわれる液体状の化石燃料を燃料とするディーゼル機関である。これは、略称として”D系”と呼ばれている。”D系”のHSA^{ハイサ}は現在もっとも主流となっている。このHSA^{ハイサ}は燃料を燃やし、エンジンを駆動させるものである。そして、その過程で発生した”魔素”によってAiloy^{アイルイ}を動かすことが出来る。使用するのが化石燃料ということもあり燃料が軽く、沢山積むことが出来る。またD系が使用することが出来るEOM^{エオム}は火を用いたものになる。

二つ目が最新技術を用いた、通称”E系” 電気を用いた電魔駆動のHSA^{ハイサ}である。バッテリーと言われる貯電設備を用いることによって燃料を用いるD系よりも軽量化に成功している。電気は、発見された当初”魔素”が発生すること無いエネルギーであった。その為、近年までHSA^{ハイサ}の原動力として利用することが出来ない、とされていた。だが、魔油液等の”魔素”を含むエネルギーによって発電された電気には”魔素”が含まれていることが分かった。この電気を魔雷と呼ぶ。

また、EOM^{エオム}がHSA^{ハイサ}の動力に依存するので、E系のEOM^{エオム}は電気となる。

魔雷を原動力とするE系HSA^{ハイサ}はD系に比べて優れている点がいくつかある。それはD系に比べ、ラグが少ないことである。最もHSA^{ハイサ}の性能に差が出来るのが動力部分である。D系HSA^{ハイサ}が加速を行うにはエンジンに魔油液を送り込み燃料を燃やすことによって加速を行う。それ対してE系は魔雷をモーターに流すのみで速度を生み出すことが出来る。この過程が性能の差を生み出す。この僅かな差が勝敗に左右するほど2RBの世界は過酷であった。

「S系だと……!!」
アドウが目を開く。

D系HSA^{ハイサ}が生まれる前にもHSA^{ハイサ}は存在した。それは2RBと呼ばれる競技の黎明期でもあった。ライナーも、RBという言葉もまだ無く、HSA^{ハイサ}乗りと呼ばれる物たちが自分の飛走技術を競い合っていた。

そんな時代に存在したHSA^{ハイサ}が”S系”である。

S系HSA^{ハイサ}はアドウ達が若者と呼ばれた時代には既に姿を消しつつあった。現在S系HSA^{ハイサ}を見ることはまず無いだろう。

主なS系HSA^{ハイサ}の原動力は、魔炭石と呼ばれる固形状の化石燃料と水を使う蒸気機関である。蒸気機関はボイラーで魔炭石を燃やし蒸気を発生させ、それをシリンダーと呼ばれる筒に導き、蒸気の圧力でピストンと呼ばれる棒を動かし車輪を動かす機構である。D系と比べても加速までの手順も多く、最高速度も出ない。現環境でS系とはデメリットばかりしかないHSA^{ハイサ}であった。

長年、HSA^{ハイサ}に関わり続けてきたアドウが驚くのも頷ける。

「じゃあ、何か。あのボウズは札束叩いてガラクタ買って来たってことか」

アドウは両目の目頭を右手で摘む。

そう諦めにも近い声を出した。

元々立ち聞きするつもりは無かった。

ただどうして自分の祖父がクリユウにあればど頑なに力を貸す気が無いのか気になった、本当はそれだけであった。

だから、アドウとハタの話を聞いたとき、どうしても聞く耳を立ててしまった。

『じゃあ、何か。あのボウズは札束叩いてガラクタ買って来たってことか』

ドア越しにその言葉を聞いてしまったとき、足が勝手に動いた。

クリユウはまだハンガーにいた。

ご飯を食べ、体力も気力も回復したクリユウは、まず構造が分からない動力部を後回しにし、Alloyから手をつけ始めていた。

装甲部分の腐食から比べると中の状態は思った以上に非常に良かった。

クリユウは一つずつ装甲を剥がして行く。錆びているのでなかなか外れない部分もある。

奮闘することようやくご飯を食べる前から着手していた右足の足首部分をすべて剥がし終える。

思ったより、いや思った以上に中の腐食は少ない。

「下手をすれば、今すぐにでも動きそうだ」

そんな言葉が出るほど、表側と内側の落差が大きかった。

ともあれやはり問題があるとすれば動力部分であろう。こればかりは何か分からないので手をつけることは出来ない。

「おい！ ボウズ！！」

ハンガーのドアが開きアドウが大声を上げる。

「親方、どうしたんですか」

「ここに、サリナ来なかったか？」

クリユウは見えてない、と首を振る。

「工房にもいないみてえだ」

ハタが大急ぎでやってくる。

「……ったく、どこ行きやがったんだ」

聞けば、サリナは夜中に家を飛び出していったらしい。

「大方、ワシらの話を聞いていたんでしょう」

ハタはそう言う。

「あのHSA嫌いの癖に……なにをする気なんで……」

「親方。ワシが外見てくるから、このボウズに説明してやってくだ

さいな。その方が嬢ちゃんが行った場所も分かるかもしれん」

クリユウは夜道を走る。

目的地はタヌキの所であつた。

親方から話は聞いた。あのS系に属するHSA^{ハイサ}についてもだ。

サリナは恐らくその話を聞いてタヌキの所に向かったのだらうと思つた。

札束を渡そうとしたときに飛び掛つてきた……そんな彼女の姿がふと浮かんだのだ。

ここ数日サリナと一緒にいて分かったことがある。

サリナは、正義感の強い娘であつた。

(今頃、きつと……)

タヌキを探しに行ったに違いない。

それも嫌いだという、クリユウの為に。

だが、相手はあの神出鬼没のタヌキである。容易に見つかるとは思わない。

とりあえず、クリユウは住宅区を抜け先日中古市のあつた所まで行こうと思つている。

あと少しで着くというところで、口論……というよりも一方的に捲し上げる少女の声が聞こえた。

行つてみるとそこに、サリナと……タヌキがいた。

サリナはいかにも噛み付きそうな勢い、いや既に一発は叩^{はた}いているようであつた。

「はいはい、そこまで」

クリユウはサリナの手を引つ張る。

「……ちょ、新入り!？」

「いいから、帰るよ。親方もハタさんも心配してる」

「何言つてるのよ。アンタ、コイツから金取り返さないと!」

サリナはタヌキを睨み付けると、タヌキは「ヒィ!」と怯み声を

出した。

「お前、相変わらずビビりなのは変わってないのな」

タヌキは子どもの頃から何かといえば怖がる奴だった。そこを補う為かいつしか、口と悪知恵ばかり働くようになっていった。

「……っせえな。言つとくが金なら返さねえぞ」

「なんですって!!」

タヌキは再び体を震わせる。

さすが、アドウの孫というだけあって、覇気は祖父譲りといっても過言ではない。

「いいんだよ。サリナちゃん」

「どこがいいのよ。あの……あのお金は、クリユウ……アンタが夢を叶えるために稼いだお金じゃないの!? それをコイツが騙し取ったのよ!」

サリナの言い分は最もだった。だが、クリユウは少しも騙されたことを怒ってはいなかった。

なぜなら、クリユウは夢を諦めてはいないのだから。

「騙し取られてなんかいないさ。だってオレはあのHSA^{ハイサ}でライナになるから」

この言葉にはサリナだけでなく、タヌキまで啞然とする。

「無理よ!! おじいちゃん達が言ってたもの、アレはガラクタだつて!!」

サリナにはアドウ達の言う専門用語は分からなかったが、あのHSA^{イサ}が50年以上も前のモノで、それでいてあの外見を想像するにとても走りようが無いものだ、それだけは理解することが出来た。「無理じゃないさ。オレはあれからアイツ……オレは《ディーゴ》って呼ぶことにしたんだけど。あつ、これはね《ディーゴ》に張ってあった型番に”D5I4q5”って合ったから、頭をとって《ディーゴ》って言うんだけど。えっと、なんの話だっけ……そうそう。《ディーゴ》の装甲を剥がして見たんだけど、これが思った以上に状態が良くてさ」

クリユウはニコニコという。その顔には一切の迷いは見られなかった。

「つまり何が言いたいのよ」

クリユウの言葉からはいまいち要領を得られなかった。

「そうそうオレが言いたいの、《ディーゴ》を走らせるのは無理じゃないんだよ」

そうクリユウは言うが、サリナにはそう樂觀視することは出来なかった。たとえ走ったとしても、半世紀以上も前のHSA^{ハイサ}が今のHSA^{ハイサ}に勝てるとは思えない。

信じる事が出来ないというサリナの顔を見てクリユウは言う。

「だったら、見ててよ。オレはあのHSA^{ハイサ}で走る……だけじゃなくて必ず勝ってみせる。だから、サリナもHSA^{ハイサ}を好きに……」

そこまで言つてクリユウは一度口を止めた。

「いや、嫌いじゃなくなつて欲しいな」

なにか物事を嫌いになるには理由がある。 ”好き” じゃないものは、 ”嫌い” というのは極端である。もし本当に嫌いならば興味なんて一切持たないのじゃないか。もしサリナがHSA^{ハイサ}を嫌いな理由があるとすれば、嫌いになつた出来事があるのではないか。

と、クリユウはそう思つてその言葉を投げかけた、 ”自分が走るから、HSA^{ハイサ}を嫌いじゃなくなるきっかけになつて欲しい”、と。

それはまるで愛の告白のような言葉だった。実際クリユウはその台詞が余りにもキザでサリナの顔を正面から見られなくて、顔を背けているし。サリナも年齢の近い男性から真剣に諭されたことも無かったので顔を赤くしている。

端から見ていれば男女の愛の語らいそのものに見えたかもしれない。

その、背後から近寄る2人の老人さえいなければ。

「ほう、言つじゃねえか。クリユウ」

アドウがクリユウの背中を叩く。

「……痛つっ」

クリュウはアドウを涙交じりで見上げる。文句の一つでも出そうになったその時、

「まあそれぐらい甘んじて受けろや」

ハタが小声でそう言う。

「口では言わんがな……お前さんに協力してくれるってよ」

「ハタさんよう、聞こえてるぞ」

「おお、スマンスマン。で……まずはさしあたっては……」

アドウとハタは手をパキパキと鳴らす。

「……おい、ちょ……」

その余りにも豪胆な二人の視線を感じて、タヌキは後ずさった。

「ねえ親方。HSA^{ハイサ}を金儲けの道具にして……しかもウチの新入りを騙すなんて許せませんわなあ」

「そうだな。当人はなんとも思っていないようだが、HSA^{ハイサ}に関わるものとしては断じて許せん……」

そう一歩ずつ距離をつめて行く。

タヌキは猛獣に迫られた獲物のようにただ震えていることしか出来なかった。

《ディーゴ》の修理は順調であった。動力部を除けば後は装甲を磨くだけとも言える。

肝心の動力部も本日からようやく手がつけられるという所である。これはアドウが古いS型の資料を提供してくれたおかげもあった。それだけではなく、ある人物からだいぶ朽ちてはいるが《ディーゴ》自身の設計図を手に入れたことも大きい、この二つをあわせるだけで《ディーゴ》の修理にかかる日数は格段に上がるだろう。

更にその人物はここ数日クリュウの手伝いまでしてくれる。

「おい、ペンチ」

クリュウは《ディーゴ》のコックピットをこじ開けようと躍起に

なつてた。

コックピット部の装甲も例外なく錆ついているので剥がすには、一つずつナットを壊していくしかない。

「……ほれ」

タヌキは面白くなさそうに、工具箱から言われたとおりのものを持ってくる。

あれからタヌキは強制的に工房まで連れてこられ、クリユウの変わりに工房の雑用をこなし、それだけでなくこうして《ディーゴ》を直す手伝いもしてくれている。

その理由を問うならば、あちこちに巻いている包帯を見れば容易に察することが出来るだろう。

「おっし」

ペンチでコックピット部のドアの外枠のナットを外し終わる。ドアを開けずに外枠にくっついていた装甲部分だけ剥がすことでコックピットの中がようやく露になる。

「こりゃ、結構酷いな」

コックピットは思いのほか荒れていた。いや、製造年数を考えるとまだマシかも知れない。《ディーゴ》の設計図から察するに、《ディーゴ》は製造されてから50年以上も経っている。

Alloryは新しいパーツでも少し加工すれば《ディーゴ》に取り付けることが出来た。だがS系独自ともいえる、コックピット、動力部　そして、明らかに目に着く車輪部と動力を伝える為のピストン等は直すのには、もしアドウ達の力を借りても容易では無いかも知れない。

クリユウは懐中電灯をつける。

基本構造は他のHSA^{ハイサ}とも余り変わらない。

操舵石があり、加速減速を行う為のフットペダルがある。

だが、このコックピットは、他のHSA^{ハイサ}に比べて大きかった。これはS系の特徴の一つであった。木で出来ていた床が朽ちて吹き抜けになっているが、本来ここには床があつて下にはもう一つ席があ

った。

S系が空を走っていた次代、OSは存在していなかった。その為、複雑な動力を生む手順を持つS系HSAハイサのライナーは最低二人必要であったのだ。

下の席には大きな釜があり、ここに常に魔炭石をくべてやる必要がある。

クリユウはコックピットの下に降りて釜を開ける。どうやらここは錆び付いていないようだ。動力を生み出すともいえる釜が無事なのは幸いであった。ここが使い物にならなければ新しく作るか、尽力して直すしかなかった。

釜の戸はクリユウの大きさ1、7メーヤぐらいのものであれば屈めば除くことが出来た。

釜の中を……壁を明かりで照らす。

「なんか、おかしい……」

違和感を覚える。

（なんでだ、こんなに状態も良くて綺麗なのに）

釜の中を見た感じ、ここは《ディーゴ》のどの場所よりも綺麗だった。《ディーゴ》の部品の中でも常に火を炊く場所であるが故に丈夫に出来ているのか、そう考える。

「あ！」

一つ閃くものがあつた。

そう、引っかけりを覚えたのはそこが余りにも綺麗過ぎるからであつた。

この釜にはいくら50年経つからといって燃え滓どころか煤一つ付いていないのだ。

「まさか、コイツ走ったこと無いのか……」

何故かは分からないが走ることもなくただ放棄されたHSAハイサ。それを思うとクリユウは感傷深くなる。

その時グラリとHSAハイサが揺れた。

『すまん！クレーンをぶつけちゃった！！』

外からタヌキの謝る声が聞こえた。どうやら、パーツを吊るす為のクレーンの一部が《ディーゴ》に接触してしまったようだ。

「うん？」

揺れたことと関係があるのであろうか、釜の一部であると思っていた丸い物体が先ほどの位置からずれていた。

クリユウは体半分を釜の中に入れてその物体に手を伸ばす。

「意外と……重い……」

それは30ミューム……人の子一人ぐらいの重さがあった。大きさも直径1メーヤ程。楕円上のカプセルに見えた。

「なんだってこんなもんが釜の中に」

クリユウは釜から楕円状の物体を引きずり出す。

「おい。これ下ろすから手伝ってくれ」

クリユウはタヌキに声をかける。タヌキは嫌そうな顔をしていたが程なくしてクレーンがこちらにやってきた

。それに楕円状の物体なので大きな布袋に入れる。その時カプセルに描かれた文字のようなモノが目につく。

「ガ……ラ………メーメ？」

これが何を指すのかは分からない。このパーツの名称なのかも知れない。

クリユウはクレーンにカプセルを吊るしたまま先に下に降りる。

「下ろしてくれ！ 今度はぶつけるなよ」

クレーンが少しずつ下降を始める。このクレーン手で鎖を引っ張ることで操作するので加減が難しい。

グンと一気に下に落ちる。

「おい……」

床まで落ちることは無かった。少し下降したところで止まる。

「スマン、スマン」

タヌキはまったく悪ぶらずに謝る。

だがカプセルは、急に降り、そして止まったことでゆらゆらと揺れていた。そして、軽く《ディーゴ》の外装にぶつかった。

しばらくして、ゆつくりとクレーンは下まで降りきる。

クリュウは布袋を外し、無事を確認する。

「少し、割れてる……」

ぶつけたことでカプセルには亀裂が入り、中から水のようなものが零れていた。

これは、新しく代用品を作らなくてはいけないかもしれない、クリュウがそう思った。

その時、

「ギャー……！！ 人の指だぁ……！！」

何を見たのかタヌキが一目散に逃げ出した。

割れ目から指が出ており、これにはさすがのクリュウも驚き立ち上がった。その瞬間手がカプセルに付いてた何か突起のようなものに手がふれた。

その拍子に割れ目からヒビが入りカプセルから大量の水が流れ出した。穴は大きくなり、流れ出た水は蒸発を始める。

最後にカプセルの蓋のような物体が転げ落ち……。

蒸発によって発生した煙が消え始めると、

その中から小さい女の子が出てきた。

「はじめまして。ごしゅんさま」

まるで小鳥が囀るように……亜麻色の長髪を濡らしながら、文字通り生まれたままの姿そのまま、彼女はニコリと微笑んだ。

ディーゴ（後書き）

金曜に続けて投稿です。

どうしても主人公の機体に触れたくて……でも書くの……辛かった……。
やっぱり1週間に2話はきついです

謎の少女（前書き）

投稿が遅くなり申し訳ありません

謎の少女

クリユウの目が点になる。

誰が機械の中にあつた装置から小さな女の子が現れるなどと、予測することが出来るであらうか。

そして彼女は一糸纏わぬ姿でそこにいた。

「おはようございます。ごしゅじんさま」

クリユウより頭一つ小さい少女はそう言う。

開いた口が閉まらないとはこういうことを言うのだらう。クリユウはしばらく、思考が止まり喉から言葉も一切出なかった。

少女は不思議そうに小首を傾げる。

「どうしたんですか、ごしゅじんさま？」

少女はクリユウに近づく。

その行動に、フリーズしていたクリユウの意識が再起動される。

いくらHSA以外関心が薄いクリユウといえど、このような露骨な場面遭遇すれば頭も沸騰するであらう。

「あ、あ、あ、あば」

「早速、ご命令ですか、ごしゅじんさま？」

当の本人といえば肢体を晒しているというのに恥ずかしがる素振りも見せない。ここで悲鳴の一つでも上げられれば、クリユウも頭を下げたりと色々行動することが出来たのだが、目の前の少女がそういった仕草を取らない所為かクリユウの頭も徐々に冷えてくる。

「き、君は？」

「そういえば」

少女は、ポン、と手を叩く。

「自己紹介がまだでしたね。名前は……アレ？」

今度は少女が名前を思い出せないのか止まる。

ふとクリユウの視界に飛び散ったカプセルの欠片 文字の書いてあつた事を思い出す。

「ガラ……メーメ……」

「そうそれなのです。メーメはガラメーメと言うのですよ。よろしくお願いしますね、ごしゅじんさま」

今更だがここに来てクリュウは、略称でメーメというらしい少女が、自分のことを主人と呼んでいることに気がつく。

「ご主人様ってオレのことか？」

「そうですよ。だってごしゅじんさまがメーメを卵から出してくれたのではないですか」

メーメの中ではそれが唯一の回答なのらしい。

「もし、メーメに長い尻尾でもあれば出会い頭に尻尾アタックを喰らわせて、ツンデレ！！ってことも出来たのですが……残念ながらメーメにはそのような装備は搭載されていないので、ごく普通に主人に付き慕うというモードを選択したのですよ」

よく分からない言い回しと言葉を使うメーメに今度はクリュウが小首を傾げる。

「いや演出とかはともかく、そのご主人様ってのは勘弁してくれ。むず痒い」

アイザのようにお金持ちでメイドでも雇っているのであればそんなことも無いが、人間的にも収入的にも貧相としか言いようが無いクリュウにとつて、突然ご主人様と言い寄られれば違和感を覚えてしまうのは当たり前であろう。

「とにかくなあ」

メーメを今の状態で放って置くには忍びない。

「クシユンー！」

クリュウが着ているものを貸そうと思っても、作業着である。作業場には当然幼い少女が着れそうな物はない。

かといって、この真夜中に全裸の幼女を街に連れ出す訳にも行かない。

ふとクリュウの頭に身近にいる少女の姿が浮かんだ。

コンコン

クリユウは窓を叩く。

「オレ、オレだよ。開けてくれ」

「私にオレさんなんて言う知り合いはないんだけど……」

そう言いながらもサリナは何の用事かと窓を開けてくれる。

この時クリユウはサリナの部屋が一階にあることを密かに感謝した。

クリユウは窓から部屋に跳び入る。

「ちょ……ちよつとクリユウ!？」

まさか入ってくると思わなかったサリナは驚く。

だがこの後、彼女は更に肝をつぶすこととなる。

「こんな夜中に女性の部屋に押し入るとは、ごしゅじんさまも中々やるのですよ」

そうクリユウの手を取りサリナの部屋に入ってきたのは、真っ裸のメーメである。

「あのさ、悪いんだけど……」

クリユウが口を開いたのと同時に、サリナの手が飛んできた。

その見事な手際にメーメはお見事といわんばかりに手を叩いていた。

「まったくという神経してるのよ!!」

「いや、待てこれには理由がッ!」

クリユウが再び叩かれる、と思い目を閉じた。

だがピンタが飛んでくることは無く、代わりに頭から布団を掛けられただけだった。

「その布団取ったら、家から放りだして檻の中に入れてやるから」
クリユウは背筋が凍る。布団を剥ぐと桃源郷の風景、その後漆黒の布タ箱の中、である。

「とりあえず、アナタを何とかしないと」

ガチャリと扉を開ける音がする。

「とはいっても、昔の服なんてあったかなあ」

どうやら、サリナはメーメに着せるための服を探してくれているようであった。

クリユウは手痛い一発は貰ったものの、当初考えていた通り目的は達成出来たようで一安心と息をつく。

「おお、真つ黒なのですよ」

「ちよつと、アナタ何を手にとってるの!!」

（平常心……平常心……）

そんなクリユウの気遣いを知ってか知らぬかメーメは、何か（…）を手にとったようであった。

「ごしゅじんさま、ごしゅじんさまこれを見て欲しいですよ」

「やめてえ!!」

クリユウの背にタラタラと冷や汗のようなものが流れる。この布団を取った後、無事では居られないのではないのか、そんな不安が過ぎる。

「もう！ 余計なことしないで！」

「残念……なのですよ」

災いはひとまず去ったのだが、クリユウはそれに気がつくことなく硬直している。

「あった、あった。ほら、これなら着られるんじゃないの」

「もう……なんで、こんなに着せにくいのよ……」

「コラ！ 動かない!!」

「はい」

「下着は……まあ明日にでもこのバカに買わせるとして、ドロワーズもあるし大丈夫ですよ」

そんな、ごそごそと桃色のやり取りがあったのだが、この先の余

りの恐怖に一つとしてクリユウの頭に残らなかった。

「ほら、いいわよ」

被されていた布団が払われる。

「じゃーん、なのですよ。ごしゅじんさま」

ぱつと手を開くメーメ。彼女はファンシーともいえる黒と白のコントラストのドレスを身にまとっていた。ドレスといってもスカートはそれほど長くなく膝が掛かるか掛からないかであり、そしてスカートからはカボチャパンツ　ドロワーズの裾が見え隠れしていた。メーメがクリユウに対する呼び方も相まって、それにエプロンとカチューシャを足せば従者とも見えそうな衣装であった。

亜麻色の髪と白い肌を持つメーメはこのような服を着るのが当たり前とでもいうように、似合っていた。

「……さて、それじゃあどうしてこうなったかを聞かせて貰いましょうか」

何時ものサリナが使わないような丁寧語……それがクリユウの恐怖心を駆り立てる。

クリユウは瞬時に正座する。

表面上はニコニコ繕い笑うサリナの前ではクリユウはまな板の鯉
どう料理されるのかを待つだけの存在であった。

「で？　この子何なの？」

そう問われても、クリユウ自体も良く分かっていない。

「それが実は、H S A ^{ハイサ}の中にあつたカプセルから出てきたんだよ」
だから事実をそのまま述べるしか方法が無かった。

「そんな訳無いじゃない!!」

「嘘じゃないって!」

サリナは信じていないようであったが、とても嘘を言ってるように見えないクリユウの態度を見ると、

「まさか……」

「本当なんだよ」

「クリユウ……アンタ、とうとうH S A ^{ハイサ}馬鹿をこじらせたんじゃない?」

結局は信じてもらえない。

「こういうときは、警察？ それとも病院……」

どちらにしろサリナの考える先に待つのは、クリユウにとって地獄しかなかった。

「盛り上がっている所申し訳ないのです。ごしゅじんさま……人が一人この部屋へと向かって来ているようなのですよ」

ミーメのこの発言にクリユウ、サリナ共になぜそんなことが分かるのかと疑問を抱いた。

間もなくして、ドアがノックされる。

サリナの返答を待たずしてドアが開かれ、サリナの母・ルリが入ってくる。

「サリナちゃん！ コレ……」

ルリのその手には今ミーメが着ているようなドレスが握られていた。

「ちょっとママ！ 勝手に入らないでよ」

サリナがそういうも、ルリの耳には届いていないようであった。

ルリの視線はバツチリとミーメをロックオンしていた。

「ご、ごしゅじんさま。ミーメは何か肉食獣にでも見つめられている気分なのですよ」

「同感だ」

夜中に年端も無い娘の部屋に……しかもよく分からない少女連れでいるところをその肉親に見られた。これは下宿人にあらざる行為であろう。クリユウは修羅場にいることを確信する。

「な、な、な」

ルリがワナワナと震えだす。

「なにこの娘！？ お人形さんみたい、すごい可愛い……」

だが待っていた言葉は予想外のものであった。

ルリはミーメに抱きつく。

「いやあ〜可愛すぎる……！ この娘借りていくわ」

ルリは答えも聞かずにミーメを連れ去る。

「ごしゅじさま!? ごしゅじんさまあゝ!!」

クリユウはドナドナと連れ去られるメーメを心の中で敬礼して見送った。

後に残ったのは無言でたたずむ二人。

「なんかごめん。あんな母親で……」

「いや、こつちこそ」

二人は頭を下げあった。

場を支配するのは漆黒の闇。

そこにあるのは円卓である。そして円卓を取り囲むように幾人かがそこに座っている。

「状況はどう転んでも、変わらぬか……」

その中の一人が苦虫を噛み潰すような声でそう唸る。

「おのれ……クロバ工業め!!」

その一言を口切りに、何人もがクロバ工業を罵る。

「三賢者の方はどうか……? なにか妙案はないものか?」

「動の賢者に妙案は無い……無の賢者はどうか?」

動の賢者と名乗った一人は、隣に座る無の賢者に尋ねる。

「……………」

無の賢者は、眉間を動かすだけで何も語らない。

「では……源の賢者はどうか?」

「あつたら、ここに集まってなどおらぬのじゃ」

源の賢者は声を荒げて言う。

「クッ、此度の賢人会も何も解決せずに終わるのか……」

「何が賢人会よ」

「何奴!!」

円卓に座っていた一人がその声に反応する。

その瞬間、闇が晴れ部屋が明るく照らされる。

「うおおおお!!」

急激に明るくなり、目が焼かれ幾人かが顔を伏せる。

「もう、お茶を持って来たら、何辛気臭いことやってるのよ。ってか賢人会って何？ ただの町内会の老人会でしょ」

明るくなった部屋で窓際に立っているのはサリナである。

「そうは言うがなサリナ。こうでもしないとやってられん」

まるで演劇で悪役が纏うようなローブを脱ぐ、動の賢者ではなく

アドウ。

サリナがカーテンを開け放ったことによつて部屋は明るくなった。

「もう、おじいちゃん恥ずかしいことしないで!!」

サリナはアドウに言い放つ。

「ウエマーさんもおタネさんも悪乗りしないでくださいよ!」

無の賢者と呼ばれていたウエマーは相変わらず無言で視線もどこを見ているか分からない。他の面子もあえてサリナとは目を合わせない。改めて言われると自分達がどれだけ恥ずかしいことをしていたのが身にしみたのである。

「で、結局なんの話をしてたのかの?」

話が途切れ一人の老人が首を傾げる。

「そりゃああれだ、大企業の仕業でワシら小さい工場が大変だった話だ」

「そうだったのか?」

と改めて話してみれば振りだしに戻る始末となる。

「そんなに大変なの?」

サリナは工場の経営などについては良く知らないので聞いてみる。

「そりゃあ大変つてもんじゃないさね」

「アドウさんとは、まだ腕がいいから仕事はあるんだがこちらは全然駄目さ」

皆がため息をつく。それほど、小さな工房の現状は悪いのだ。

「昔はよかったのぉ」

老人達は昔を思い出すと10も年が若返ったように生き生きとした表情で語り始める。

「昔は工房ごとにお抱えのHSAハイサとライナーがいたもんだ」

「そうだそうだ。ウチのライナーが勝ったときなんて、この工房のパーツがいか噂になったりして、こぞってライナーが買いに來たりしたなあ」

だが良いことを思い出すと今の悪いことが愚痴として飛び出してくる。

「それが今じゃあHSAハイサを弄らせてもらうこともままならねえ……」

「安い金で大企業様の下請けの型を決められた部品を作る仕事を貰うのがやつとさ」

本当にそうなのだろうか、サリナはそう思う。例えば、

「アイザさんみたいな人もいるじゃない」

彼女は名ライナーでありながら、中小工房を利用している。

「そりゃ、アドウさんとこみたいに腕のいい所は使ってくれるだろうけど、ワシらみたいな所には敷居が高すぎる」

アドウ、ウエマー、タネを除く老人達は頷く。

「じゃあ、クリユウはどう？」

「おい、サリナ……！」

クリユウの名を聞きアドウが静止の声を上げる。皆がクリユウに對して協力するのはアドウの意に反していたからである。

「クリユウったら……アドウさん家で働いてるアンちゃんか？」

皆がその名前が今どうして、という顔をする。

「まさか、例のアンちゃんライナーなのかい？」

「まだスタートラインにすら立ってないけどね」

クリユウのことを頭に思い浮かべてサリナはやれやれ、と思う。

そして彼のHSAハイサが一人で修理していることを伝える。

「アドウさん、そりゃねーぜ」

「なんでそんな面白い話を黙っているんだ」

それに対してアドウは言う。

「あんなHSA走るものか」
ハイサ

その態度に皆が静まる。腕の良さを知っている分、アドウがそのような発言することが珍しいからである。

「アイツの使おうとしているHSAはS系だぞ」
ハイサ

その言葉に対して疑問を浮かべるものはいない。皆、年を取っている分だけにS系というHSAを知っているのだ。
ハイサ

「……ヒッ」

訪れた静寂の中、一つの声が上がる。

「ヒヒ……S系だって!? ヒヒ」

口を開いたのは、先ほどまで無の賢者といわれていたウエマーという男であった。

「う、ウエマーさんが喋った……」

皆が驚嘆する。ウエマーが今まで積極的に口を開いたことを誰もが見たことが無かったからだ。

「面白い、面白い、ヒヒヒヒヒ」

その薄気味悪い笑い声に怯える者までいる。

「ヒヒ、是非とも僕に、EOMエオムを作らせて欲しい……ヒヒヒ」

ウエマーは機関魔法技師 略称EOM技師と呼ばれるものであった。賢者と呼ばれていたこともあり、分野は違えど腕はアドウに並ぶとさえ言われる。ただ、そのEOMエオムは奇妙奇天烈なものが多く使えるモノは少ないと言われている。だが、中にはプレミアが付き国の国家予算ほどになるというものもある。

そんなウエマーが喰いついたということもあり、他の者達もクリユウのHSAハイサデューゴに興味を持ち始めた。

ただアドウだけは最後まで面白くなさそうな顔をしていた。

謎の少女（後書き）

明日また話を上げるために奮闘中です。

感想意見等募集中ですのでよろしくお願いします

恩師（前書き）

昨日に引き続き投稿です

恩師

『勝者！！ アイザ・ヨー！！！！』

実況が言うその声により勝者が告げられる。

2RBが終わると沢山のマスコミがアイザの周りに集まる。

それはもちろんその卓越したHSAハイスの腕もあるだろう。

だが誰もがアイザのその点ばかりを見ているばかりではない。その容姿ばかりを褒め称えたりされたりもする。

だからアイザは勝利の余韻に浸ることなくやってくるこの無粋な輩が嫌いであつた。それとは逆に走っている瞬間は最高の気分を味わえた。その瞬間だけはHSAハイスがすべて……何事も『可愛い』では済まされないのである。そういつた緊張感がアイザにとって心地よかつた。

「アイザさん、次は当然」ワールド・チャンピオン・カップ」ですよ。意気込みをお願いします」

WCCと言われるその大会においてアイザは前回のチャンピオンであつた。あのクロバ工業さえ所属のライナーをその座に置こうと死力を尽くす、2RB界至高の大会である。新チャンピオンが生まれるか、それとも現チャンピオンが最強か、と2RBファンにとっては見逃せない試合であつた。

記者の誰もがアイザの回答を耳を済ませて待っている。

だがアイザは何も語らず上品な一筋の笑顔と貴族然とした一礼をすると控え室へと去つた。

次の日の新聞には『WCCに向けて、アイザ・ヨー』余裕の笑顔”』という見出しが付いた。

《ディーゴ》のあるハンガーには、何時もと違う雰囲気漂っていた。

クリュウは良くは知らないが、先日 of 会議で町内会全体で《デイーゴ》の修理に協力しようと年配の方々が話し合ったらしい。

クリュウにとって見れば棚から牡丹餅……ただでさえ手を焼き、人手が足りないのを補ってくれるというのだ、非常に助かる。

「ヒビ、本当にS系だねえ、コレは。ヒビヒ」

そう怪しい声を上げるのは、ウエマーというEOM技師だ。

彼が手を貸すからこそ、自分もという形で人が集まっている。正直の所クリュウの為に集まったわけではないのだ。

クリュウはそれも仕方 of 無いことと思う。2RBの世界において名が売れているということは重要なことだ。名が売れていれば、ライナーであればアイザやギドレーのように出る2RBに引つ張りだになる。工房の名が売れば、そういった名だたるライナーが利用する、そして更に名が売れる。

名無し of クリュウに対してこれほど手を貸してくれるというのは本来ありえないことなのだ。

「ヒビヒ、僕の出番はまだなさそうだねえ」

EOMは飛走出来るようになったHSAに合わせて設計されるものである。

「それはそれでいいとして、ヒビ。君はS系に乗れるのかい、ヒビヒ」

「いや乗ったこと無いけど」

様々なHSAに乗ったこと of あるクリュウであったがS系というものに乗ったことは無かった。それもその筈で、この国においても動態保存されているS系は数が少ないのである。それだけでも《デイーゴ》を復元させようというクリュウ of 無謀さが伺える。

「馬鹿が、ウエマーさんはそう言うことを言ってるんじゃないよ」
その声に、クリュウがハンガー of 扉のほうを見るとそこにはハタがいた。

ハタは封筒 of ようなものをクリュウに投げてよこす。
「コレは？」

「HSAにはD系やE系といったそれぞれに合わせた資格があるだろう。S系を乗るにも資格がいるんだよ。それは、S系のHSA講習を受けるための届出だ」

中を開けば既に届出を受理されており、決められた日程に飛走都市スカイレイルの教習場へといってノルマをこなすだけとなっている。

「ヒヒヒヒ……アドウも随分と丸くなったもんじゃないか。ヒヒヒヒ」

「おめえが焚き付けたから予定が狂っちゃったよ。まあ親方は、ウチの社員として働く以上すべてのHSAに乗れなきゃ意味がねえ、だなんて言ってたがな」

クリュウの周りの者が力を貸してくれる。

「ヒヒヒ、コイツのことは僕達に任せて、君は君に今出来ることをすればいいさ。ヒヒヒ」

それに報いることがクリュウに出来るとすればそれは飛走ことだけであつた。

「やるぞー!!」

《ディーゴ》のハンガーは熱い熱気に包まれた。

「お願いします」

クリュウは教習場の受付嬢に書類を差し出す。

S系の免許を取得するためには4時間の座学と6時間の実習が必要となる。HSAの免許を取得はしているのでこの中には基礎的なものは省かれる。つまりS系HSAについてのこのみ学ぶことになる。

他にS系HSAに乘ろうという酔狂な者もいないのでマンツーマンの授業となる。

授業内容もS系について知らない教師が古い教科書を片手に授業を行う。速度を上げるために蒸気を調節する”バルブ”やメーター

の見方等をぎこちなくだが教わる。

クリュウはこんな調子で午後の実習は大丈夫なのかと一抹の不安を覚えた。

だが午後になりそんなクリュウの前に杞憂を晴らす人物が現れた。「こんにちは、クリュウちゃん。またアナタに会えるとは思わなかったワ」

そうヤクザも恐れおののくような低い声で話しかけられる。

「こ、校長!？」

それはクリュウが以前通っていたアカデミーの校長　ボウホであつた。

「ゴメンナサイね。ホントは午前中の授業も受け持って上げたかったのだけど……何しろこんな身分でしょ。手が開かなくてネ」

黒光りする肌、厳つい顔……男の中の漢という容姿からは想像出来ない口調で話すボウホ。入学当初はクリュウもこの口調に慣れるのに苦労した。

「では、午後の授業を始めましょ」

^{ハイサ} H S Aが走る為の教習場のコースは砂浜であつた。そこには2機^{ハイサ}のS系H S Aが鎮座していた。《イッカード》と呼ばれる《デীগ》と似たようなH S A、そして少し小柄な《ヴィーツク》と呼ばれる^{ハイサ} H S Aである。

「ドツチに乗る?　大変だったのよお。動態保存されてるS系を調達するのわ」

アカデミー時代の無茶な走り方をするクリュウを知っているボウホは、壊さないでネ、と念を押す。

クリュウは《デীগ》に近い《イッカード》を選択する。《デীগ》に近いほうが今後の為になると思ってだ。

(それにしてもどうして2機も持ってきたんだろっ)

教習の為なら1機で良いはずであつた。

クリュウはそんな疑念を持ちつつ《イッカード》に乗り込む。《

イッカード』は現代の技術も幾つか搭載されてあった。その中でもOSや燃料供給機器がある為、現在の《ディーゴ》のように副座ではなかった。

「それにしても熱い……」

ボイラーで常に火を炊き続けるS系のコックピットは40 に近い。

『それじゃあ、走ってみて』

ボウホからのその指示が来て、クリユウは操舵石の上に手を置いた。

基本的な操縦方法は、他のHSA^{ハイサ}と大して変わりはない。

操舵石でAlign^{アライン}を操り、アクセルペダルで加速を行う。そして、速度調整を行うためのバルブを捻る。速度調節を行うという点においては、D系HSA^{ハイサ}におけるギアを切り替えるクラッチに近い物である。

ただクラッチと違う点は、こちらは速度が上がると次のステップにと切り替えていくのに対して、バルブはメーターを見ながら捻り、調節するという所であった。用は繊細な操作が求められるのだ。

「でも、細かい調節が出来そうだ」

そうポジティブに捕らえて、クリユウはバルブを捻る。

そしてペダルを踏むと《イッカード》がゆっくりと動き出す。

蒸気がシリンダーへと送られ、ピストンが軋む音を立てる。ピストンに引張られるように車輪が回転を始める。

シリンダーから蒸気が噴出し、煙突からは黒い煙がもうもうと吐き出される。

外から見ればその動きは、他のHSA^{ハイサ}では見られない力強い鼓動であった。

だが、クリユウは眉間を潜めた。

「……遅い……」

『ツフフ。そうでしょ。今のHSA^{ハイサ}に慣れてると間違ひなくそう思う筈』

操舵石からのクリユウの意思通りにスカイレールは引かれているが、『イッカード』はその上をゆつくりと飛走する。

また走るのが遅いのには理由がある。S系はその加熱しやすいボイラー故に装甲が厚い。更に動くためには魔炭石と水が必要となる。この2つの理由から、重量が通常のHSA^{ハイサ}に比べて重いのである。つまりS系に俊敏さと加速性を求めることは出来ないのである。

バルブを捻りメータを見ていたクリユウはある点に気がつく。

（メーターの動作も遅い）

これはメーター自体がシリンダー内に送られる蒸気を計測している為であった。

「なるほど、経験が必要という訳か」

『掴みが早いわね』

これにはボウホも驚いた。初めてS系に乗るにしてはクリユウは余りにも筋が良かった。並のライナー、いやアイザは分からないが、ギドレーではこうも行かないだろうと、ボウホは思った。

元々、素質がありその飛走^{はしり}にはボウホですら魅了された。だから、今までに一番期待し、それ故にクリユウがアカデミーを辞めると聞いた際には一番残念に思った生徒でもあった。

長い間教師職にいらそうして”才能”がある人間というのはごまんと見る。その中でうまく行った人間、行かなかった人間というのも知っている。

ボウホも友人に頼まれなければこんな役目を引き受けなかったかもしれない。

「でも、ライナーに必要なのはそれだけじゃないのよねエ……」

『なんか言った？』

「なんでもないワ」

ライナーは何も一人で飛走^{はしつ}てる訳ではない。ボウホは知っている。そのHSA^{ハイサ}を作った人、直す人、調整する人、EOM^{エオム}を作った人、

ライナーを取り巻く人間、そしてなにより2RBを観戦している観客がいて、初めてライナーは2RBを行えるのだ。

クリュウにはそんな周りの人間を巻き込み、魅了してしまう、そんな力があるように思えた。

あの頑固な友人を動かしてしまう程に。

「さて、それじゃあ行きましょうか」

ボウホはインカムを外してそう言う。

クリュウが今どんな顔をしているのかコックピットで隠れていても分かる。きつと子どものような笑顔をしているのであろう。

「フッフ、その鼻を押し折ってあ・げ・る」

だんだん分かってくる。《イッカード》の特性が。

「イヤッホオオオ！」

《イッカード》がアクロバティックな飛走を行う。

速度調整を行う際の2秒のラグももはや気にならない。速度調整を行うためのラグは通常D系であれば0.5秒、E系であればそれ以下とされている。

これはS系に乗るのであれば克服しなければいけない問題点の一つであった。

ボウホからの連絡は無い。どうしたのかとも思うが、それよりも《イッカード》で走ることが楽しくてたまらなかった。

『スタート地点へと戻りなさい』

そんなドスの効いた声が聞こえてきたのはそんな時であった。

「OK。了解」

クリュウは二つ返事で答える。

《イッカード》はスタート地点へと戻る。

だが、ボウホからの指令は無い。

どうしたのだろう、とクリュウが思った瞬間、《イッカード》の物ではない別の汽笛が鳴り響いた。

すると《ヴィーック》がスタート地点へと歩を進めてきた。

クリユウは何事であるか分からなかった。《ヴィーック》はスタート地点に辿り着くと黒煙と蒸気を撒き散らす。

「なんだ？」

まるで2RBでも行うのかと思わせる。だが、免許取得の実習においてそんなこと行うなど聞いたことも無い。

「校長？」

クリユウはボウホに連絡を取る。だが返信は無い。

「ッ！！」

その代わりこれが返信とでも言つつもりか、《イッカード》のモニターに2RBのシグナルが燈る。

「おもしれえ」

Three

Two

One

「ゴー！！ シフトカラーズ！！！」

相手はそれを言わず、

『さあ、授業の始まりだ！！』
リンチ

と、返してきた。

その声はドスの効いた、間違いも無くボウホの声であった。

スタート直後、

「火速 ブーストアップ！！」

クリユウはボウホの口調に違和感を覚えつつもエオムを噴かせた。飛走途中にこのHSAにこのエオムが搭載されているのは確認済みである。

初速が遅いS系もエオムで外部から加速してしまえば、その欠点が露見することは無い。

『ほお……』

これにボウホが感嘆の声を漏らす。

《イッカーロ》が後ろから火を噴出し加速する。

『だが、いいのか？ 燃料を消費しちまって』

《イッカーロ》は燃料を補給していない。本来、必要最小限の燃料しか積まないHSA^{ハイサ}はそれほど長い距離を走れない。

（燃料を与える暇もくれなかったのはそっちだろうが！！）

操縦に全神経を傾けながら、心の中でクリュウは呟く。

『まあ、燃料切れなんていうものを狙ってやるほど この俺様は甘くは無エがなア！！！！』

《ヴィーツク》は、先程の《イッカーロ》程遅くなくスピードに乗り始める。

その小柄な体格が成せる業である。

《ヴィーツク》は《イッカーロ》より車輪が小さく加速に乗りやすい構造をしていた。だがその分欠点もある。車輪が小さければ、回転数がその分増え燃料を消費してしまう。長距離を早く飛走するのであれば大きい車輪を積むのが鉄則である。

《イッカーロ》は火速の恩恵もあり容易に上位を取る。

『ほお……S系に対して真上を取るか……甘エゼ』

その言葉が理解出来たのはその後すぐであった。

「うわッ！！」

《イッカーロ》の視界が真っ黒に染まったのだ。

何事かとクリュウは思った。

（これは！！）

それは《ヴィーツク》が吐き出した黒煙であった。

S系は走り出した時に大量の黒煙を撒き散らす。それが《イッカーロ》の視界を遮ったのだ。

『コレは、オメエの得意技だったっけなあ』

クリュウに今それを確認する暇は無いが、《ヴィーツク》はスパイラルアップで《イッカーロ》へと向けて上昇を始めていた。

《イッカーロ》が煙を抜けるとそこは、黒煙竜巻の目……つまり、

『丸見えだぜええ！！！』

予期していなかった攻撃が待っていた。

《ヴィーック》の蹴りが《イッカード》に襲い掛かった。

「グあッ！！」

跳ね飛ばされ、《イッカード》のスカイレールが途切れる。

装甲の厚い《イッカード》自体にダメージは少ない。

だが、地表に向かって落ちていくコックピット内部には衝撃が走る。

クリュウは揺さぶられるコックピットの中で《イッカード》がどの方向を向いてるのかすら確かめることが出来ない。

「うおおおおー！！」

《イッカード》の車輪が空転する。それに合わせてスカイレールを引くように念じる。

地表まで後僅か……という所で《イッカード》はスカイレールの上を走り出す。

『やるじゃねえか』

クリュウは知る良しも無いが、ボウホは昔生徒が恐れる鬼教官であつた。教え子を空中で翔る様は皆にサディスティク・ティーチャーと比喻されるほどであつた。

《ヴィーック》の連撃は続く。

今度は炎射による攻撃だ。

《イッカード》に、クリュウに体制を整える暇など与えてくれない。

《イッカード》は高速で車輪を回すも、空中で着地したためにレールの上を車輪が空転してしまいスピードが乗らない。

クリュウは顔を顰めながら、バルブを閉める。これにより車輪の回転数は落ちる。《イッカード》の実際に出ているスピードと車輪の速度を合わせる為の行為であつた。

だが少し閉めすぎた。

《イッカード》の速度がガクツと落ちた。

その瞬間、《ヴィーック》が《イッカード》の上空を通り過ぎた。これは不幸中の幸い……ただ追い詰められるだけの獲物が後ろに出ることに成功したのだ。

だが樂觀してもいられない、このままモタモタとしていれば旋回されて再び速度が上がった時には後ろを取られることとなる。

だがEOMエオムを使う訳には行かない。今度EOMエオムを使うとすれば一撃必殺でなければいけない。

それほどクリュウは追い込まれていた。

だが余裕が無いのはクリュウだけではない、《ヴィーック》に乗るボウホも同じ立場であった。もともと、《ヴィーック》も《イッカード》も2RB用のHSAハイスではない。特に《ヴィーック》はボイラーも車輪も小さく、持久戦には不向きである。元々、燃料を消費していた《イッカード》と走っても先に燃料を切らすのは《ヴィーック》の方であったのだ。

《イッカード》は《ヴィーック》に合わせて旋回する。

「ッチイ……」

ここに来て初めてボウホの舌打ちがクリュウに聞こえた。

《イッカード》の動きに《ヴィーック》は背後を取るのを諦める。その代わりに、

「来る……」

《ヴィーック》はその小柄な車輪を生かし、小さく小回りをする。そして、《イッカード》へと向かって下り始める。

「火速　ブーストアップ」

慣性に更にEOMエオムによる加速を生かした剣撃。

《イッカード》は腰から剣を引き抜くと、それを受け止めに入る。《ヴィーック》に対して《イッカード》はEOMエオム無しだ。

これは賭けであった。重量の重い《イッカード》と慣性エオムとEOMエオムによってスピードを上げた《ヴィーック》。下手をすればどちらかが弾き飛ばされる可能性すらある。

剣が交わり、鏑迫り合いとなる。

《イツカーロ》は登ってきた道^{レール}を押し戻される。

前に引いてきたレールの曲がり角……そうこのままでは後ろ向きで曲がれなく落とされる。

『終わりだなア！』

『それはどうかな』

『なにい！！』

慣性もE_{OM}^{エオム}による加速も衝突時ほどではない。

クリユウがE_{OM}^{エオム}を使用しなかったのは、この瞬間を待っていたのである。

「炎装　フレイマー・エンチャントおお！！」

本来であれば剣などの武器に火を点すE_{OM}^{エオム}　それをクリユウは、

《イツカーロ》の全身が火を噴くようにした。

『なんだとおおお！！』

密着しかかった《ヴィーツク》と《イツカーロ》が……《イツカーロ》が剣を捨てることによって熱く抱擁する。

『馬鹿な。蒸し焼きになるぞ！！』

クリユウにその言葉に対する返信をする余裕は無い。

機内温度はどんどん上がり汗が噴出す。

だが、次第に《ヴィーツク》に変化が訪れる。

《ヴィーツク》の全身から蒸気が噴出し始めたのだ。

『このオンボロがあ！！』

そして二機がレールから脱線する。

落下する。

そして、砂地に落ち。

砂が巻き上がった。

砂煙が収まると、そこには一機のHSA^{ハイサ}の姿しかなかった。

『クソ、OSまでフリーズしてやがる』

落ちたのは《ヴィーツク》であった。

《イツカーロ》は間一髪の所をスカイレールにぶら下がっていた。

「アアあ。負けちゃったワ」

《ヴィーック》から降りたボウホはそう漏らした。もちろん、S系で2RBを行うという異例の試合であったが、当然負ける気はなかった。というより、2RBの厳しさを教えるつもりであった。

だが結果は、ボウホの負けである。

「先生!!! 大丈夫か」

クリユウは砂地に落下したボウホを心配して駆け寄る。

「デメエ!!! あれほど壊すなど言っただろうが!!!」

「ひ!!!」

「まあ、冗談はさて置いて……こんな事になるんだったら、海上のコースを貸しきるんだったわア」

半壊した《ヴィーック》、装甲が焼け爛れる《イッカロ》を見てボウホはため息を零す。

じよ、「冗談?、とクリユウは怯える。2RB中のボウホは普通のオネエ言葉と違い、恐ろしい程までにヤクザだった。それはもう声を聞いただけで、子どもが夜眠れなくなる程に。

「ともかく、合格よ。これから頑張りなさい」

どこから取り出したのか、ボウホはチリンチリンとベルを鳴らす。

「よっしゃああ!!!」

その子どものような仕草、隠す気のないHSAハイサが好きという気持ち。

ボウホは大人しく、クリユウに魅了され、応援してやろうと思ったという。

「ただいまー」

クリユウはアドウ家の門をくぐる。

「おかえりなさいなのですよ。じしゅ……」

そこには服だけ可愛さを増したメーメが三つ指を付いて待っていた。

最近、ルリに強制貸し出しされたままだったので、顔も見るのは久しぶりであった気がする。

クリユウはニコリと微笑む。これは彼がフェミニストではなく、S系の免許を取れて嬉しいからである。

だがメーメはワナワナと震えだす。

「別のHSAおんなの匂いがする……この浮気者おお!!」

メーメは涙を溜めて怒った。

彼女のこの発言についてクリユウはその正体が分かるまで頭を悩ませることとなる。

そして、この後クリユウはサリナにボコボコにされた。

恩師（後書き）

こんばんは！ 呉璽立児です。

忙しさで溜まりに溜まったネタが火を噴いた！！

車で言えばオートマの免許しか持っていないのでマニュアルの限定解除に行ったら、ちよつこと練習したあとに峠に連れて行かれて頭字Dさせられたそんなお話です。

何時もは1週間に1話ぐらいのペースで上げているんですけど、今週は2回目の投稿ですよ～

ネタ帖では《イッヤーロ》になってたのが字が汚すぎて、PCで打つときに《イッカード》になっていました。こっちのほうが語呂がいいので

お楽しみいただけたらうれしいです。そろそろ、HSAの元ネタが分かつてきた人がいらっしやるのではないのでしょうか？

さすがに3連続は……無理？

9/17 キャー、恥ずかしいミスが残っていたので修正しました。

OS（前書き）

前回名、思わせぶりなあとがきを書いてしまいましたけど……間に
合ったああああ

OS

オークス家、食卓。

主婦であるルリが料理を机へと並べていく。

オークス一家3人と下宿人、そして不審者が一人卓に着いていた。

「なあ、サリナ」

食事に手を付けながらアドウが問う。

「なあに、勤の賢者の……おじいちゃん？」

「グっ……。それはもう勘弁してくれ。」

それはそうと、あの娘っ子は誰だ？」

クリユウの横に座る不審者こと、ドレスに身を包んだ見た目10歳前後の少女を指差す。問題の少女は小首を傾げるとアドウに向かって笑顔を浮かべた。

「やあねえ、」

ルリがそういう。

「勤の賢者のお義父さん。もう前からいるじゃない」

「ルリさんまで……勘弁してくれ」

ルリは、アドウから見れば嫁養女なのだがこうしてアドウに対して皮肉まで言うことが出来るざつくばらんな性格をしていた。

アドウはガツクリと落ち込んだ。だが、アドウが疑問に思ったことと自体サリナも気になっていたことだった。

「で、この前は聞きそびれたけど結局どこで拾ってきたのよ」

サリナはそれを下宿人であるクリユウに聞く。

「だからそれは、前も言ったじゃん。HSA^{ハイサ}かれ出てきたんだって」

それ以上はクリユウ自体も知らなかった。いろいろ訪ねる前に問題の少女がルリに攫われて行ってしまったのだから。

4人の視線が一齐に問題の少女……メーメへと向く。

「ふふふ、とうとうメーメの正体を明かすときが来たのですね」
その瞬間アドウの目に光が灯った……。

だが、サリナに睨まれると、

「……………」

口を閉じ、動の賢者が現れることはなかった。

「はいはい、御託はいいから。アナタにも帰る家があるんでしょ」
目の前に年端もいかない少女である。だから、そういう場所があ
って当然だとサリナは思った。

「帰る場所…… なのですか？ メーメの帰る場所は、ごしゅじんさ
まのいる所なのですよ」

サリナが冷たい視線でクリュウも睨む。

「メ、メーメ。そのご主人様っていうの止める!!」

まるで犯罪者でも見るような視線にクリュウは耐えられなく、そ
う言っしかなかった。

「うーん、そう言われてもなのですよ。一応、”マスター”という
呼び方もあるのですよ」

「それ、それにしてくれ!!」

クリュウはそれに飛びついた。

「了解、なのですよ」

メーメはそう言う。

するとメーメは、力を失うように机に伏した。

「お、おい!!」

あまりに突然のことでクリュウは驚く。

「う、うん」

メーメから熱い吐息が零れる。

「ま、マスター」

「どうした!？」

その顔は上気して、頬は赤く染まっていた。その変化があまりに
も突拍子もないことでクリュウはあたふたとする。

「マスター、マスターああ。早く、早くうメーメに、メーメにご命
令を…… そうしないとメーメはア……」

呼び方を変えさせたことと関係があるとしてもいうのだろうか。突

然メーメは熱のある吐息と潤んだ視線で蠱惑的にクリュウを誘う。
クリュウの犯罪度が更に上がる。サリナがクリュウに向ける目つきが更に冷たさを増す。

「やめ、やめて。元に戻して!!」

「はい、ですよ。ごしゅじんさま」

メーメの口調は瞬時に元に戻る。

まるで、コイツ狙ってたんじゃないか、とクリュウは勘ぐってしまっただけだ。

だがメーメは屈託のない笑顔をクリュウに向けるだけであった。

「で、漫才はいいとして、アンタ結局何なの？」

「メーメは、奏でる者」 オペレーション・シンフォニアン”と呼ばれているのですよ」

オペレーション・シンフォニアン……クリュウとアドウ共に聞いたことのない言葉であった。

サリナは学生ということもあり、その綴りを手に書いたりしている。

ルリに関してはそんなことまったく聞かずに食事をメーメの口へと、親鳥が雛に餌を与えるように……目がハートになっていた。

「これ、略すと”OS”になるわよね」

サリナがそういう。

「略されてそう呼ばれていたこともあるのですよ。それにしても、おかあさま？ 確かにおいしいのですけど、メーメはもう少し……こう黒くなるまで焼いたほうが好きなのですよ」

「あらあら、メーちゃんはウエルダンのほうがいいのね」

目の前の料理はステーキではなく、^{ハイサ}卵焼きであった。

「ちよつと待て!!」 OS” ったらHSAに積む”オペレーション・システム” ライナーの飛走を支えるプログラムのことじゃねえか」

さらりと料理の話へと流れそうになった話題をアドウは引き戻す。
「システムというのは気に入らないのですが……あながち間違いではないのですよ。作られたというのとライナーを支えるという点では」

「は？ 作られた！？」

目の前のメーメはどこからどう見ても少女にしか見えない。

「それに、お前が”OS”ってことはオレと一緒に乗るとでも言うのか？」

「そりゃそうなのですよ。というよりも、ごしゅじんさまはメーメ無しでどうやって”DSI4q5” 《ディーゴ》を動かす気なのですか……まったく」

やれやれとメーメは肩を竦める。

目の前の少女が語る、自称作られたということですら信じがたいのに、更に彼女は一緒に自分を乗せると要求している。

「あー頭が痛くなってきた」

ハイサ
HSAに長く関わってきたアドウは次々と語られる、信じられないことに耐えられなくなり席を立つ。

「後は好きにすれや」

そう言い残して。

「あ、私も今日宿題があつたんだった」

サリナまでもがそれに関わらないようにと、去る。

後に残ったのは、クリユウとメーメとルリ。そのルリも皿を片付けに台所へと行ってしまった。

「と、言うわけで未永くよろしく願いますなのです、ごしゅじんさま」

「つまり、どういうこと？」

頭が混乱したクリユウは、虚空に向かってそう尋ねるしかなかった。

「という訳で、『ディーゴ』の”OS”です」

「メーメなのです。皆さんよろしく願いますなのですよ」

皆これは、何の冗談だ、という顔で静まり返る。

（やっぱ信じてもらえないよなあ。というかオレも未だに信じられないし）

その静寂を破ったのは、やはりあの人物であった。

「んっフフフッフ、ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

普段は一言も話さないくせに、一つスイッチが入ると不気味なくらいに喋りだす、その声の主はウエマーであった。

「ヒヒヒヒヒヒ、フフフフフン」

ウエマーは、腹を抱えて笑う。周りが静まりかえる中その光景は実に奇妙であった。

「ヒヒヒ、クリユウ君はまったく……いつもヒヒ、僕を笑い殺す気かい？ ヒヒ」

笑っている本人は、いたって可笑しそうであった。

クリユウは静まり返るほどおかしいことは言ったつもりであるが、爆笑されるほど可笑しいことを言ったつもりはなかった。

「ヒヒヒツヒ、まったくどうしてそう君の中で結論付けられたか、ヒヒヒ、是非とも僕に教えてくれよヒヒヒ」

クリユウは昨日出た話題とメーメが『ディーゴ』の中にあったカプセルから出てきたことを、その欠片も持ってきて説明する。

「ヒヒ、それじゃあ、仕方がない。メーメさんは”OS”なのだろうヒヒ」

この説明で納得するの？、と誰もがウエマーにツツコミを入れたくなった。

「クリユウ君もメーメさんも嘘をついてないだろうヒヒ。ヒヒ、それにこんな嘘を付いたって意味がないだろうしね」

対して、ウエマーは、破顔する。

「ヒヒヒ、皆納得いかなそうだねヒヒ。そしたら、”OS”の性能試験の機械にでもこのいたいけな少女を掛けようじゃないかヒヒヒ」

ウエマーはそう提案した。

「ふーん。で、結局結果はどうだったの？」

「それが……並みの”OS”以上の結果をはじき出してさ」

アドウ家の居間。食後クリユウとサリナはそこで談話していた。

近頃、はそれほど邪険に扱われることもなく普通に会話が出来る
ほどになっていた。

「ふーん。よかつたんじゃないの？」

サリナは興味なさそうにそう言う。

会話もクリユウが一方的に話すことが多いのだが、それはサリナ
がHSAのことが嫌いなので仕方ないとクリユウは割り切っていた。
それでも聞いてはくれるし、こうして話しているうちにHSAを好
きになってくれれば、という下心もあった。

「ふーん」

サリナは適当に相槌を打ちながら、雑誌をめくる。ページをめく
ったり、戻ったりと繰り返している。

「そんなにその記事面白いの？」

なんども同じ所を読んでいるようなので、クリユウも気になり尋
ねる。

「へー？ いや、面白く……なんてないわ……よ」

珍しくサリナにしては歯切れが悪い。

「そうなんだ。さて、」

いつまでもHSAの話ばかりしては悪いし逆効果だと思い立ち
上がる。

「ま、待ちなさい」

サリナが静止する。

「こ……これ」

そう言いサリナは、何度も眺めていたページを見るように促す。
そこには、

『スカイレイル・カップ開催
ランク問わず。ただし、機乗するHSAはカスタム機（所有者が
手を加えてあるHSA）であること。

試合はトーナメント方式で行い。トーナメント勝者にはエキシビ
ジョンで大会主催者と2RBを行う権利が与えられる』

とあった。

「これ……本当かよ……！」

クリュウは目を疑う。参加資格もカスタム機であるという点を除
けばとても敷居が広い。現2RB環境において大企業の売り出した
HSAをそのまま乗るといふ傾向が強いのだが、クリュウの『デ
ィーゴ』はそもそも原型が分からなく直しているものなのでこの条件
は満たしている。

「サリナちゃん……」

「な、なによ……」

見つめられてサリナは動揺する。

まだ、HSAも2RBも嫌いなのに、とクリュウは感極まってし
まう。

「べ、別にクラスの連中が話題にしていただけよ、アンタの為なん
かじゃないわよ」

「じゃあ、HSA嫌いじゃなくなっただんだね」

「き、嫌いよ……！ 大ッ嫌いよ……！」

サリナは雑誌を投げるように床に叩きつけると、居間から出て行
ってしまった。

女心が分からないクリュウには、サリナがこの記事を教えてくれ
たことも怒った理由も分からなかった。

クリュウはこの記事を教えてもらった後、アドウの元へと急いだ。

この2RBに出ると決めたことを報告するためである。

「……」

アドウは雑誌を見つめる。

「オレでも出られるだろ。コレ」

大会の日にも《ディーゴ》の修理が終わる見積もりから見ても悪くはなかった。

だがアドウは渋い顔をしたままであった。

「オメエ……これに本当に出るのか？」

「なんか問題でもある？」

アドウの質問の意図が分からない。

「こいつは、ただの金持ちの道楽試合だろうが。エキシビジョンなんか設けて、わざと負けさせて自分が強いことをアピールしたいだけにしか見えん」

これは私設大会では良くあることである。賞金をつかませて、エキシビジョンで負けさせて自分の強さを見せる。ようは貴族の遊びである。

だからアドウは、2RBという用語を使わない。誇りも意地も情熱もないそのようにアドウの目には映った。

対してクリュウには、そういった貴族の意図もアドウが軽蔑する意味も理解できない。クリュウとしては、2RBに出て、飛走^{はし}る、そして勝つ。それが全てであった。

「クーちゃんいる？」

ドアをノックしてルリが現れる。

「クーちゃん宛てにこんな手紙が入っていたんだけど」

その手紙には差出人の名前が無く、疑問に思いながらも中を開く。そこには、

「スカイレイル・カップの招待状？」

話題にある2RBへの招待状が入っていた。

OS（後書き）

1週間で3話、ネタはあるけど書くのが辛いです……日々の積み重ねが大事とした呉璽立児です。

私、テキストエディタで書いていて、どれだけ文量を書いたかを容量で図っています。

今回の話実は、3KBでこの後にまだ続く予定だったのですが、気がつけば10KBに……。

この辺の配分が出来てないあたりが……まだまだですね。

では今回はこの辺で。できれば沢山の人にこの小説が目に残ることを願って。

変な所の改行を修正しました

陰謀

今日もアドウ工房脇の第二ハンガー……《ディーゴ》の周りは急がしそうである。

その中で動き回る十数人の内のほとんどが顔が皺くちやの年寄りばかりである。

「ヒヒヒ、君は本当に面白いことを考えるね……ヒヒ」
「出来る？」

その中でも年齢が十代というクリユウは、この《ディーゴ》というHSAの持ち主である。

クリユウは、EOM^{エオム}技師であるウエマーに《ディーゴ》に搭載するEOM^{エオム}をオーダーしていた。

「ヒヒ、原理的には可能だ。ヒヒ、魔雷で証明されたように、魔素を含む燃料から発生したモノには、魔素が宿るとされているからねヒヒ」

ウエマーは笑顔を崩さずに続ける。

「……ヒヒヒ、それにしても今まで無茶な相談はいくつも受けてきたことはあるが、これほど滅茶苦茶なのは初めてだ、ヒヒ。ンフフ、何せ君は、こんな年寄りに、今まで作ったことの無いまったく新しいEOM^{エオム}を作れというのだからね」

技術というのは、積み重ねがあり始めて進歩する。

「でも、滅茶苦茶なだけで、無理ではないんだなヒヒ」

クリユウがオーダーするEOM^{エオム}は、確かに今まで類似する物が存在していないEOM^{エオム}だ。だが、それを実現する為の理論は確かに存在する。だから、無理では決して無い。

「……本当にいいの？ オレなんかの為に作ってもらっても、儲けはない……かも」

「ヒヒヒヒ、そんなのはどうだっていいのさヒヒ」

ウエマーは周りを見渡す。

「ここにいる連中の誰もがそんなこと気にしてないさヒビ。奴らは自分の経験をその手に生かしたいだけ、ヒビッヒ」

そして、ウエマーは薄気味悪い笑みを浮かべる。

「ヒイヒヒヒ、それにね約束したとおり、”ぼくがかんがえたさいきょう”のEOM^{エオム}を積み重ねて貰えるんだろうヒビ。それならこれぐらいのお膳立てはしてあげないとねヒビヒヒ」

クリユウの背筋が一瞬凍りつく。先日ウエマーと約束したソレ……。無表情無口なウエマーをそこまで高揚させてしまう程のものであるのか。クリユウには安易にOKを出してしまった約束が、悪魔との契約であつたのかもしれないと思つた。

「くーちゃん？」

そんなときであつた。サリナの母、ルリが現れた。

「くーちゃんに、お客様よ。事務所に通してあるから、行って来て」
「分かりました。ありがとうございます」

そうルリに告げると、クリユウは事務所へと向かう。

（誰だろう？）

そう思いながらクリユウは事務所の扉を開ける。

あけると、背広を着た男が椅子にも座らず立つたまま待っていた。

「こんにちは、クリユウ・イワザキ様ですね。私^{わたくし}こういうものです」

そう言い、その男は名刺を差し出す。

名刺なんて見たことも無いクリユウは覚束ない手付きでそれを受け取る。

そこには、目の前の男、トリオ・ナリタという名とアーヨー商会という会社名が書いてあつた。

品良く微笑む彼は、クリユウが席についても立つたままニコニコとしているだけで、一向に席に付こうとしない。

クリユウが勧めると、ようやくトリオは席に着いた。

クリユウから見れば、トリオはまったく縁のない大企業同士が商談を行う場にいる……そんなサラリーマンに見える。

「実は、ここだけの話……貴方様だけにいいお話がありまして……」
そうトリオは小声で話す。

「こういった物をご用意して参ったので御座います」
鞆からパンフレットを取り出す。

パンフレットには、HSA^{ハイサ}のスペック表が書いてある。スペック表に目を向けるとトリオは続ける。

「実は、このHSA^{ハイサ}……あのアイザ・ヨーが乗っていた《スカイ》の兄弟機で倉庫で眠っていたのをこの度発見しまして」

スペック表には確かに、「ペンデュラム機構」といった《スカイ》に通じる物が書いてある。

「今なら、ご希望のローン回数でも金利が0^{ゼロ}……」

「いや、別にいらないけど」

そう言い、クリュウはスペック表を戻す。

確かにいい機体だとは思うけど、今のクリュウには必要が無かった。

トリオは度肝を抜かれたような顔をする。

「じゃ、じゃあ、貴方様の希望するお金をご融資させていただくのはいかがでしょうか？ このローンというのも我々の経営する銀行で行っているものでして……」

トリオは未だに驚きを隠せずに次の提案を始める。

これにはクリュウも悩んだ。

確かに現状、《デイーゴ》の修理に協力している人達に対価を払えそうも無い。

そんな時にこういった良い話が飛び込んできたのだ。

その話に聞き耳を立ててる人物がいた。

ルリにお茶を持っていくように言われ、サリナはお盆片手に事務所の前に来ていた。

クリュウにお客だなんてどんな人だろうという興味もあった。

決して盗み聞きしよう、とかそういう事を思っていた訳ではない。だけど、中から聞こえてくる、

『ここだけの話』

だとか、

『貴方様にだけ……』

それだけでなく、

『金利が0^{ゼロ}』

という、怪しい言葉が飛び出すと黙っていられなくなった。

誰がどう考えても真っ黒にインチキ臭いではないか。それも相手はあのHSA^{ハイサ}以外まったく無知なクリユウである。

先日もサリナからみれば騙されて買わされた《ディーゴ》の事を考えると……。

サリナは事務所に突入する。

「アンタ！　ちよつと何やってるのよ！」

「な、何ですか、あなた!？」

トリオを引つ張り出す。

「こんな疑うことを知らない相手に詐欺をするなんて最低よ!！」
追い出すように敷地外へと突き出した。

「良い話だったのに」

と、クリユウは残念そうに言う。

「アンタねえ……どう考えてもあんなの詐欺師の口実じゃないのよ!！」

少し強めにクリユウの頭をど突きながらも、サリナは安堵する。

（まったく、どうしてコイツはこんなに騙されやすいのよ……）

今回は自分がいたから良かったけど、そうサリナは思った。

大2R B大会であるWCC締め切り間近となって、マスコミ各社にとあるニュースが飛び込んできた。

そのニュースは、あのアイザ・ヨーがWCCに出走登録をしてい

ないというものであった。連日、記者達が、アイザの屋敷に通いつめるも彼女が出てくる様子は無い。WCCの執行部がアイザの家を訪れても門前払いという結果に終わると、新聞の見出しにはこういつたタイトルが乗るようになる。

『アイザ・ヨー引退か！？』

大企業クロバ工業ですらこの情報に困惑する始末であった。アイザを倒さずして、ギドレーがチャンピオンの称号を得たとしても、肩書きを拾った形になりこれでは格好が付かない。

関係各所があたふたとする中、一人ほくそ笑む人物がいた。

「くふふ」

真つ赤でふかふかな椅子に腰掛けながら、テレビをつけながら色々な新聞を広げては投げ、広げては投げを繰り返す。

「……お嬢様……それはあんまりにもお行儀が悪うございます」

ゴンドは主人であるアイザに忠告する。

「だつてえゝ。くふふ、こんなに愉快な事つてある？ ほらほら……」

「『アイザ・ヨー引退か！？』ですつてよ」

もはや、アイザは可笑しくて可笑しくて腹を抱えている。

アイザの部屋は今カーテンも締め切っており、こんな行儀の悪いアイザを見れるのは執事のゴンドだけである。趣味悪く、こういう算段を考え、ニヤニヤと笑うアイザを見るものがいればファンも減るのではないかと、ゴンドはため息をつく。

「お嬢様、WCC執行部からのお手紙が……」

「破り捨てなさい」

アイザの興味はWCCにはまったく無かった。

関係各所が大騒ぎすればするほど、アイザの気はスツとした。アイザはHSAとは無関係な口実で持ち上げられることに、ほとほと嫌気が差していた。

「そつえば、例の件はどうなったの？」

「楽しみにアイザはそうゴンドに尋ねる。」

「……実は、」

とうとう来たか、とゴンドは思う。これほど楽しそうにしている主人の気を害しそうで黙っていたのである。

「失敗したそうです」

「は!？」

アイザは目を点にする。

「あれほど良い条件を提示したのに!？」

「それがいけなかったのかと……逆に怪しまれたそうです」

「じゃあ、適度に怪しまれないようにしなさい」

アイザはHSA以外の事に関しては興味も関心も薄い。だからどうしてもHSAハイサに関係ない駆け引きに対して爪が甘い。その為のゴンドであつた。

「そう思い指示を出したのですが、当人に接触出来なく」

「ああああ!! もう、それじゃ意味ないじゃないの! いいわ、

あたしが行くわ」

「いけません」

気がついたら即行動、年相応のアイザをゴンドは静止する。

「飛走都市までは、延べ2日も掛かります。間に合いません! それに記者会見はどうする気ですか？」

ゴンドは駄々を捏ねるアイザを引き止めるのに苦労した。

そして、WCC締め切り日が過ぎた。

「おいおい、何する気なんだ。あのお嬢様は……」

世間の注目を浴びるアイザの記者会見にチャンネルを向けながらアドウは呆れる。

この日ばかりは、アドウの工房で働く者だけでなく、第二ハンガリーのクリュウに協力しているもの達までもが小さなテレビの前に集まり、部屋の中はひしめき合っていた。

テレビの中でアイザが舞台に向かう姿が現れると、沢山のフラッシュが焚かれた。

アイザは工房を訪れるときはまた違った、貴族然とした格好で優雅に壇上に上がるとスカートの端を摘んで一礼する。

大衆が噂するような、アイザの引退会見ではないと、ここにいる皆は確信している。

「あのお嬢様がH S Aから降りたら、何も残らねえじゃねえか。第一そんなタマかよ」
ハイサ

引退で間違いないとコメントするテレビの中のアナウンサーをハタが笑い飛ばす。

「皆様、この度はあたくしの会見にご足労願い、まことに感謝いたします」

アイザの会見が始まる。

「ぷっ！」

始めの一言で、既にアドウとハタは噴出して。彼らからすれば、猫を被っているアイザが変にみえて仕方がない。

「あたくしから申したいことが幾つか御座いますが……先に何名からの質問を伺いたいと思います」

そうアイザが言っていると記者のほとんどが手を上げる。

「では、その方」

「はい、自分は2 R B日報の者です。皆が気になっている事だと思っているのですが今回、2 R Bを引退するというのは本当なのでしょうか？」

出て当たり前という質問が飛び出る。

「うふふ。あらあら、どうしてそんな虚言がでたのかしら？」

「こいつ狙ってやってるだろ」

得意気に笑うアイザを見てアドウはそんな言葉しか出てこない。

「それは、アイザさんがW C Cに出走していないからで……」

「それじゃあ、W C Cに出ないと何故あたくしは引退してしまうの？」

『う！……………』

その質問に記者は答えることが出来ない。

前回のチャンピオンなのだから出るのが当たり前だろう……そういう常識を皆が持っていたからこそ、アイザが勝ち逃げ引退をするのではないかと噂された……これが真実である。

『ごめんなさい……この質問は少し意地が悪かったですね』
アイザはそう謝辞する。

『あたくしがこの度WCCに出走出来ないのには意味があります』
世間が注目する回答が今……答えられようとしている。

『あたくしは同日程……菖蒲^{あやめ}の29の日とある大会の主催者として参加する予定です』

会場にどよめきが走る。

『その大会は既に出走を締め切り、優秀な……』
アイザは視線を横にそらす。そこにはゴンドがあり、コクコクと頷いている。

『……ライナーが参戦登録をされております』
アイザの顔がアップでテレビに映る。

『またあたくしの方で一名に招待状を送っております』
テレビの前にいる全ての人物が今凍りついた。

写されているアイザはこの一言の間、少し自信なさげな表情をしている。

『もちろん出てくださる……出てくれる……よね？』

と、若干不安な声が混じる。

記者から質問が飛び出る。

『その2RBの名前は！？』

『SC……スカイレイルカップといいます』

テレビの前の皆の視線が一気にクリュウへと向いた。

陰謀（後書き）

こんばんは、呉璽立児です。

今回の話は前回の伏線回収回となっています。

少々短めに仕上がっていますが、「ほお」「へえ」と思っていただくと尺者的には嬉しい限りです。

今週はこの話でおしまいです。……本当に日曜日にアップはしないですよ。ホントにホントですよ。

それぞれの思惑

アイザの記者会見はH S A界を震撼させた。^{ハイサ}

現チャンピオン、Sランク保有者、最強ライナー、アイドルライナー等の様々な冠を有するアイザ・ヨーの発言力の強さが伺えた。表向きはW C Cが2 R B最高峰の大会であることは変わらない。だが、前回のW C Cチャンピオンが別の大会を開催するとなると具合が変わってくる。

W C Cはトーナメントながら挑戦者とチャンピオンの雌雄を決するという趣旨が強い。これがS Cの開催 エキシビジョンによって優勝者とアイザの決戦という条件によって、W C Cは一番の目玉を失った。

アイザの行動は2 R Bのあり方を観戦者に問いかけるものである。2 R Bファンは、一体W C CとS Cどちらを選ぶのであろうか。

ここはH S A^{ハイサ}を販売する大企業であるクロバ工業。その中の2 R B営業室、室長であるトチは、膝を揺らしながら椅子に掛けている。「ほ、本社から、このような事が上がってしまして……」

彼の部下は冷や汗をハンカチで拭いながら、報告する。

「フン、たかが小娘一人が開催する大会が何だというのだ」
上からの命令に対してトチは息を上げる。

トチは現在の職場が嫌いであった。彼はクロバ工業軍事部門の出身者の中でもエリート社員で彼の功績を会社が評価して2 R B部門に転属となった。だが、彼はそれを左遷と考えた。トチの中ではH^ハS Aを用いて2 R Bをすることは、“遊び”でありそれを許容することが出来なかった。

「それでは、困る……そうです。このままではギドレー・マイルがW C Cに勝っても知名度を得られないのではないかと」

「まったく、何が問題だというのだ。対抗馬が減って良かったではないか」

WCCはおそらくアイザがないことによって、ギドレーの勝利で終わるだろう。そうなれば、チャンピオンの座はギドレーの物となる。

2RBについて興味も関心もないトチは知らない。WCCが大きな大会へとなっていたのは、ファンの力があってこそだ。チャンピオンという座もファンに認められなければただの自称に過ぎないことである。もし、WCCではなくSCにファン達の目が行けば、大衆からチャンピオンと呼ばれるのはアイザかもしくはSCの勝者であろう。

「そこまで言うのであれば、SCに出る賞金稼ぎでも雇えば良いではないか」

トチが考えた作戦はこうだ。

元々フリーの私設大会であるということで、賞金目的で出場する輩もいるのではないかということだ。その者を雇ってクロバ工業の力を使いバックアップをする。そして、賞金稼ぎが大会で優勝するというシナリオを作り出せば良い。

SCをぶち壊すという作戦であった。

「確かに、それは効果があるかもしれませんが」

部下は顔を顰めながらそう言う。

「だろう？ だったらすぐにSCの参加者リストを調べて来い！！」

トチは部下にそう命令を出した。

「そういえば、2RBという言葉をよく聞くのですけどそれってなんなのですか？」

昼上がり、そんなメモの発言は、周りの人間を凍りつかせた。確かに自称OSと名乗る正体不明のメモの事だから知らなくても当然かもしれない。そもそも2RBという用語が生まれたのもこ

こ50年ほどの話だ。

元々は人々の武器として生まれたHSA^{ハイサ}が平和な世において娯楽として空を走る競技として使われるようになった、それが2RBである。

だが、改めて問われるとクリウは困ってしまう。

この時代に生きる人間にとって、HSA^{ハイサ}は2RBなのだ。たしかに軍事力として軍はHSA^{ハイサ}を保有しているが2RBのHSA^{ハイサ}に比べれば時代遅れな物も多く、機体も使用目的も魅力に欠ける。

(確かに、ルールぐらい説明しなくちゃだな)

メーメがOSとして《デイーゴ》に共に搭乗する以上必要不可欠なことであった。

クリウは、2つのHSA^{ハイサ}の模型を用意する。一つは修理完了後の《デイーゴ》をイメージした黒い模型、そしてもう一つはここで制作を請け負っていた《ホープ》だ。

「2RBはスタート前にこうやってスタート地点に並ぶんだ」

そう言っ、クリウは2つの模型を置くのではなく、手に持ったまま話を続ける。

「そして、スタートの合図と共に走り出す」

手に持った模型を前に進ませる。《ホープ》を前に《デイーゴ》が後ろを走る形を取らせる。

メーメはこくこくと頷いている。

2RBのルールはそれほど厳密ではない。これは元々が軍人の飛走技術を競い合う模擬練習が2RBの由来まで遡るからである。ただ、試合という見世物の形態をとる以上お互いのHSA^{ハイサ}の力が均衡していなくてはいけない。その為に規則は存在する。

例えばHSA^{ハイサ}に積むエネルギーを一つにしなくてはいけない、というルールがそうだ。ただ、これはあくまでスタート前までのことであり、《ホープ》のように飛走^{はし}りながら発電するようなHSA^{ハイサ}は規定に引っかからない。こんなルールの抜け穴もあるぐらい厳しくはないのだ。

そして、オーバーランという特殊勝利条件も試合を円滑に行うためのルールにあたる。お互いに均衡した技術を持つライナー同士が戦うと、どちらも撃墜されること無く、2RB終盤ではお互いに残りのエネルギーを気にしてEOMエオムを使わず……そして両機とも停止してしまう、という余りにも締まらない結末を迎えたということがあった。そこで出来たのがオーバーラン 規定の距離を走りきると勝利するというルールである。

このルールを一見すると、ただ逃げれば良いと発想するかもしれない。だが現実はそのままで甘くない。ルール作成者も考慮したのである。オーバーランというルールと共に戦闘エリアというルールも実装された。これは簡単に言ってしまうえば決められたエリアから出てはいけないというものだ、出ればそこで即失格である。直線に走り、逃げられない、これだけでオーバーランは難しくなる。

そして最高速度の問題である。HSAハイスは、空にスカイレールを引き、その上を飛走する。つまり、スカイレールを描く以上のスピードを出すことは出来ないのだ。スカイレールをあらかじめ描いておくという方法もあるがこれは対戦相手に予め走るルートを公開しているも同然なので引いた箇所に先回りされてしまう。

そして近年、HSAハイス単独 EOMエオムを用いずに出るスピードが上がっていることもオーバーランを難しくさせている。EOMエオムを使わずに攻撃に使用するというのが現在の2RBの戦闘スタイルである。戦闘は過激化し、2RBは民衆を誘惑した。

メモに説明しながらによる模型の戦闘は《デイーゴ》が上を取り《ホープ》を迎え撃つ構図を取る。

HSAハイスのOSとして生を受けただけあつてか、有利、不利、戦闘の考察等は当然のように出来ていた。

《デイーゴ》が下降を始め攻撃姿勢を取る。

「EOMエオムを使用して……」

「今なの、殺せ!!! EOMエオムで敵の腸をぶちまけるの」
クリュウは、ブツ、と唾を噴出した。それと同時に思わず左手に

持っていた《ホープ》の模型を落としてしまう。

「敵機撃墜なの。相手はこれで海の藻屑……状況終了なのです」
もちろん2RBにおいて、相手を死に至らしめる行為は最も行つてはならないことである。

クリユウはため息をつくと2つの模型を机の上に置く。

これはメーメに対して根本的な意識改革が必要だと、クリユウは感じた。

「もう、駄目じゃない。女の子がそんな汚い言葉使っちゃ!!」
そう言つて現れたサリナは、机の上に置かれた《デイーゴ》の模型を手に取る。

「ふーん、憎たらしいくらい良く出来てるじゃない」
サリナは模型と実物の《デイーゴ》を見比べる。

SCに向けて《デイーゴ》の修復は80%程まで完了している。

《デイーゴ》は他のHSAハイサと見比べても武骨な作りをしている。それは模型の《ホープ》と見比べても顕著であった。

始めに剥がした装甲は結局、錆を落とし黒く塗装をして元の位置へと戻してある。

これはS系HSAハイサが大きなボイラーを持つゆえ(いたし方)＜仕方＞の無いことであった。通常のHSAハイサが纏うような装甲では敵の攻撃を受けて損壊する前に内側から溶解してしまうという、恐れを技師達が示したからであった。彼らの年の功もあって、《デイーゴ》の修復は順調であった。

問題点は、EOMエオム、燃料、OSを残すまでとなった。

「おい、クリユウ!!」

威勢良く、古い扉が開かれる。現れたのは、タヌキであった。

「お前なあ……手伝ってくれるって言ったのにどこ行つてた」
クリユウもこの瞬間まで存在を忘れていた。

「ふふん、この俺様がいつまでもタダ働きをしてると思うか?」
という訳で、いい話を持ってきた訳だ。この時間だったら、まだオモリちゃんもいない……。

ッ！？」

タヌキが呼ぶオモリちゃん事サリナと目が合う。

「わ、悪いクリユウ用事を……」

「この！！ 詐欺狸、また騙しに来たのね！」

サリナは瞬時にタヌキまで距離を詰め寄ると耳を摘みあげた。

「痛っ、痛！！ クリユウ助け……」

「さあて、あつちでお話しようか…… お爺ちゃんも交えてゆつくりとネ。そうそう、約束を破って逃げたこともしっかりと聞かせてもらわないと」

タヌキは悲鳴を上げながら倉庫から連れ出されて行った。

その後しばらくして青ざめたタヌキがクリユウの元を訪れる。

「ホントにいいのか！？」

「……ああ、好きに使ってくれ」

タヌキは、魔炭石を調達してきたのだという。それをクリユウにタダで使わせてくれるという。

「おい、なんか裏でもあるんじゃないかなえよな？」

タヌキはブルブルと一生懸命顔を横に振る。

「そうか……でも、タダじゃ悪いから稼げたらいつか払うよ」

「期待しないで待ってるわ」

いつもはお金の話をするだけで目の色を変えるタヌキがこのときばかりはしおらしくしていた。

まるで獅子にでも睨まれて、巢穴に隠れ震える狸とでも例えれば良いのだろうか。

それぞれの思惑（後書き）

ご覧くださりありがとうございます。

今回の話はつなぎ的な意味合いが強くこれまでの話に比べれば言いたいことが余り無かったかも知れませんが。

しいて言えば2RBのルール説明といった所でしょうか？

この章、小説全体を通して、駄目な所、良い所等のコメント募集中です。小説を良いものにしたかったので是非皆様の知恵をお貸し下さい。

メーメの冒険

夜も深く誰もが眠りについている時間、倉庫でガサゴソと動く月に写された影が一つ。

バリバリ

魔物が骨を貪り喰うような音が、無人の倉庫に響き渡る。

無人というのは言いえて妙だ。なぜなら影は人型をしているのだから。だがそれでいて正しい。

ゴリゴリ

なぜならソレは人ではないのだから……。

「ゲフツ」

ソレは口から？^{おくび}を吐き出す。

そしておもむろに手に握っていた物体を投げ捨てる。山積みになれた石のようなものに当たり、ゴロゴロと崩れる。

「美味しくないの……とんだ粗末物なの」

袖で口を擦ると、口や頬といった顔の下半分が黒く汚れる。それを彼女は気にするでもなくトテトテと歩き出す。

工場は今日も急がしそうである。

そんなこと関係ないと言っても言うようにハンガーの端で、少女が足をぶらぶらさせて座っている。彼女は珍しい亜麻色の髪をしており、その身にはスカートのフレア部分がフワリと広がるドレスをまとっている。白と黒のコントラストが眩しい。

ハッキリ言えば油まみれのジーンズすがたで働く老人達が多いこの場所で彼女の姿形は見事に場違いであった。

彼女の名前はガラメーメという。本人や周囲の者達は彼女をメーメと呼ぶ。

メーメはこの目の前で修理される《ディーゴ》のOSだ。だから、

飛走^{はし}る以前では彼女の出番は無い。同じ身分であるはずの彼女の主人といえば、

「おじさん、ハイこれ」

「おうよ、アンちゃん働くねえ」

と、倉庫内を駆け回っている。その姿はメーメから見ても人間の子ども同然であつた。

そうクリユウを感じたとしても、メーメ自身もその容姿通りに子どもである。

「よし！！ 冒険に出かけるの！」

思い立つたが吉日、メーメは立ち上がる。

スタスタと行進しながら外へと出るがそれに気がついたものは無かつた。

飛走都市の工業区をメーメが歩く。工房の敷地内を出ても彼女が周囲の視線を引くのは代わりが無かつた。

メーメはそんなことお構い無しとまでに道を知るわけでもないのに歩いていく。

工業区は、居住区ほど整備はされていない。道は石畳ではなく砂利道で舗装などされていないし、建物も歪に建築されている。そして、シャッターの下りた朽ちた工房も目立つ。

それでも、飛走都市スカイレイルと冠するだけあり、出歩いているライナーも多い。

中小工房が多い工業区というだけあり、職人やライナーも見るとゴロツキに見えるガラの悪そうな者が多く、女、子どもはまったくという程見ない。

メーメは生い茂る乱雑な大木の合間に咲く一厘の花。木が倒れてくれば踏み潰されるそんな儚い存在に見える。

「おい、これ以上削れねえとはどういうことだ」

周囲に聞こえるほどの怒鳴り声が突然響いた。その声の持ち主は

はまるで対する相手を怖がらせる為に存在すのかという人物であった。まずは、その身なりである。平均男性よりも遥かに大きな2メートルという身長、そしてその巨体を飾りつける鎧ともいえるであろう全身筋肉、極めつけがスキンヘッド……男はどこから見ても肉体言語派だった。

「そうは言ってもね、お客さんこれ以上は無理だよ」

工房の店員は客を刺激しないように言う。

「どこも彼処も削り過ぎだ。これ以上やったら、HSA自体が危なくなるよ」

確かに軽くすることはHSAのスピードと関連している。だが極度の重量軽減はそのまま強度の減少に直結する。

「それじゃあ、これ以上は早くできねえっていうのかあ……ああん！？」

メーメはチョコチョコとした走り方で、強面の男に近寄る。

「ん？ なんだあ、お嬢ちゃんは？」

突如足元に現れた少女に対して、男はそう反応する。

「そんなに、重量を落としたければ 自分自身のその無駄に無駄なく付いた無駄な筋肉を落とせばいいのよ」

HSAに乗るのであれば、確かにHSAから削るのではなく、体重を落としたほうが賢明かもしれない。見ただけでもその男の体重は成人男性の2倍はあるように見える。

確かにもつとも機体の重量を落とすよりも遥かに効率的な方法だが誰もがその方法を提案しなかったのには理由がある。

「……」

メーメのその一言に周りが凍りつく。皆が恐れて言えなかった一言、それを誰ともわからない少女が言ってしまったのだ。

全ての者がメーメの悲惨な未来を予想した。大男がその気になればその少女など一捻りである。

「ああん？」

店主が目を瞑った。

(ごめんよ)

店主だつて自分の命が惜しい。願わくば命を落とさないように、とそう祈る。

だが、待っても少女の悲鳴も殴るような音もしない。

店主がうつすらと目を開ける。

大男は確かに手を出していた。

その手を少女の方へと出し……その大きな手で……少女の手を握っていた。

「おお、その方法があつたか!」

「へ!」

その強面の顔を破顔させた。笑っている……とはいっても歪で恐ろしいがその男は、感謝していた。

「どうしてそのことに気がつかなかつたか、灯台下暗しとはこの事だな。ハッハハ、俺もまだまだだなあ」

男は、店長もその事に気がつかなかつただろう?、と笑う。

店長は取り繕うように微笑む。

「いい加減に痛いよ」

メーメは掴まれていた手を振りほどく。

「おお、スマンスマン」

「それじゃあ、メーメは行くのよ」

メーメは手を振り立ち去った。

工房を去ったメーメは居住区へと来ていた。

居住区は道も建物も整備されている。

正直メーメはここがどこかも分かっていない。

思ふのは、HSAが全然無いの、それぐらいであった。
ハイサ

「あやー、カワイイ嬢ちゃんやねえ」

そう言う声と共にメーメは頭を撫でられる。

メーメが後ろを振り向くとそこにはサリナと同じ服を着た女学生

ソラが立っていた。

「うわ、近くで見るとホントかわええなあ……。でもなんだろ、昔こんな格好した誰かを見たことある気がするなあ」

ルリが製作したドレスを見てソラはそう思う。

「なあなあ、アンタお持ち帰りしたらアカン？」

「アカンの！」

「そうやよなあ……」

「メーメはごしゅじんさまの所有物なの。メーメが勝手に決めることは出来ないの」

メーメはそれとなく爆弾を投下した。

「えっ！ それって…… 青少年だとか健全でないとか子どもの育成に悪影響を与えるだとかそういうったことを……」

ソラは目の前の少女が不憫な目に会ってるのではないかと思った。

「それにごしゅじんさまはメーメがいないとHSA^{ハイサ}を走らせることも出来ないの」

（あ、そっちの方なんか）

ソラは安堵する。恐らくライナーの従者か何かなのだらうと察する。

（それにしても、こんな小さな娘に「ご主人様」と呼ばせてるんか。それに見るからに興味が入った服着せとるなんて、とんだ変態やな

……この娘大丈夫やるか……）

ソラの中では完全にメーメは可哀想な娘だと勘違いされていた。だから、なんとか明るい雰囲気を出そうと話題を変えることにした。

今、飛走都市はSCの事で大盛り上がりだ。ソラの会話も自然とそちらの方に向く。

「それにしてもなんで、ギドレー様はこの街に来てくれんのや」

クールで俺様系なギドレーは女学生の中では人気があった。

「メーメは知らないのよ、そんな人」

「そうなん？ メチャカッコいいで。あーでも、彼氏にしたいかと

言えば別やな。なんか扱いにくそうやし」

「SCといえば、メーメのごしゅじんさまも出るのよ」

(うわ、藪蛇やった)

せっかく忘れさせてあげようと思っていたのに再び出てきてしまった話題にソラは頭を抱える。

空に夕日が浮かぶほどソラとメーメは話こんだ。とはいっても、

ソラがメーメを猫可愛がりしたただけであつた。途中、露天で焼き菓子を買ったりしたのだが、メーメは、

「焼き方が足りないの。もっと、黒くなるまで焼くの」

と、素つ頓狂な注文を出して、店員とソラを驚かせた。

「アカン、そういえばウチ今日オカんに頼まれごとされとったんや
った」

ソラはメーメとの会話を終わらせる。

「ええか、メーメちゃん。何かセクハラされたら大声出して助けを
求めるんやで」

ソラはメーメに釘を刺す。

メーメはソラの話の半分も理解してはいなかったがコクコクと頷
いた。

「ほな、またなあ」

メーメはソラに言われたように歩き再び工業区へと戻ってきてい
た。

「ん、なんだかい匂いがするの」

クンクンと匂いを嗅ぐと、メーメ好みの美味しそうな香りがした。

「ココなの」

古いレンガ作りの建物がある。工業区にあるH S Aが^{ハイサ}入るような
大きな建物ではなかった。

メーメがその建物をドアを開ける。

「わあ」

その中は、ピーカーに入った魔油液や魔炭石といった様々な燃料が置いてある。

「おや……随分小さなお客さんじゃのう」

カウンターに座る黒いローブを被った人物がそう言った。

「メーメと対して変わらないのよ」

「な、なんじゃと！　う、うおっほん」

黒いローブの人物は咳払いをする。

「で、何のようじゃ」

「特に用なんてないのよ」

店主と思われるその人物は驚嘆する。

この店は、言ってしまうえば燃料屋なのだが店の雰囲気は黒魔術的というか、いかにも門を潜りにくいと、敬遠されていた。

子どもに言わせれば、一種のお化け屋敷のような物だった。

「ただ美味しそうな匂いがしたのよ」

「はて……そんなもの無いがの」

店の中には、燃料ばかり……後は店主の前にあるマグカップぐらい。

「これなのよ」

そういつてメーメはカウンターの上にあったマグカップを手にする。

「こ、コラー！」

店主は椅子から取り戻そうとするも、背が低く安定していなかったため椅子から転げ落ちる。

「へっ」

その間にメーメはマグカップの中で湯気を立てる黒い液体に口をつける。

「それはワシ以外が……」

「お、美味しいの」

「う、嘘じゃ」

「本当なの、美味しいのよ」

転げ落ちて顔まで隠れるローブが剥がれ顔が露になった　少女
は驚きを隠せないようであった。

「な、ならこれはどうじゃ？」

そういいながら、少女は小さな球状で青く透明な物をメーメへと
差し出す。

「はむ」

メーメはそれを手で受け取る出なく、少女の手から直接口に入れ
る。

「手で受け取らんか！」

「とつても甘いのよ」

「なん……じゃ……と」

少女は顎にてを当てる。

「……まさか……ワ……魔………体……？」

その声はぶつぶつと呟くのでメーメの耳には届かない。

「これも美味しそうなの」

ゴクゴク

「いや……」

「こっちは？」

バリバリ

「なんじゃ、この音は？」

店主が考え事をしている間にとある異音に気がつく。

ふと目の前を見ればメーメがいない。

「な、なんじゃあああー！」

見れば店内が荒らされている。もちろん犯人はメーメだ。

「こ、コラ。それは食べ物じゃ……」

少女の怒りが奮闘する。いくら言っても言う事を聞かない。

「いいかげんにせぬかああああー！！！」

「うわっわわ、お、怒ったの！」

メーメは一目散に店から飛び出る。

「こらああああ!!」

少女も落としたローブを再び身に纏うと外へと飛び出す。

「ぎゃん」

メーメが男とぶつかる。

「観念するのじゃ」

黒いローブをはためかせ距離を詰める。

「ててて、なんだクリュウンとこのガキン娘こじゃないか」

メーメがぶつかった相手はタヌキだった。

「もっとよお、どうせぶつかられるならグラマラスな……いやでもこの体格の割には意外とオツパイが……」

タヌキの手はメーメの胸の部分にあった。

「へ、変態なの!!」

「はあ？」

タヌキはドンと突き飛ばされる。

「グへ」

と、タヌキは子どもの力で弾かれた。

「……フッフお主、あの子どもの知り合いか……」

そして倒れた先には黒魔術師風の人が立っている。

その纏うローブ姿をタヌキも知っている。

「ゲ、お化け屋敷のババア!!」

「誰がババアじゃ。その娘が台無しにしたワシの商品の代金を払って貰おう」

「な、なんで俺様が……」

「問答無用じゃ!」

「ひ、ヒイ!!」

タヌキはしぶしぶと「なんで……」と呟きながら店へと連行される。

その店は、飛走都市で最も古い……いつ代替わりしているのか分からない店主が営業する燃料屋である。

現在は、源の賢者と賢人会で謳われるタネという老人が経営する

近づくのも恐れられる怪しい店として都市伝説になっている場所であつた。

メモの冒険（後書き）

先週アップ出来なくてごめんなさい。

という訳で、続きます

変換出来てなかった文字を修正しました

試走

「ようやく形になったなあ」

クリュウは《ディーゴ》^{ハイサ}を見上げてそう言う。

《ディーゴ》はHSA^{ハイサ}としての機能は復元が完了した。ここに運び込まれた当初は錆びていたボディも今では艶のある黒い塗装が施されている。

通常のHSA^{ハイサ}とはまた違う重量感には圧倒される。

HSA^{ハイサ}のデザインに代表されるような風をすり抜けるような友好的なフォルムではない、《ディーゴ》はその体を走らせる為に肥大化した機構を隠す事無くある、故に走ると発生する抵抗に対して素直にブチ当たる暴力的な形状ともいえる。

完成は近い。

「後はウエマーさんのEOM^{エオム}だけか」

外側は完成してもHSA^{ハイサ}の核とも言えるEOM^{エオム}は手付かずだ。ドサツ、という重量感あるものを置いた音が聞こえる。

「……………」

その音の発生源はいつからそこにいたのかウエマーだった。彼はトランクケース大の箱2つを床に置いていた。

その箱こそがEOM^{エオム}をCOM^{コム}と呼ばれるソフトウェアだ。これに魔素とエネルギーをCOM^{コム}に流すことでEOM^{エオム}が発生する。トランクケース大という大きさは、ソフトというにはハードだ。

「これが、《ディーゴ》のEOM^{エオム}？」

そうクリュウが尋ねるとウエマーはすうーと目をゆっくり合わせると緩やかに頷いた。

最近忘れられがちではあるが、ウエマーは無口で無表情な感情に乏しい人間だ。だが、一度興味があること、愉快なことに遭遇すると突然人間が変わる。

無口なウエマーは非常にやりにくかった。

ウエマーは手で人差し指、中指、薬指、小指を立てる。

「これが4つあるって事？」

E^{エオム}oMは4つ、つまりウエマーが運んできたC^{コム}oMが後2つはあるということだ。

「後2つはオレが運ぶよ」

そう言ってもウエマーは反応しない。ただ、端のほうにいるメモを指差す。

彼女を呼べ、ということをクリックウは悟る。

「メモー！」

先日は突然いなくなるという事件を引き起こしたメモーであったが今日はハンガーの中で退屈そうに座っていた。

メモーはトコトコと走って此方にやってくる。

複座で乗り込む《ディーゴ》はOSである彼女が細かい調整を彼女が担うことになる。

「魔法なの、魔法なの」

メモーはトランクに手を当てる。

彼女は一見人間と変わらないように見えるが、H^{ハイサ}S Aの機構にこうやって手を当てるだけで管理、発動することが出来る。

「インストール完了なの」

「いんすとーる？」

聞きなれない単語をクリックウはメモーに問いかける。

「メモーの中に、魔法をいれたのよ」

その説明は余りにも拙く、率直でクリックウには理解しがたい。

「ヒ」

だが、その短い説明で理解出来た者もいる。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ。つまり、こういうことかい、莫大な保存容量を持つハードにソフトを、入れる インストールする。そのハードはOSが管理しておりソフトを直接実行する。ヒヒヒヒヒヒなんて効率的なんだヒヒヒヒ。そうすればこんな大きな木偶の坊などいらない。ヒヒヒ。そうだ今すぐこれを海に投げ入れよう

じゃないか」

ウエマーが壊れた。

それをクリユウは押しとめる。ウエマーにとってはタガが外れてしまうほど画期的な運用方法だったのである。COMコムを持ち上げて叩きつけようとするものだから押しとどめるのに大変苦労した。

「つまりバックアップも大事だということかい。確かにその通りだね、ヒビ。消えてしまったCOMデータは元通りには出来ないしねヒビ」

と、納得した。

様々な困難を解決し、《ディーゴ》は飛走はしれる用になった。

だが、HSAハイスは何度も運用試験を繰り返して実用段階まで持っていく練習が必要となる。しかし、アイザのようにスタジアムを貸しきつたり、対戦相手を雇う余裕などクリユウにあるはずはない。

「ふふふ、オレにいい考えがある」

不適にクリユウが微笑む。

飛走都市スカイレイル郊外、2機のHSAハイスが飛走している。

街を守衛する夜間巡回の帝国空軍のHSAハイスだ。

戦時中であればHSAハイスを製造する都市は真つ先に攻撃対象となる場所だ。その名残が現在まで残っているのである。だが、守護する意味合いが薄くなり現在ではたった2機のHSAハイスがバディを組んで定時に巡回するだけに留まっている。

空を駆るHSAハイスはD系HSAハイス《T-40》と《T-201》の2機だ。軍用のHSAハイスは2RB用のHSAハイスに比べれば明らかに旧式と言いえる。安定性を求めるために2RBで使い古された技術を用いている。その為、不測の事態は起こりにくい。

そもそも運用方法が違うのだ。一対一で戦う2RBと違い、HSAハイの戦争は複数の機体がチームを組んで戦う。それに2RBHSAハイスとは違い、スピードに特化させていない分、攻撃EOMエオムが実に強力

だ。

「それにしてもヒマだなあ」

《T-40》に乗るデオは、通信に乗せて同僚に愚痴る。
ヨンマル

「もう、すっかりやってくださいよデオさん」

彼の部下《T-201》に乗るロドはそう忠告する。
ニイマルイチ

「そうはいつでもなあ」

これはもう彼の口癖であった。もう数十年握っていない武器のトリガーを見れば、ため息も一段と増す。

「おめえの新型も泣いてるぜ」

『ハイハイ』

ロドの受け流しも何時ものことだ。

飛走都市の治安が……というよりもライナー達が馬鹿をやって許可もなく飛走びまわっていた時期は毎日のようにトリガーを握っていたと思ひ出す。

最近はそんな馬鹿をやる者もない。

「俺のイチモツが錆び付いちまうよ」

嘆息は尽きない。

今日は風もなく飛走るには良い日だ。
はし

「なあ、俺とやりあわねえか」

『馬鹿言わないでくださいよ』

「だよなあ」

ロドは真面目過ぎるのが玉に瑕だ。

『これは……HSAの反応？』
ハイサ

「どうしたあ？」

詰まらなそうにデオはそう返す。

『飛走許可の出ていないHSAが背後から接近!!』
ハイサ

「ほっ」

どうやらデオの望みが叶いそうな気配だ。

問題のHSAは2機の後ろへと着く。
ハイサ

『どうしますか？』

相手にはこちらが軍のHSAであることは分かっているはずだ。

ロドがデオに判断を求める。

「ちよいと待ちな」

暗がりなのでどんな形状をしているかは分からない。ただ燃焼反応……物を燃やして飛走はしっていることを考えるとD系HSAハイサだろう。

HSAハイサが今は珍しいモノライトをパカパカと照らす。

「いい夜ですね」だとお……クッククク」

「どついう意味です？」

デオは後ろのHSAハイサがパッシングしてメッセージを送ってくることを読み取る。

「つまりはデートのお誘いだー!!」

デオは操縦石に手を置きなおす。

「奴を押し倒せ!!」

デオは部下にそう命令を出した。

「いいか。二手に分かれるぞ」

デオから指令が飛ぶ。

「どちらかを」大筒ハイサが狙うはずだ」

デオは背後から近づいてきた正体不明のHSAハイサを”大筒”と呼んだ。後方のHSA”大筒”の動態部分が円形状になっている特徴を見てそう名づけたのだろう。

「つまり狙われなかったほうが、奇襲をかけると」

「さすが、呑み込みがはええな」

ロドには彼が操縦席でニヤリと笑みを浮かべている様子が目に浮かんだ。

併走していた《T-40》コンマルが右に曲がる。それに合わせるように

ロドは《T-201》ニイマルイチを左へと曲げた。

「さあ、ドツチを選ぶ？」

”大筒”は右へと曲がった。

ニイマルイチ
《T - 201》は奇襲を行うために上昇する。

「着いて来れるか!？」

デオは、《T - 40》^{ヨンマル}を蛇行運転しながら後方を確認する。

《T - 40》^{ヨンマル}は軍用HSA^{ハイサ}の中でも今となつては旧式の機体である。だが、あえて《T - 40》^{ヨンマル}を使い続けてきたデオはその有利不利も手に取るように分かる。

《T - 40》^{ヨンマル}は過去現在に置いても抜き出るモノの無い汎用性を誇っていた。それは戦闘の際だけではなく、パーツ等の整備面でも言えることであつた。戦時中に開発されたHSA^{ハイサ}なだけあり、少しの加工でいかなるHSA^{ハイサ}のパーツを積むことが出来るのだ。

その汎用性は、HSA^{ハイサ}を開発する企業からは煙たがられ現在はほとんど^{ヨンマル}《T - 40》^{ハイサ}が退役を迫られているほどだ。

だがそのHSA^{ハイサ}を駆り続けるデオの《T - 40》^{ヨンマル}は見た目以外はほとんど別物である。

スペックだけを見れば、現役HSA^{ハイサ}に少々劣る程度でしかない。それに長年の経験が加われば、現役HSA^{ハイサ}を凌ぐことすら容易である。

「さすがに玩具は早いな」

軍人は、2RB^{あそび}に使われるHSA^{ハイサ}をそう侮蔑することがある。デオは貶している訳ではないがそう呼ぶ。

《T - 40》^{ヨンマル}が現役HSA^{ハイサ}と並ぶことが出来るのはあくまで軍用HSA^{ハイサ}間での話である。2RB用と比べれば、相手が惜しみなく性能に安定性を裂いてくる分、特に速度面は劣ってくる。

デオはテクニカルな動きを続け、相手のHSA^{ハイサ}にスピードを出させない用に飛走する。後を追つてこようとするHSA^{ハイサ}にはこういった走法が効果的面である。

「うん？」

デオは”大筒”の奇妙な点に気がつく。

（思ったより、加速が悪いな）

両方のHSAハイサに問わずHSAハイサで最も求められるものそれは加速性能と旋回性能である。最高速度の差はEOMエオムで埋めることが出来る。だからといって加速のたびにEOMエオムを使うわけにも行かないだろう。2対1である以上”大筒”は各個撃破を狙つてくると読むことが出来るからこそその飛走はしりである。

まして、相手は加速性能が低いのでこちらがテクニカルな動きをするだけで距離を保つことが出来る。

「そろそろだな」

《T-201》が奇襲をかけるタイミングをデオは予測し、蛇行運転から直線運転に切り替える。

デオはそれでいて相手の攻撃に備える。

直線操縦をするということは、”大筒”からすれば絶好の攻撃タイミングだ。

だが……来ない

「それならそれでいい。さあ、ロド頼むぜ」

デオは相方に思いを託す。

ロドは攻撃のタイミングを見計らっていた。《T-40ヨンマル》と”大

筒”は蛇行運転でお互いに絡みあうスカイレーلを描く。それ故、

《T-201》は攻撃タイミングを図ることが出来ずにいた。

（来た！！）

デオのHSAハイサのスカイレールが攻撃開始とのサインを描く。

《T-201》は下降を始める。EOMエオムを撃つ為のトリガーに手を掛け……2機のHSAハイサが蛇行運転を止めた所を見計らって、

トリガーを引いた。

砲門から”火射”のEOMエオムが無数と飛び出す。

軍用と2RB用ではEOMエオムの攻撃力に差が出る。前者は相手を如何なる手段を用いても落とすことを目的にしているのに対して、後

者は魅せることを前提としてスピードを追求する中でいかにEOM^{エオム}を割り避けるかと設計されているからである。《T-201》^{ニイマルイチ}が装備する射筒もEOM^{エオム}を撃ち出すものだ。

EOM^{エオム}は使用法を限定すればするほど性能が上がる。例えば火のEOM^{エオム}を上げる。攻撃するのも速度を上げるのも手段は変わらないが、攻撃に限定することで敵機に与える威力は上がる。速度に關しても同義だ。だから、EOM^{エオム}は汎用性を求めるより特化させる。

《T-201》の弾幕が”大筒”を襲う。

だがその直前、”大筒”が視界から消失する。

「なー！」

それに驚くがロドの手は無意識に反応して《T-201》^{ニイマルイチ}は旋回する。

《T-40》^{ヨンマル}と《T-201》^{ニイマルイチ}は再び左右へと分かれることとなる。

『馬鹿！！ 後ろだ』

デオの叫び声が操縦席に響いた。

ロドの奇襲は失敗した。

突如として、”大筒”が夜闇へと消えたのだ。

いや、消えたのではない。

「雲？」

夜間なので見難いが突如発生した雲のような物が”大筒”を包み込んだのだ。

そうデオは判断する。

そして次の瞬間、雲から飛び出た”大筒”が旋回した《T-201》^{ニイマル}^{イチ}の後方に付けるの目視した。

「馬鹿！！ 後ろだ」

そう檄を飛ばす。

”大筒”が手に持った武器のような物から炎が沸き立つ。

（炎装からの火速か）

そうデオは攻撃手段を予測した。

だが、”大筒”はまだ遠い位置から武器を振りかぶると……炎刃を飛ばした。

さすがにこれは予測不能であった。いや、敵が2RB用という時点で射撃EOMエオムを用いない代わりになんらかしらの遠距離武器があることを予測するべきであった。

2RBの本質が敵の裏をかくということをして体では覚えていた。だが錆び付いた思考は咄嗟にその考えを表すことが出来なかった。

解き放たれた炎刃が《T-201》ニイマルイチを切りつける。

『うわああああ!!』
ニイマルイチ

《T-201》はグラグラと体を揺らされながらも、なんとかスカイレールの上を走る。《T-201》ニイマルイチは高度を落とす。

その瞬間、再び視界から”大筒”が消失する。

いや、消失する前にデオはその目で見た。

”大筒”の両肩から雲　排気ガスを撒き散らす光景を。

「煙幕か!!」

夜闇に紛れる黒煙……確かに効果的な戦術である。

（おいおい、アイツは本当に玩具か……）

煙幕を張るHSAおほやなど見たこと無い彼は、驚嘆する。

それでもデオは、《T-201》ニイマルイチのカバーへと向かう。

”大筒”は体制を崩した《T-201》ニイマルイチを不意打ちするはずだとそう判断したのだ。

僅かに目を見張れば黒煙がトグロを巻きながら下降している。

デオは《T-40》ヨンマルは予めほぼ直角な角度でスカイレールを引く。これを下ることで《T-40》ヨンマルは凄まじいスピードを得ることが出来る。これならば《T-201》ニイマルイチのカバーに向かうことが可能はずだ。

だが、その走法は危険を伴う。その走りはほぼ落下と呼ぶに等しい。

しかし、デオはその走法　　アングルダウンを身に着けた類まれな者だ。

《T-40》^{ヨンマル}が下る。風と空気の抵抗がコックピットをガクガクと揺らす。揺さぶられ吐き気を催すをほどだ。

ブレーキとスカイレールのカーブを利用して速度を落とす。

「カバーー!!」

そうデオが叫んだ瞬間だった。

黒煙の中から”大筒”^{ニイマルイチ}が《T-201》ではなく、《T-40》^{ヨンマル}

に襲い掛かったのは。

HSAとは思えない強靱な力で《T-40》^{ヨンマル}は”大筒”に体を掴まれ武器である刀を《T-40》^{ヨンマル}の首へと突きつける。

『デオさん!!』

ようやく体制を持ち直した《T-201》^{ニイマルイチ}がEOM発射の為の銃

口を”大筒”へと向ける。

「……待て」

それをデオは《T-40》^{ヨンマル}の片手を前に出し静止する。

「俺達の負けだ」

そう口を押し留める。

その瞬間、《T-40》^{ヨンマル}の拘束が緩んだ。デオの見立て通り”大筒”は両肩の煙突から煙を巻き上げると、一目散に逃げ出す。

『追いましょ』

「馬鹿、言っただろう。俺達の負けだ」

負けを認めたら、見逃す　それが飛走都市のライナーと軍人のいつからか出来たルールだ。

それにしても、とデオは過去を振り返る。

（昔は追いかけるほどが出来ないほどHSA^{ハイサ}を壊したりされたもんだが、とんだ甘ちゃんだな^{ハイサ}）

走り去った異型のHSA^{ハイサ}を思い出し苦笑する。

（この街も廃れたもんだと思ってたが。だが、あんなライナーがいるならSCっていうのも捨てたもんじゃねえかもしれねえな）

知る良しもないが、この二人が負けた原因があるとすれば、相手が一人であると誤解していたことだろう。確かに彼らが戦った相手は単機であった。しかし、”大筒”と呼ぶHSA^{ハイサ}は確かにチームで戦っていたのだ。旧式よりも更に旧式と呼ばれる黒き重身は飛走都市へと帰路に着いた。

試走（後書き）

こんばんは、呉璽立児です。

今回は2話連続投稿になりました。

さてとうとう、ディーゴも完成。スカイレールカップも目前となりました。

クリュウがSCでどのような飛走^{はし}りをするのか。是非楽しみた
だきたいと思っています。

それにしても、ウエマーがキャラ濃すぎますね。

ご意見感想お待ちしております。

前日

《ディーゴ》が工房のハンガーに帰還する。

「ふう」

クリュウはようやく息を抜く。

初めての自分の所有するHSAハイサでの飛走、2RBとは言えない空戦……手が震えた。借り物と自分の物とはこんなに違うのかと、体で実感した。

「ごしゅじんさま、あれでよかったの？」

クリュウに続くようにメーメが降りてくる。

メーメは先程の戦闘に不満があるようだった。

「倒せる機会はたくさんあったの」

確かに今回は積極的に攻撃を仕掛けることはなかった。だが、メーメの言葉が2RBでいう勝ちに当たる意味を指していないことは分かる。

メーメの目的はあくまで敵機を撃墜することにある。おそらく、《ディーゴ》やメーメはそういう目的のために作られたのだろう。それをクリュウは薄々とは察していた。

だがクリュウの目的はそうではない。

メーメとの意識の齟齬は徐々に埋めていかなくてはいけないことだと、改めて認識した。

《ディーゴ》に関しては、文句の言いようがない出来に仕上がっていた。デメリットをメリットへと生かす　クリュウの試みは成功した。

HSAハイサのEOMエオムは元々は余剰エネルギーを攻撃へと回すという試みから始まったものである。

そして、クリュウはE系が生まれた理論に目を付けたのである。

”電気に魔素が宿るのは、魔素が宿った燃料を燃やした場合のみである。”という定義である。だから、クリュウが考え、ウエマーに

提案したのは、魔素が宿ったエネルギーで生み出した他の物質にも魔素が宿るのではないかということであった。

S系はHSAハイサを動かすのに様々な過程を必要とする。魔炭石を燃やして発生した煙や水を加熱して発生した蒸気がこれに当たる。

これにより《ディーゴ》は煙術スモーク・スス・スチーム・スベルや蒸術といった多彩なEOMエオムを取得することに成功していた。

これは他のHSAハイサには無い長所といえる。火をエネルギーとしていれば、火術フレイム・スベルを当たり前前に使うという考えの裏をかくことが出来るのである。

《ディーゴ》は、当に2RBをする為のHSAハイサとして生まれ変わった。

SC開催は目前である。

「さて、準備はいいか？」

アドウが用意したHSAトレラーに《ディーゴ》を積み込む。

SC前日、ライナー達はHSAハイサを会場へと運び込む。HSAハイサの規

定、即ち違法性が無いかを確かめる為に機体検査を行うのだ。

この日ばかりはアドウも協力を聞き届けてくれた。

「まあ、ここまで来たら気張れや」

「当然、勝ちを狙いに行くぜ」

はあ、とアドウはやれやれとため息を付く。

「ヒヒッ当然だろ、こんなに面白いHSAハイサは他に無いさヒヒッ」

アドウがウエマーを引っ張る。

「おい、テメエの積んだEOMエオムは軍の研究所にいた頃開発したものじゃねえか！？」

「ヒヒッ！　そこまで突き止めたのかっ！！　さすがだなアドウ」

「御託はいい。資料は読んだぞ。ありゃあ、とんでもねえものじゃねえか。2度に渡る起動試験の失敗……手足が欠けた奴までいるっ

て言うじゃねえか」

アドウは怒りを露にする。それほど危険なEOMエオムを積んだHSAハイサにクリュウを乗せる訳には行かない。ウエマーの答え次第では、アドウは今すぐに《ディーゴ》を破壊する腹でいた。

「……」

「おい、どうなんだよ」

アドウはウエマーを問い詰める。

「ヒビ、確かにあのEOMエオムは、僕がアソコで開発したものさ」

「デメエ……」

「まあ、待ちたまえよヒビ。確かに当時は制御が完璧ではなかった。だが、今は違うのさヒビ」

「アイツの乗るHSAハイサは最新型どころか生きた化石じゃねえか」

「ヒビヒ確かにね、まったくあんなのを直そうと思うなんて、頭のネジが馬鹿になってるじゃないか？ 君の虎の子はヒビヒ」

クリュウもまさかウエマーに言われるとは思ってもいないだろう。「僕はああいうもの狂いが好きなのさヒビ。当然、死んで欲しくないから最善を尽くしたさヒビ」

ウエマーは安全だと言う。

「それにしても当時の僕はどうして、気がつかなかったのかなヒビ。十分過ぎるほど装甲と巨大な動力炉ソレをもつてすればあのEOMエオムが稼動することに……いやその条件を満たすHSAハイサがまさかS系だとは夢にも思わなかったよヒビ……」

ウエマーは二度に渡る事故で研究所を追い出されたことを思い出し苦笑する。

「信じて良いんだな」

アドウは念を押す。ウエマーがこんな所で戯言を言う者では無いのは知っているがそれでも不安要素は残る。

「ヒビ、彼を信じなよ。彼の实力は本物さ………そうじよ、そこらの巧手とは訳が違うのは君自身が知っているだろう。ヒビ」

「……」

「それに彼の味方は、本当に最高の旧式さ」

ウエマーがクリュウのOSに視線をやる。

「まったく、過去の遺物にあんなものが存在するなんてどうかしてるよ……ヒヒ」

正体不明、いったいどんな性格破綻者が作ったのか分からない。

到底、今の技術では再現のしようもない、未知の技術で作られたメーメ、彼女はクリュウを導くのであろうか？

そんな会話をアドウとウエマーはしたがクリュウの耳には届かない。

「それにしても、今更S系HSAなんて機険出来る奴っているのかいヒヒ」

クリュウの行く道は前途多難である。

HSAは様々な社会に浸透している。《デイーゴ》を運んでいるトレーラーだけで無く人が移動に用いるHSAも全てHSAである。飛走都市スカイレイルは、今かつて無いほど賑わっていた。一種のお祭りムードが街を支配している。

アイザが唐突に開催を宣言したSCは、WCCとあえて競合させることによりファンを二分した。アイザの目論見は成功した。WCという、ほぼ一つの企業が支配する王様候補を御輿に担ぎ上げる大会より、SCという何が起こるか分からない2RBの方にファン達は魅了された。

WCCが行われる帝都から遠い、飛走都市に観客が集まった。

今回はアイザが突発的に開催したものであるが、これが定例化した暁には今は奪われているHSAの聖地の座もいずれは取り戻せるかもしれない。

飛走都市の住人は沸き立っていた。

そんな中、中小企業の期待を背負う期待の星が飛走都市公営スタジアムに到着する。幾つも存在する、飛走都市の中でも最大の物……そして、クリュウとアイザが試走したのもここである。

アドウのトレーラーが停止すると、クリュウは《ディーゴ》に被されたブルーシートの隙間から顔を出す。

そこには既に先客とも言えるトレーラーが幾つか既に止まっている。そのトレーラーの貨車には例外なく見えないようにシートが被されている。HSAの戦いは情報戦ともいえる。こちらがうまく戦うには相手を知っているのが一番である。

先に並んだ物から順に機陰……機体検査が始まる。

ここでは搭載されてるエネルギー等ルールに違反していないかが嚴重に検査される。

そして、クリュウの番が回ってくる。トレーラーが会場内へと歩み始める。

SCの参加条件は事前に登録をし参加許可を貰っていることである。だから、参加ライナーは係員に自分の所属ランクと名前を当然言う。

ただ例外があるとしたら、クリュウ本人が到着した場合だろう。そうクリュウには特権に近い参加資格が与えられているのだから。

「名前と所属ランクをお申しつけ下さい」

受付嬢が問う。

「クリュウ・イワザキ。ランクは……Cです」

2RBでは免許を持って、特に功績を上げた者でなければ初戦ではCランクに所属しているとされる。

「あと……これ……」

いつだしたらいいかと思っていた、アイザからのラブレターを提出する。

「これは？」

受付嬢は困惑しながらもそれを受け取る。

招待状を開いたとたん受付嬢の顔が驚嘆する。

アイザの招待状の送り主はマスコミがいろいろ推測をした。白羽の矢が立ったのはギドレーという予測がほとんどであった。アイザがクロバ工業を好いていないからこそその挑発ではないか、と各社が

取り上げたことから招待状の持ち主はSCに現れないと誰もが思い込んでいた。

それはクリウの目の前の彼女も例外ではなく。まさか、受取手がまさか冴えない無名の新人だとは、驚愕の事実であった。それどころか招待状が本物かどうか疑ってしまうほどに。

だが、彼女も受付嬢……ポーカーフェイスを決して崩さない。

まずは、虚偽を確かめる必要がある。だが、万が一本物であった場合こちらに非が無いように時間稼ぎが必要だ。

「では、新規ライナーの方にはこちらの書類をご記入下さい。その後HSAの機体検査に移らせていただきます」
ハイス

クリウは極めて純粋な人間だ。まさか受付嬢が自分を疑っているとは露知れず、喜んで書類に記入を始める。

その間に受付嬢は、アイザの関係者に招待状が本物か確認するよう
に手配した。

アイザは落ち着かなそうに、スタジアムの貴賓室をウロウロしている。

彼女は意中の相手を待っていた。

飛走都市スカイレイルに着いたのは二日ほど前であったのにアイザは待ち人が気持ちを受け止めてくれたのか確認できずに、モヤモヤとした気持ちを引きずっていた。そして今日、とうとうSC前日を向かえてしまった。

静かに、丁寧にドアを叩く音がする。

「ゴンド？」

『はい。お嬢様』

「入っていいわ」

ドアの向こうにいたのは、アイザの執事ゴンドだ。

「どうしたの？ 確か設営を手伝っていたはずでしょ？」

「実は、係員方からこちらを預かりまして」

ゴンドの手から一枚の手紙を預かる。

「これは」

見覚えがある、とある一名に送ったラブレター。

それが来たということは……。

「ああ……来たのねクリユウ……」

アイザは熱いため息を漏らす。

「それが、お嬢様問題点が一つあるのですが」

「ああ、貴方はどんなHSAハイサに乗っているの。私の誘いを断ったのだから、きつととてつもないものに乗ってるのよね。ああ、知りたい、でも知りたくないわ」

アイザはコツコツと革靴靴を鳴らしながら近づいてきたゴンドに気がつかない。そして、ゴンドは手に持ったメモするノートを降りかぶる。

このノートはゴンドが立つたままでも使えるよう黒く加工された板が付いている。当然それを頭に降り下せば。

「聞けよ。HSA馬鹿ハイサ」

「私は正気に戻った」

アイザは頭をさすりながら、涙目でゴンドを睨みつける。

ゴンドは暴走しがちなアイザを唯一律することが出来る人物だ。

アイザとゴンドは主人と従者という間柄とはいえ兄妹のように育ってきた。アイザがゴンドを兄のように慕っていた時期もあった。

「いいですか！ このままじゃ、意中の彼は大会に出られないのですよ」

「嘘！ どうして？」

「それは彼のHSAハイサを機検出来る者がいないからです」

アイザは疑問を感じる。私設大会とはいえ、整備士の費用を抑えたつもりはない、最高のスタッフを用意しているはずだ。

「彼……クリユウ氏が言うには」

「ダメ……！ 言わないで……！」

アイザは口止めする。

アイザは、SCを開催するにいろいろな建前を言った。だが、建前に隠れた本音がある。アイザの戦いの裏をかけるライナーと戦いたい、それがアイザの欲望だ。

「かといって、どうしたらいいかしら」

アイザは小首を傾げる。

ただのHSAに詳しい者では駄目だ、もっと詳しい者を呼ばないと。

一番最初に思い浮かんだのが、アドウ・オークスだった。だが彼は駄目だ。彼自体は公私を分ける信用が置ける人間だが、周りの人間はそうは思わないだろう。

「そうだ！！ ママがいたわ」

彼女が言うのは母親のことではない。アイザは貴族故に母親のこととは「お母様」と呼ぶ。

「あの方ですか……確かに今この街にいるらしいですけど」

「それなら膳は急げよ。早く連れてきなさい」

「かしこまりました」

ゴンドは貴賓室を後にする。

少々お待ち下さい

そう受付嬢に言われてから、大分待った気がする。一向に《ディーゴ》の機体検査が始まらない。

「やっぱりか」

煙草を銜えたアドウがそう言う。

「何不思議そうな顔をしてやがる。おめえがS系なんつつ変な物持ち出すから弄れる整備士がいねえんだろうが」

このまま機体検査を受けられずに大会に出られない、そう言われた瞬間クリュウは激しく落ち込むだろう。

「ハァーイ」

突如、そんな空気を断ち切るように気味の悪い声が聞こえた。

「こ、校長!？」

オカ……もとい、アカデミーの校長が現れたのだ。

「ドレス20着でアナタのHSAの機陰^{ハイサ}をしてあげに着たわヨ」

そういつてボウホは肉ダルマの体をクネクネとさせる。

正直言つて、

(気持ち悪い)

口に出していうと、鬼教官が降臨しそうなので決して口にはしない。

「ワタシに任せておきなさい……隅から隅までこのワタシがみ・て・あ・げ・る」

クリユウの後ろでメーメが震えだす。

ボウホは人外のメーメすら怖がらせる破壊力を持っていた。

「ごしゅじんさま……《ディーゴ》が……《ディーゴ》が汚されちやうの」

「が、我慢しろ背に腹は変えられない」

ドナドナとトレーラーで引つ張られていく《ディーゴ》を見送りながらクリユウは苦虫を噛んだ。

遠くから声が聞こえる。

『アラ？ パーツが一個足りないワ』

遠くからボウホがモデル歩きで……だが、漂ってくる気配は殺し屋の気迫で戻ってくる。

足りないパーツと聞いてクリユウは後ろを向く。

「っー!」

ピキリとメーメが凍る。

逃げ出そうとするメーメの腕をクリユウはがっしりと掴む。

「放すの、放すのよ、ごしゅじんさま。メーメはただの人間なのよ」

「グットラック」

そう言つてクリユウは、ボウホに生け贄を捧げる。

「アラ、こんなカワイイ娘がOSなの？」

そう言つてボウホはメーメを抱きかかえる。

「向こうで一緒にヌギヌギしましょうネ」

ボウホはメーメに頼ずりをしながら、再びモデル歩きで去っていく。

「いやぁあああ!!」

そう真剣に叫ぶメーメをクリユウは見送った。

戻ってきたメーメは、角でブツブツと一人言を呟きながらどこか遠くを見つめていたと言う。

そして日を跨いで、

スカイレールカップ 当日がやってきた。

音火花がパンパンと空を鳴らす。

快晴の青空が眩しい。

「さぁ、とうとうこの日がやってきたぞ!! スカイレールカップの開催だ!!」

テンションの高いMCが飛走都市中に聞こえる程の大音量でアナウンスをする。

SCはWCCと平行して行われる。そして、最終日のエキシビジョンはWCCの決勝戦と同じ日程で行われることになっている。

今日は開会式の後、トーナメント表が発表され、その後すぐに一回戦へと移る。

「さぁ、己が洗練されたHSAで、勝て! 飛走れ!!」

クリユウは気持ちが高揚して落ち着かない。

「そして、エキシビジョン。女王・アイザ・ヨーと戦うのは一体誰なのかあ!!」

こうして、スカイレールカップは開催を告げた。

前日（後書き）

こんばんわ、呉璽立児です。

ネットがtmt……正直アップできないかもとあせりましたが無事投稿できました。

とうとう、次回からスカイレールパッチが開催されます。ご期待下さい。

感想ご意見等を絶賛募集中で、是非気がついたことなどは是非お知らせ下さい。

スタート

『ライナー達よ、己がマシン、己が技術で勝利を掴みなさい!!』
貴賓席からのアイザによる一声で、スカイレールカップは幕を開けた。

開会式には、出場する8機の^{ハイサ}HSAが全て並んだ。
SCはこの8機によるトーナメント方式で行われることになる。
そして、このトーナメントの勝者がエキシビジョンへと進むことが出来る。

この並んだ状態はパドックという。2RBはただのスポーツではなく賭博でもある。観客はここに並んだ^{ハイサ}HSAを見て一試合ごとの勝者、大会の勝者を選択する。目が利く者であれば見た目だけでその戦い方を看破するであろう。

その中でも一際目を引く^{ハイサ}HSAがある。

漆黒の塗装を施し、胴体到大砲のようなシルエットを持つ重量感がある^{ハイサ}HSA クリュウが駆る『ディーゴ』である。

歩きたびに地響きがしそうな見た目、風を切る流線型とは程遠いフォルムを見た観客の一人は、

「ありゃあ、見るからにハズレだな」と漏らした。

ライナーの情報を見れば、

まったくの無名の新人である。

「誰がアイツに賭けるんだ。ププ」

クリュウたちは観客の冷笑を誘っていた。

「……」

「……」

「デオさん？」

「なんだあ……」

デオとロドは本日非番であり、他にも休みの守備隊仲間と共に観戦に来ていた。

「あれ……」大筒”ですよね？」

暗闇ではつきりと見えなかったとはいえ、あのシルエット、モノライトは見間違えるはずも無い。

「間違いねえな！」

デオが啜えていた煙草がひしゃげる。

「おい、デオ。オメエはどいつに賭けるんだ？」

デオの同期の一人が肩を叩く。

デオとロドの前には新聞が開かれる。

順当に行けば、開催試合毎に付けられる番号で言うと、3番のライナー・ワミが駆る《テンウィン》か8番であるヴァインという名の賞金稼ぎが乗る《オーツク》が本命である。

ワミは、典型的な優等生的2RBテクニクで徐々に功績を上げて来たBランクライナーだ。SC出場ライナーの中では最もランクが高い。

それに対して賞金稼ぎのヴァインは、悪名が高い。資料上の戦跡はそれほどでもないが、野良試合を加えれば、勝率は計り知れない。「それにしても、あの4番は駄目だな。あんなのに賭けるのはよっぽどの物好きくらいだろうぜ」

その一言で爆笑が巻き起こる。

「アイツに負けるHSA乗りがいたら、そいつはHSAから降りたほうがいいぜ。クックク」

「ああ、俺はアイツが勝ったら、魔油液をジョッキで飲み干してやつてもいいぜえ。おい、誰か賭けるよ」

……

……

「言っただけ……」

デオが新聞を握りつぶす。

その気迫は、近年誰も見たことのない物だった。

「来い！！」

「ちょ……デオさん！？」

デオはロドの首根っこを捕まえて、窓口まで連行する。

「4番に全財産！！！」

ドン！と卓上に札束を叩き出すデオ。

「な、なんで僕まで」

泣きながら、大金を無理やり出されるロド。

その二人の蛮勇行為を端から見た物は、「正気じゃない」「おい、馬鹿だ、馬鹿がいるぞ」「背中が煤けて見えるぜ」とか揶揄された。

「ヒヒ、随分な言われようだね」

「当たり前だろ」

ウエマーとアドウは話す。

「その割には、随分と払ったじゃないかヒヒ」

「はん……あれは香典みてえなもんだ」

アドウは顔を背けながら半券で顔を仰ぐ。

「悪いなあ、クリユウ。俺様は金が欲しいんだ」

タヌキは一人本命に賭けた半券を見てそう呟きほくそ笑む。

「お母さん、アイツの試合まだ？」

サリナは自宅でテレビの前にいるルリに尋ねる。

「まだよー。くーちゃんの2RBは二回戦よ。まだ始まってもないわよ」

サリナは先程から落ち着かなそうにテレビの前を行ったり来たりしている。

「そんなに応援したいなら、会場に行けばいいじゃない」
「ぶっ！ 別にそんなこと無いわよ！！」

サリナは一目散にいなくなる。

ルリはまたすぐに来るだろうとテレビに視線を戻した。

そしていよいよ、一回戦が始まる。

『ゴオオオ！！ シフトカラーズ！！』

MCのアナウンスと観客の歓声と共に2RBが始まる。

そして一回戦が始まる。

戦いは1番と2番の2RBだ。
ホワイトバーガー

速度重視の《ホワイトバード》がスタート直後、前に行く。

二機のHSAは既に海上へと飛走り去っていった。
ハイス

観客は戦いが映される大画面に釘付けとなる。

その中クリュウは、大画面ではなく二機が描くスカイレールを見つめる。スカイレールの軌跡はHSAの戦いの軌跡そのものである。
ハイス

「それにしても、無意味な改造してるなあ」

クリュウの横にいる、青年がそう分析する。

「無意味って？」

クリュウがそういうとその青年がこちらを向く。

「見てみなよ、あの1番」

クリュウが拡大された大画面を見る。

高速で飛走する《ホワイトバード》が一瞬宙に浮いた。

「機体が軽すぎるんだよ。あんなHSAじゃ、小突かれた瞬間に落ちるのが山だね」
ハイス

「そんなものか？」

HSAのセッティングは自分が望んだ最高の2RBを行うためにギリギリの改造を施すものだ、とクリュウは思う。

「ギリギリの改造なんて今更流行りもしないよ。HSAの改造は緻密なバランス設定をして、妥協しながら行う物さ。ほら見なよ、ち
ハイス

よつと接触しただけで……」

《ホワイトバード》がグラリと浮き上がる。

だが、なんとか姿勢を持ち直す。

「テクニクは確かにあるね。あれなら、無改造機に乗っても2番には勝てるんじゃないか？」

試合は危なげない場面が多いが《ホワイトバード》が優勢だ。

「第一、EOM^{エオム}無しであそこまでスピードを出す必要があるなんて僕にはとても思えないね」

青年はそれに、「まあ」と補足する。

「重過ぎるよりは、軽すぎるほうがマシだろうけど」
用は皮肉だった。

これには、いくら鈍い、鈍いと言われているが、HSA^{ハイサ}がらみと
いうこともあり、クリュウも気がつく。

カチンと来た。

だが、戦意丸出しなのはクリュウだけだ。青年はその気迫をさらに受け流す。

喧嘩は空でやればいい。クリュウは《ディーゴ》に残したメーメの様子を見に戻る。

「まったく、次の相手の試合を見ようとしてもしないと……これだから、新米ライナーは……」

まあ、初戦が勝てる相手に良かったと、青年・ワミは安堵する。

クリュウにとっては次の相手も大事だが、《ディーゴ》のことも気に掛かる。熱くなりかけた気持ちを落ち着けながら、メーメの元へと向かう。

「どうだ、調子は？」

そうクリュウが問うとコックピットの下からメーメが煤けた顔を出す。

《ディーゴ》は他のHSA^{ハイサ}とは違い、走る前にエンジンをかけるのではなく常に炉に火を灯しておかなくてはならない。

「素材が悪いのよ。煙ばかり出るのよ」

「それならそれでいいんだ」

クリユウはタクティクスを練る。戦況は合わせる物じゃない、自分で作る物だ。クリユウはそう思っている。

《ディーゴ》は確かにじゃじゃ馬だ。だが、そのコンディションによつて戦い方は如何様にも存在する。乗りこなせる程の腕と、それを管理するOSがそろつていれば、《ディーゴ》は勝てるはずだ。ようは自分次第だ。クリユウは自分自身に渴を入れた。

『Winner!! ホワイトバアアアアド!!』

MCが盛大に勝者を伝える。

勝利の余韻も引かぬ間に第二回戦のアナウンスへと移る。

『2回戦は、Bランクライナー・ワミの《テンウィン》^{バーサス}V S無名の新人Cランク・クリユウが乗る《ディーゴ》の2RBだああ!!』

大画面では機体の外にいるワミがアピールをしていて、そのまま《テンウィン》に乗り込む光景までが映される。

会場に大歓声が沸く。

続いて《ディーゴ》が映ると、ブーイングとまでは行かないがパラパラとしたお世辞程度の拍手しか沸いてこない。

『では現在手元に入っている、各機のプロフィールだ!』

《テンウィン》はクロバ工業の《283系》をデフォルトに、フ
アクトリー・ニッスイのペンデュラム機構を搭載、EOM^{エオム}はあの有
名EOM開発会社OUNYが作成している。更に、整備とメンテナ
ンスは、これまた有名なピア^ハが行っている。2RBだけでなくH
SA^{イサ}も隙がないぞ、ワミ!!』

MCは名だたる大企業の名を連ねる。

『それに対して、《ディーゴ》………な、ななななあんとお!
! 整備、メンテは、あのオークス工房だ!!』

オークス工房といえば、小さいな工房とはいえ人の記憶に名を残

した幾つものHSAがある。近年ではやはり、アイザのHSA達であらう。

会場にどよめきが起こる。

『続いて基礎HSA……じゃなくて、修理？ 復元？ 珍しい項目だがこれには……とりあえずものすごい人数の名が書かれているぞ！』

MCは割愛する。

これには、

「馬鹿野郎！！ 名前を呼びやがれ！」

「ふざけんじゃねえ」

と、いった数人による野次が飛んだ。

『そして、EOMは……おいおいこれは本当なのか？ MADなことでは有名なMr・ウエマーの名が書かれているぞ！』

「おい、馬鹿にされてるぞ」

「ヒヒ、褒め言葉だね」

ウエマーはほくそ笑む。

『ともかく、どうやら飛走都市の中小企業を送り出したHSAのようだ。元となったHSAの記述もなく、不気味だぞ《ディーゴ》！』

「それにしても何なのかしらあれ？」

アイザ自身、パドックに並んだ《ディーゴ》を見た瞬間鳩が豆鉄砲を喰らったような顔になった。それに乗っているのが他の誰でもないクリュウらしい。

「まったく、一体何処まであたしの裏をかけば気が済むのかしら、アイツ……」

ふう、とため息を零すものの表情は緩んだままだ。

「さあ、飛走^{はし}つて来なさい。あたしのいるココまで」

一体クリュウはどんな走りをしてくれるのだろうか。

そんな外の様子を聞くでもなく、《ディーゴ》の中のクリュウと
メーメは調整に任せてこ舞いであった。

「ごしゅじんさまぁ……もう限界なのよ」

「もう少しだ、我慢しろ」

クリュウは命令する。

「もう駄目……出ちゃう、出ちゃうの」

「もう少し、もう少しだから」

ここは何とか我慢してもらわなくてはいけない。

「あああん、爆発、爆発するのぉ」

メーメが弱気な声を出す。

「さぁ、準備はいいか？ 2機ともスタート地点に付いてくれ」

MCの声を合図に、《ディーゴ》と《テンウィン》はスタート地

点へと向かう。

『さぁ、2回戦の始まりだ。 3番VS 4番……』

歓声が徐々に収まり静寂が訪れる。

『ゴー！！ シフトカラーズ！！』

「シフトカラーズ！！」 / 『ゴー！ シフトカラーズ！！』

クリュウ初めての2RBが今ここに始まった。

スタート（後書き）

こんばんわ。 呉璽立見です。

飛走^{はし}ろうと思っていたのに、飛走^{はし}らずに終わってしまった。
是非次回にご期待下さい。

黒き重身

2RBの開始の合図「シフトカラーズ」の声と共に2機のHSA^{ハイサ}は動き出す。

《テンウィン》は緩やかに、しなやかに車輪を回転させる。

対して《ディーゴ》は様々な金属部品の軋み、そして蒸気を巻き上げて車輪を動かす。

当然先に一步前に出たのは《テンウィン》だ。

『今だ。やれ!』

そう通信越しに対戦相手がそう声を上げる。

ワミは相互常に会話が筒抜けと言う状態がいつも気に入らない。
EOM^{エオム}を発動させるには、スペルとして言葉を唱えなくてはいけない。これではこちらが何をするか相手に筒抜けではないか、と感じている。

(まったく、相手に準備させてしまっじゃないか)

いつもそう考える。

2RBにおいて、何故相互共に通信回線を開いておくというルールがある。

簡単に言ってしまうえば、無言での戦いは、“試合”ではなく“戦闘”だというのがルールが出来た理由である。

例えば、二人の人間が殴りあっていたとしよう。

『うらああああ!』

『うおおおお!』

そう二人が叫び声を上げるだけで、リングに上がって戦っているように見える。力が均衡していれば観客から声援が送られるだろう。もしこれが、無言で行われていたとしたら、

『……………』

『……………』

お互いはただ黙々と殴り続ける。確かにこれでは心が躍る”試合ではなく、殺意が渦巻く”死合”としか映らないだろう。

それはそうだと言われてもワミは氣に入らない。論理的に考えて戦いで何故声を上げる必要があるのかと。

クリユウの一声と共に、空が色を変えた。ソフトカラーズ その色は曇天 黒くその色は広がり続ける。

『おおおとおおお!! これはどうしたことだ、《デューゴ》! ! これは事故かあ! ?』

《デューゴ》より前にいたワミには一体何が起こったのかが分からない。

ただ、あの煙に飲み込まれてしまっでは、視界を失うことになる。幸い黒煙が空を侵食する速度は速くはない。

ただ問題は、爆心地の敵機がどうなったかだ。

ワミは《テンウイン》を停止させて様子を見る。

状況が分からない状態で無意味にHSAを飛走ハイスらせることは燃料を無駄に消費してしまうだけである。

(ホントに事故だとしたら、あつけない)
だが彼はすぐに驚くことになる。

『あ、あれはなんだああああ!!』

MCの声が響いた。

「ゲホ、ゲッホ!!」

スタジアム内の誰もが咳き込む。

発生した黒煙が観客席へとなだれ込んでいる所為だ。

「なんだこりゃあ……ゲホッ」

アドウは咳こむ。

『ヒヒ、しよっぱなから飛ばすねえ』

咳とは無縁のくぐもった声が響く。

その声の持ち主はウエマーだ。

「て、テメエなんでそんなもん持ってやがるんだ」

ウエマーはガスマスクのようなものを顔に着けていた。息をすることにより「コーホー」と音がする。

「ヒビ、そりゃあこうなることが分かっていたからね。なにせアレを作ったのは……この僕だからねヒビヒ」

「ゲホゲホ、なんてはた迷惑なHSAなんだ!!」

公害をまき散らす HSA ハイサ に、アドウが怒鳴る。

「あ、あれはなんだあああ!!」

その時見晴らしのいい密閉された解説室にいるMCの声が観客の注意をさらう。

黒煙が空気に紛れて薄くなると、空に一筋の光が浮かび上がってくる。

それは空に渦巻き、上へと伸びている。

そして煙の晴れた空で、蒸気が入道雲のように巻き上がる。

『クッ』

《テンウィン》は焦ったように動き出す。

《ディーゴ》は黒煙の中を潜り抜け《テンウィン》の上にいたのだ。

ライナーにとって何の駆け引きも無く上位を取られたとすればそれは不意打ちに等しい。

「成功なの、ごしゅじんさま」

「ああ!!」

クリユウの作戦はこうだった。

まずはEOM ”煙散 カーボンスモーク” で敵の視界を奪う。

これにより、ピストンとクランクを使って車輪を動かすという手順を踏む分、走り出しが遅く、攻撃の的になってしまう危険がある。

それを《デューゴ》は、スタート不安がある序盤を煙幕という手段で被弾無しで、やり過ごす更にスパイラルアップによって長距離を走ることによって加速時間を稼ぎだした。

そして今が《テンウィン》^{デューゴ}の上にいるという状況を作り出したのだった。

（悔っていた……）

ワミは、この状況を前にして後悔する。

ワミが、アイザの会見前に既にこの大会に参加を表していたのは様々な情報収集の結果からであった。当然、勝ち残ればあのアイザと戦うことが出来るかもしれない、もし叶わなくともアイザが主催した大会で勝ち残れば名声を得ることが可能であると踏んでのことだ。

^{ハイサ} H S A 自体も、アイザと善戦出来るように仕上げて望んだ。だが、たった一つ、ただの新米ライナーを舐めて掛かった結果がコレだ。

スタート直後に上を獲られるという失態を犯し、観客の関心は全て《デューゴ》へと持っていかれた。

（だが、そう簡単にいくものか）

敵機は明らかに未知の存在だ。戦績があるならそこから分析し予めタクティクスを組み立てることも可能だろうが……目の前の敵にはそれが通用しない。彼の戦跡はこれから付いていくものだ。言うならば、新雪が降り積もった雪原である。

ワミには分の悪い相手であった。

《デューゴ》は当然、下へとスカイレールを引く。そして、《デューゴ》は下降を始める。

ただでさえ重量のある《デューゴ》は慣性を味方につける。

（さあ、奴はどんなタイプなんだ？）

剣を抜いて火速を行うならファイターかもしれない。だが例外もある。逃げに徹し、相手の隙を物理攻撃でしとめる。そういった、アウトローなファイターだっている。

大まかにファイター、ディフェンダー、ソーサラーと分類できると言っても、戦い方はライナーそれぞれである。それでもあえて分けるとしたら、攻撃、防御、EOMエオム この三つの内、何にHSAハイス性能の比重を置いているかだろう。

等の《ディーゴ》自体何に分類されるかと聞かれたらクリュウ自身も悩んでしまう。

2RBの戦闘スタイルから言えば、ファイター。だがその身を包む装甲を考えればディフェンダーに見えるだろう。

（だが、あえて言うなら……ソーサラーかなあ）

《ディーゴ》がグングンとスピードを上げる。これは、動力だけで動いているのではない。下るスピードも加わっている。

クリュウはブレーキをうまく使い、スピードが出過ぎないように気をつける。狙いを付けられないのでは意味がない。

（さあどう出る？）

クリュウは相手の出方を伺う。

「そう簡単にやらせるものか!!」

ワミはこれでもいくつもの戦いを切り抜けている。

長期戦を見越しているのか相手はEOMエオムを使う気は無いように見える。

（だが、それは正しい）

すでに相手は一度EOMエオムを使用している。現在、《テンウィン》が優位に立っているのはその点だけである。

《テンウィン》は逃げるのではなく、上へと登る。

こちらのHSAハイスは、盾こそ装備していないが相手の攻撃を防ぎながら攻勢に移るタイミングを計るディフェンダーである。

《ディーゴ》がこちらへと滑走してくる。重身がこちらへとすり落ちてくるような勢いは見ていて恐怖心を抱く。

《ディーゴ》が腰から刀を抜くのとほぼ同時……《テンウィン》も片手剣を抜く。

（相手の攻撃を受け流す……）

振り下ろしてくる角度を見極めて……剣激を繰り出す。

空中で金属同士がぶつかり合う……火花が散る。

お互いのHSAが上へ、下へと……交差する。

どうやら《ディーゴ》は罅迫り合いを望まなかったようだ。《ディーゴ》が持つのは細身の剣である。あの速度でぶつかれば折れる可能性もあったのだろう。

（だが、好機だ）

こちらとしてもEOMエオムを使わずして攻勢を入れ替えることが出来たのは、実に好都合であった。

「初手で意表をつけても、所詮は新米ライナーってことでいいのかな？」

「それはどうかな？」

2RBは長く見えるようで一瞬の戦いである。そこにおいては、得た好機で相手を仕留めなければ、あっという間に負けてしまう。

「こ、これはああああ……！」

MCが再び叫び声を上げた。

「デオさん！ 見ました？ アングルダウンですよ」

「ああ」

《ディーゴ》が見せた……いや、魅せた飛走はデオの得意技の一つアングルダウンだった。

ほぼ直角に下る、危険な走法である。その分速度を生み出す事が

出来る。

その後、《ディーゴ》はグルグルと螺旋状に……しかもスパイラルアップでもダウンでもない。

「スパイラルフランクとでも言うのかアレ？」

「さあ？ それでもあんな走りで、良く落ちませんね」

『魅せる、魅せてくれるぞ《ディーゴ》！！』

「な、なんだアレは」

ワミは驚愕せざる終えない。

直角に落ちてからの螺旋状に横に飛走^{はし}……無駄な飛走。どう見ても、スパゲティタクティクスとしか思えない。

「君は、曲芸士か何か？」

ワミは勝利を確信する。こんなに無駄に飛走^{はし}る相手にどう自分が負けるというのか、まったく検討が付かない。魅せることは重要なかもしれない。相手がもし”勝つ”つもりであるというのならば最初の煙幕からのスパイラルアップで十分にインパクトがあった。確かに、新米ライナーとして重要なのは”勝ち”では無く”印象”なのかも知れない。注目のある大会でこれほどのインパクトがあればライナーとしても先程の口でも言った曲芸士にでもなれるだろう。

（早々に決める）

こんな相手に一撃でも貰えば、後の試合に響く。ならば、次の一撃で決めてしまおう、ワミはそう考えた。

だが、

（場所が悪いな）

と、ワミはターンする。これならば相手が見れるようになると思った。……だが、

「ッチ」

背後を見れば同じ軌道で《ディーゴ》が舵を切っている。

HSAは背後への攻撃手段が乏しい。いや、持っていたとしても

相手に当てることが難しいのだ。

（ドッグファイトのつもりか！？）

背後から獵犬のように獲物を追い詰める　ドッグファイト、そのものだ。

この状況を崩そうともう一度、Uターンをする。

やはり《ディーゴ》は背後にいるままだ。

「ピエロはピエロらしく、さっさと落ちろ――！」

ワミはイラつく。

（勝ちを狙いに来るでも無いくせに）

だが、試合を作っているのは《ディーゴ》の方だ。それがまたもどかしい。

いくら引き離そうとトリッキーな動きをしても《ディーゴ》は尻に付けたままだ。

そして、互いの高度の差も変わらない。

勝つ為に相手の後ろを付回す戦法が無いという訳ではない。だとしたら、互いの高度の差が変わらないのはおかしい。

相手の後ろを付回すという戦法が有効な手段となるのは、徐所に高度を詰めるという意思があつてこそだ。もちろんその場合、後ろのHSAの方に負担が掛かってくるので優位はワミに来る。

だが、お互いの高度が変わらなくなると、負担がなくアドバンテージは無くなる。つまり、硬直状態が続く。

ただひたすらと、自分の後を付回す《ディーゴ》がじれったくありそれであり不気味だ。

「そろそろか？」

《ディーゴ》の操縦席でクリュウはほくそ笑む。

ワミの読みとはまったく違い、もちろんクリュウは勝ちを狙っている。

《ディーゴ》の性能は基本的にどんなHSAハイサにも劣っている。重

量は重たいくせに最高速度も加速も悪い、更に無駄が多い。これは現代のHSAハイサから見れば、絶望的な欠点とも言える。

逆に優れている点があると言えば、S系HSAハイサ特有のトルク性能である。スカイレールを登ったり、敵機との錨迫り合いの時に押し勝てる性能とも言える。

だが、ことこの場面においてクリュウは徐々に登るという選択をしなかった。

（攻勢に移られたら困る）

それがクリュウの考えていたことである。

相手にHSAハイサの性能を生かした戦いをさせない。これがクリュウの戦術である。

最初の煙幕のEOMエオムも、スパイラルアップ、アングルダウンといった飛走術マニョーバも、その為に行ったのである。

（《ディーゴ》の上に居座ったことを後悔させよう）

4度目の旋回を行った《テンウィン》に対してクリュウは攻勢に移ることを決意する。

4度目の旋回……これにより《テンウィン》は一度飛走した場所をもう一度通る。

（今だ！！）

《ディーゴ》はスカイレールを上を引く。

『な！？』

そう驚きの声が響いた。

デメリットをメリットとして戦うそれが性能的に劣るHSAハイサで勝つ為の一本道だ。

「なんだこれは！？」

ワミは驚嘆の声を上げる。

何度目かの旋回を行ったか……分からないが、その時の視界テンウィンは再び黒い煙に包まれたのであった。

「まさか、奴めまたあのEOMを……」

いや、だがそんな前動作はなかった。現に、《ディーゴ》からはEOMを使った反応は無かった。

（ただ、両肩の排気口から煙を常に吐き出していた。ツクー！）

《ディーゴ》の狙いがようやく分かる。あれはただ悪戯に走っていたのではなく、この瞬間を狙っていたのだ。

（あの煙突は、ただ燃費が悪く廃煙を垂れ流しているのではなく……こういった戦いをする為だったのか）

これは深読みだった。当然、S系というHSAを知らない世代から見れば、あれほどの煙を撒き散らすのならば、飛走距離は長くないだろう、そう見当を付けてしまうのも無理はない。

実際はS系というHSAを使う以上、大量の黒煙が発生するのはしかたがないことなのだ。

ワミは敵が考える次の一手を読む。

（当然、上に登ってくるだろう）

ならば、こちらも死力を尽くさねばならないと、考える。

このまま黒煙の中、相手の土俵で戦うのと、一時離脱するのどちらが良いか。

もちろん後者である。そして、離脱するのは真に一時だけだ。

ワミは《テンウィン》をひっくり返し、Uターンさせる。

それはスプリットSと呼ばれる、飛走術だった。

「さすが、だな」

こちらの読みを看破し瞬時に離脱したワミをクリユウは尊敬する。幾つもの経験から最善の一手を導き出す。経験が少ないクリユウには真似の出来ないことである。

だが敵の最善の一手は、これからであった。

《テンウィン》はもう一度ひっくり返る。

『で、でたあああ』

解説者が絶叫する。

そして、もう一度はスプリットSを行った。
テンワイン
デュアル・スプリット
『二重・反転だー!!』

一回目の反転で方向を変え下り、その勢いを利用してもう一度反転を行う。ワミが持つ、最高の飛走術である。
マニユーバ

クリュウが押揃されるような曲芸術とは違う、無駄がない有益性だけを追求した飛走術である。
マニユーバ

クリュウにも分かる。この二回目のスプリットSが成功したときに敵機が自分の背後に来るということが。

(そうは……させない!!)

《ディーゴ》はターンを行う。

「メーメ!! 炉の火を上げる!」

「がってんしうちなの!」

メーメは、魔炭石を炉へとくべる。ただ新しくくべた魔炭石が炉を舐めるようになるには時間が掛かる。

《ディーゴ》はターンをしたことにより、上位から《テンワイン》を迎え撃つ。
マニユーバ

飛走術によって一度高い所から降り、そして再び登った《テンワイン》。

登った所でやむ終えず降った、《ディーゴ》。

二機が武器を持ち打ち合う。

『出力を上げた割には……手ごたえがない!!』

《テンワイン》が《ディーゴ》の武器を掃い、腹部を一閃する。

「くっつー!!」

強い衝撃が操縦席を襲う。

「胸部に軽度の損傷なのよ」

メーメが被害報告をする。《ディーゴ》の装甲は厚く、敵機が上昇中だったということもあり、損害は軽微だった。

クリュウがメーメに指示を出して僅か1秒の出来事だ。

《ディーゴ》がスピードの加速に入るまでに2秒、新たな魔炭石

を投入して火が点き出力に影響するまでに5秒のラグある。

先程の指示は、これからの展開を予測しての命令であった。

《ディーゴ》は切り抜けて再びターンする。此度のターンは、降りによる慣性を味方につけ、更にその間にラグを軽減させ、相手にそのことを感づかせない、飛走であった。

対して、《テンワイン》は、上空の黒煙が消えていないので避けるためには再びターンせざるを得ない。

そして二合目、お互いのHSAハイスが刀と剣を交える。

二度、甲高い金属同士がぶつかり合う音が響く。

『ここに来てお互いの接近戦は互角！！』

MCの言葉通り、二合目においてどちらのHSAハイスにもダメージが通ることはなかった。

これは、《テンワイン》が上昇して下降するまでの時間が短かったこと……そして、《ディーゴ》のトルクの強さが影響していた。

切り抜けお互いのHSAハイスが三度ターンする。空でスカイレールが8の字を描き続ける。

ここ、接近戦 ブルファイトにおいて上位を取るものが不利であるという、奇妙な戦いが展開される。

三合目が終わると、お互いともその事に気がつく。

「メーメ、炎装！！」

「りようかいなの」

多量の魔炭石を放り込んだ火室の炎がメーメのインストールしたCOMコムによってゴウゴウと燃え上がる。

「炎装・香火車 フレイム・ラン」

メーメが起動したEOMエオムと同時に《ディーゴ》が加速した。

『メーメ、炎装！！』

そんな声が聞こえた。

どうやら相手も上位を取れば不利になることに気がついたようだ。

ワミはクリユウの声からそれを判断する。

（敵機がスペルを必要としないのは何故だ？）

ＥＯＭエオムを使用するにはスペルと言われる声紋による発動が当たり前となっている。それがＨＳＡハイスの操縦には両手足を利用する為か、それとも魔術というものがスペルを必要としているのか、分かつていない。ＥＯＭエオムとは声紋発動するものだ、という常識があるのである。

そしてスペルは会話に支障が出ないように二つの言葉から構成されている。例えば、”火速　ブーストアップ”は、”火速”と”ブーストアップ”の鍵キで構成されている。

それをクリユウは、短く指示を出すだけで発動させていた。

（いや、始めからそうだ……敵機は分からないことが多すぎる）

ワミの得意な戦い方は、今までの相手の戦い方を分析して、隙を狙うこと。そう言う意味では新人であり、特異な戦い方をするクリユウは戦い難い相手であった。

ワミは、クリユウの短い言葉から刀を点火し攻撃を強化してくるだろうと読んだ。

「防疫　フレイム……」

ワミが防御のＥＯＭエオムを唱えようとした瞬間……《ディーゴ》の車輪が火を噴いた。

予期せぬ加速。《テンウイン》は胴に一閃を浴びる。

「うおおおおー！」

《テンウイン》はディフェンダーなので装甲は厚い。それでも下手をすれば負けに繋がりがかねない致命的な一撃であった。

ガタガタと振るえ悲鳴を上げる機体を押さえる。

装甲が厚い胴にダメージを負ったことが不幸中の幸いであった。エンジンを持つ胴部分は確かに停止させることが出来れば、一撃必殺と成りえる。だが、不発に終われば意味はない。

敵は再び好機を逃したと言える。

『まさか、炎装からの加速を乗り切るなんてな』

敵機から驚嘆の声が上がる。

確かに言葉で誘導された節がある。

（だが、二度目は無い）

ワミは無言で敵機を睨みつける。

「火速　ブーストアップ」

2RBも終盤。出し惜しみはして置けない。

ワミは対抗して、速度上昇のEOMエオムを発動する。

加速したまま上昇して……ペンデュラム機構を利用し、機体を横に倒す。

（速度は勝ったー！）

上昇中に加速しそのまま下降することによってスカイレールを描く速度と同速　ギリギリの速さを《テンウイン》は得る。

このままぶつかり合えば相手の脱線を誘える……そういう展開だった。

『ポイントー！』

《ディーゴ》のスピードが減速した。それとほぼ同時、今度は《ディーゴ》の持つ刀が炎を噴いた。

火速した《テンウイン》と炎装した《ディーゴ》が四度ぶつかり合う。

刃を返し峰で相手の剣を受け止める。

もしこれが通常のHSAハイスであれば脱線して当たり前だった。だが、《ディーゴ》の持つ超重量とトルクを最大限利用し、腰を下げることによって《テンウイン》の剣激を受け止めることに成功していた。炎を点す刀はジリジリと相手の装甲を焼く。

『クッー！』

速度によって下に押されてはいるが、《ディーゴ》の炎装は少しずつ《テンウイン》にダメージを与えていく。ただでさえ胴に一撃

を浴びた身……持久戦は望まない筈である。

《テンウィン》は一度機体を下に押し込むとブルファイトから離脱する。

（この瞬間を待ってた！！）

クリュウは勝利への道筋が見えた。

通常であればこのままドッグファイトへと持ち込む場面……だが、クリュウは《ディーゴ》を相手と逆の方向へ飛走させる。

『な、なんだとおお！！！！』

MCと観客が驚きの声を上げる。

更にクリュウはワミに言わせれば曲芸術マニユーバ スパイラルフランク

で渦巻き状に横に走る。

それに気がついた《テンウィン》は直ぐに、スプリットS 反転後、火速を追いかける。

差は直ぐに近じまる。

「ふふ、決まるわ」

アイザは始めからクリュウが何を狙っているのか分かっていた。あくまで勝利する為の一つの可能性だということも知っていたのタクティクスであることも。

相手が慎重に勝利を狙うタイプ……長期戦を予期しての戦術、やはりクリュウは面白い。

アイザは笑う。

「ありゃあ、決まっちゃうな。あの馬鹿、大っぴらに宣伝しやがって」

「ヒヒ、それでもやはり虎の子。まさか初戦であの勝利方法を選ぶなんてね。ヒヒヒ」

アドウは苦笑し、ウエマーは奇笑する。

「なんで逃げるのよ!! 勝利は目の前じゃない!？」
サリナは勝利目前のクリユウの愚策に激情する。

《テンウィン》が《ディーゴ》に接触するその瞬間……スタジオ
ムが出来て一度も鳴ったことのないブザー音が会場中に響いた。
『はっ!？』

解説をするMCはすつとんきょうな声を上げる。

特定の人物を除いた会場中の人間、そしてワミ。

そして、大画面に映される、”Winner No.4”の文字。
それは《ディーゴ》が勝利したことを表していた。

『ど、どういうことだ!？ これは、システムの故障か?』

《テンウィン》が戦闘不能になってもいないのに表示される勝者
の文字、誰もが疑問を抱いた。
とある文字が続いて出てくる。

”OVER RUN”

と浮かんだ。

数十年の間、誰も遂げたことの無い、過酷な勝利条件・オーバー
ラン……まさしく偉業が達成された瞬間であった。

黒き重身（後書き）

先週アップできなくてゴメンナサイ!!

こんばんは、呉璽立児です。

今回の話はいかがだったでしょうか？ 戦闘状況が浮かんできて貰えたらと思い頑張りました。
気がついたら二倍の量になってしまい、読みにくいかもしれませ
ん。

ご意見ご感想等ございましたら、是非よろしくお願いいたします。

余韻

『お、！ オーバーバーラアアアアン！！』

MCの勝利宣言。

静寂に包まれていた会場が、

「「「うおおおおおー！！」」」

一瞬で沸き立つ。

誰も見たことの無い、飛走が認知された瞬間であった。

『手元にある資料によると、オーバーランが達成されたのは36年も昔だ。すごい……すごいぞ《デイーゴ》！』

MCが声を上げる度に巻き起こる歓声。

2RBが始まる前までは一度も起こらなかった声援が一変、スタジアムに戻ってきた《デイーゴ》に浴びせられるのは熱狂的な歓迎の声だけである。

クリユウは名だたるライナーの仲間入りを果たしたのであった。

コックピット内はものすごい熱気で茹だっている。

火室と言う機関で火を轟々と起こす デイーゴ はコックピットを含む腹部が加熱する。

クリユウは汗まみれ、

メーメはススまみれ、

デイーゴ から降りた二人は小汚いくなっていた。

それでも沸き起こる歓声は、感じることが出来る。

明らかに旧式の HSA ハイサ で勝利を勝ち取る……それもただの勝利ではない、オーバーランという特殊勝利条件を用いて、クリユウの目論見は見事成功した。

「これがごしゅじんさまの目指していた勝利なの？」

メーメの知る勝ちとは、敵機を撃墜することだった。対するHS^{ハイ}サ

Aを破壊すること、じぶん^{インブット}に記憶されているのはまったく違ったもの。

「そつだ、これが”勝ち”だ」

過去も今も偉業を達成した勇者には民の歓声が与えられる。

メーメは呆然としながら、この声を受け入れる。

《デイーゴ》から遅れて、《テンウィン》がスタジアムへと帰ってくる。

《テンウィン》のコックピットが開き正に”やられた”と言わんばかりの顔で降りてくる。

「この野郎！！ テメーに賭けていたのに！！」

そんな野次が歓声に混じって飛び出す。本命とも言えるワミに投票していた者は大勢いたはずだ。

「やられたよ」

野次を気にせずワミはクリユウに声を掛ける。

「いい勝負だったぜ」

クリユウは笑顔で、手を差し出す。

「楽しかった！」

「楽しかった……か、君はまるでアイザさんのようだね」

苦笑したワミはそう零す。

ギョツと握手した手をワミは強く握る。

「……いいか？ こんな手二度と僕に通じると思っなよ」

今回のオーバランによる勝利は初めからそれを狙ったモノだった。これはこの勝利方法が忘れられていたからこそ出来たことだ。二度目、同じことを実行すれば相手は全力でこちらを攻撃に来る。

一見、恨み言のように聞こえるが、ワミの顔は憑き物が落ちたような笑顔だった。

「次は僕が勝つ」/「次もオレが勝つ」

お互いが強く手を握り閉めた。

「僕に勝ったんだ、絶対に勝てよ」

そう言っつてワミは似合わぬ台詞を残して去っていった。

クリュウは一回戦に勝利した。臨むはトーナメント二回戦目。

こちらを見つめる２メーヤほどの男がいる。ホワイトバード 一番を駆る彼が次のクリュウの相手である。己のHSAハイスだけでなく、自らの体も限界まで絞った。あまりに華奢な体躯が印象的だ。

何処まで削れば気が済むのだろう。というより髪まで削る必要はあるのだろうか？

その男はスキンヘッドだった。

その次戦は、明日のトーナメント一回戦第二グループの２RBが終わった次の日。明後日となる。

「良くやったぜ、アンちゃん!!」

スタジアム内の《ディーゴ》に与えられたハンガーへ戻ると、クリュウは皆に出迎えられた。

本当にクリュウが勝つと思っていたものが少なかったのだろう、

「まさか、勝つとは」そう顔に書いてある者が多い。

「ヒヒ、僕は勝てると思っていたけどねヒヒ」

そう言うウエマーもスイッチが入りっぱなしである。

「それにしても初戦からオーバーランを決めるなんて、次の試合はどうするつもりだ？」

皆が笑顔だと言うのに一人だけムスツとした顔でアドウが言う。

「もちろん、勝つさ」

アドウが言うことにも一理ある。確かに認知されていない勝利条件を狙うなら絶対に勝ちたい決勝戦まで温存しておくことが得策だった。相手がワミという、情報戦を主眼においたライナーであったから綺麗に決まった。これが臨機応変な戦いを得意とするライナーだったならば、結果は違っていたかもしれない。

その位のことではクリュウだって分かっている。今回の戦い方は相手が自分を知らないことを前提に組み立てたタクティスだった。だからこんな戦方はもう二度と通用しない。

「皆、機体調整よろしくお願いします」

「おうー！」という掛け声と共に皆仕事に取り掛かる。

「HSAのダメージはほぼ無しか」
ハイス

ダメージを受けた部分も筒状の胴部分に一撃だけである。火室やボイラーを持つこの部分は《ディーゴ》の中で最も装甲が厚い部分でもある。

だがそれは、もし破られれば走行が不可能になることも意味する。
「アンちゃん、気を付けろよ」

「ああ……」

次走の相手を考えると、今回よりダメージを受けることは必須となる。

《ホワイトバード》は《テンウィン》と同じく《283系》を基礎とするHSAだ。ハイスだが、カスタムコンセプトが《テンウィン》とはまるで違う。

加速に重点をおき、極力限界まで削った機体重量　これが示す意味は、

「スピード重視のアウトロー型アタッカー」
と、なる。

しかも、それだけではない。無茶な改造を施している割に機体が安定している。初戦において危ない面も幾つもあったがそれを切り抜けてきたことを考える。

「しかも、臨機応変な戦い方が得意なライナーか」

ワミとは逆……戦局に合わせた戦い方を得意とする野生的なライナーであると考ええる。EOMエオム無しでHSAハイススペックを前面に押し出した戦いは、《ディーゴ》が最も不得手とする戦い方である。

「ま、考えても仕方がねえ……なるようになるさ」

「さっすが、ごしゅじんさま」

呟くクリュウにメーメが呼応した。

クリュウ達は先に帰ったアドウから遅れる形で家に戻った。

引き戸を開けるとルリが出迎えてくれる。

「ただいまー」

「ただいまなの」

「あら、お帰りなさい。すごかったわねえ、くーちゃん」

ルリはクリユウが得た勝利を我が子のこのように褒めてくれる。

「そうそうテレビでもくーちゃんのことばっかりやっているのよ」

正直、パドックの時点で新米ライナーの相手が、本命ライナー・ワミとなった時点で勝利がどちらになるかなんて予想が付いていた。それをひっくり返してしまったのだから注目されるのはある意味当然であった。

テレビの特集によれば、クリユウVSワミの試合の投票では、ほとんどの人間はワミに賭けていた。よってクリユウのオッズ 払戻金の倍率は98倍であった。最低掛け金の100ウエンを賭けた場合9800ウエンとなって返ってくることになる。

もちろん《ディーゴ》に賭けた者など片手で数えるほどしかないのだが。

特集ではこのようなことも言っていた。

もし、クリユウ氏が大会に勝つことがあれば、その配当金は100倍を超えるでしょう
と、言われていた。

もちろん、《ディーゴ》の機体説明までされている。

S系は魔炭石で動いている

ということから、

加速には時間が掛かる、また、魔炭石という燃料を用いているから重量が重い
などという欠点が羅列され、

まったくもって、現実的ではない

そう、専門家からは貶されてばかりであった。

彼が勝ったのは偶然でしょう。そうでなければ、新人がましてやオーバールンで勝つなんてありえないでしょう

「なんだとおお!!」

「まったくしつれいしちゃうのよ」

二人は息巻いてテレビに囁り付く。

その後、テレビの特集は、

では、次回の《ディーゴ》の飛走に期待しましょう

そう当たり障りの無い台詞で終わりを告げた。

「どうでもいいから……」

テレビの横で椅子に座っていたサリナがワナワナと震えだす。

「ばっちいからさっさと風呂に行けえええ!!」

汗で汚れた男と煤まみれの少女は居間から追い出された。

「せなかをながしてあげるのよ」

そう言われてクリユウとメーメは一緒に風呂に入ることになった。

メーメの服は借り物なのでアドウ家と同じ洗濯物入れに、クリユウのは後で自分で洗濯するので端のほうに避けて置く。

「オレより先にお前の髪を洗おう」

メーメは亜麻色の髪がまるで錆びたかのように薄黒くなっていた。

「ほら、目瞑ってろ」

そういつて頭からお湯をぶっ掛ける。

「むっ」

クリユウは石鹸を手に取りわしゃわしゃと泡を立てる。

こうしてメーメを見ているととても彼女が作りモノだとは思えなかった。

目じりに皺を寄せて必死に目を瞑る姿は年相応に見えるメーメだが、《ディーゴ》に乗っている間はその有能さが良く分かる。

例えばライナーとOSが3秒かけて行うアクションがあるとしても、メーメならば単独で1秒でやってのけることが出来る。彼女はそう言う存在だった。

事実、今回の2RBにおいても本来ならば唱えなければ発動出来ないスペルを 単に命令するだけで素早く発動することが出来た。

それは、彼女が状況からどのEOM^{エオム}を使うか自ら考えることが出来、準備をしていたからだ。

（意思を持ち、自立しているOS……）

「まだなの？」

必至に耳の穴を押さえている姿は、本当にただの幼女なのだが。

『メーメ？ 一人で入ってるの？』

考え事をしていたので、そんな声に気がつくのに遅れた。

ガラリとドアが開きサリナが……、

「ちよっ」

「待て」そんな声も出すことが出来ず……顔だけ振り向くと、赤面しているサリナと目が合う。

「いやああああああ！！」

「おぶらあ！！！！」

回し蹴りが顔面に炸裂。クリユウはキリモミ状に回転し、壁に激突してそのまま湯船にダイブした。

彼女の怒りを表すようにボタンと乱暴にドアが閉められた。

「ちよっと……ごしゅじんさま？ 何があつたの？」

泡だらけで目を開けられないメーメが戸惑いの声をあげる。

「誰か……助けて……たすけてなのおお！！」

メーメの叫びが、虚しく風呂場にこだました。

オフィスの一角。退社時間も過ぎた中、トチは椅子にふんぞり返っている。

「それで準備は済んだのか？」

「は、はい万事終わりました」

とてもじゃないが、他の社員には聞かせられない内容が報告されていた。

「ヴァインと言う賞金稼ぎが乗るHSA^{ハイサ}と良く似たHSA^{ハイサ}をこちらで用意し、彼にそれに乗るよう契約しました」

「もちろん勝てるHSAハイサを用意したんだろうな？」

トチの丸い顔が悪人顔になる。

「も、もちろんです。二課に要請して、最新鋭の技術を搭載しました」

「ふん、二課か……。あんなオカルト技術ばかり研究している所か

……役に立つのか？」

「エムディーM・Dは、ハイサまず、並みのHSAには負けない」と言っていました」

トチは、鼻の穴から鼻毛を千切るとフウッと部下に向かって飛ばす。

「まあいい。賞金稼ぎが勝とうが爆発しようが、SCを台無しにしてくれば問題は無い」

WCにおいてギドレーの勝利は揺るぐことは無い。彼は今日も快勝を遂げていた。この点は問題ない。

それよりも気に入らないことがあるとすれば、今日のニュースの内容だった。

「なんだあ……アレは……」

「ひ、ひい」

丸い顔が四角く見えるほどの、トチは怒りを表す。

怒りの原因は特集まで組まれるほどの《ディーゴ》の活躍だった。新聞の夕刊も……テレビも……36年ぶりに達成された、オーバーランの記事でいっぱいだった。

「あ、あれは仕方の無いことで……」

そこにはギドレーもアイザも関係ない、無名だったライナーの名がでかかど報道されていた。

「クリユウ・イワザキ、こいつは何者だ！」

「それが、本当に無名の新人でして」

ギドレーならば知るその人物であったが、この部下が知らなかった。

誰もが、アレはただの奇跡だ偶然だと言う。

「気に入らん」

だが、この時このトチだけは……いや、2RBを貶しているトチだからこそかもしれない。

何か嫌な予感を感じていた。

クリユウは湯上りに《ディーゴ》のいないハンガーに来ていた。いや、来ていたというより、見えなくなった彼女を探しに来たというのが本音だった。

「なんで、アンタこんな所に……」

突然現れたクリユウを前にサリナがたじろぐ。

「なんとなく、ここかなっと思って」

湯当たりした体には、ハンガー内のひんやりした空気が気持ちよかった。

「そういえば、今日の飛走^{はし}り、どうだった？」

ルリの話によれば大層、テレビに囃り付いて（壊しそうなほど）応援してくれた、と聞いていた。

だからこそ、この天邪鬼な本人に聞いてみたくなった。

「アンタらしい、無謀で無茶で無茶苦茶で……フン、負けるかと思っただわよ」

サリナは「負ければ良かったのに」とは言わない。

（やっぱり応援してくれてたってことか）

決して口にはしないだろうが、ヒヤヒヤしましたとまるで顔に書いてあるようだった。

「……じゃあ、好きになってくれた？」

「ふうあ!？」

真摯に見つめ、告げるその言葉はサリナを勘違いさせるには十分だった。

「HSAを2RBを……どう？」
ハイサ

暗闇でクリユウの目には映らないが、サリナの顔は赤面していた。

「馬鹿、馬鹿じゃないの？」

フンとサリナは捻くれる。

「お生憎様。私はアンタと違って、HSA^{ハイサ}が好きでも嫌いでも死なないのよ!!」

サリナはあつかんべえをするとハンガーから姿を消した。

「はぁ、まだ駄目か」

クリユウは深く、深く、ため息を付いた。

余韻（後書き）

こんばんは、呉璽立児です。

今回は前回の話からの勝利の余韻が冷めない、といった話になりました。

最近キャラがあまり喋っていないなあと思いこんな感じになりましたがいかがでしょうか？

ご意見感想お待ちしております。

二日目

スカイレールカップはワールドチャンピオンカップと競合して行われている。

そもそもWCCは、建国記念週間の連休に行われている。もちろん、それに平行して行われているSCは休日に肖り観客が多い。

スタジアムの観客の数は外に溢れる程であった。

WCCも、SCも複数日程で行われている。連休の最終日には、WCCで決勝戦、SCにおいてアイザとのエキシビジョンが行われる。

そのSC二日目、トーナメント一回戦の二回目が行われる。

クリユウは今日自宅でのテレビ観戦をしていた。

本当は大会会場で生で見たかったのだが、

馬鹿じゃないの、アンタ自分の体に少しは気を使え！！ この

HSA 馬鹿！

と、言われ監視付きで外出することを禁止された。

対して相手のメーメは機体調整の為にスタジアムに行っている。

観戦しに行っている訳ではないのに、少しうらやましかった。

「なあ」

「駄目」

看守はそう一蹴する。

「いや、抜け出さないけど……そんなとこに立ってないでこゝ、坐つたら？」

クリユウを居間に押し込んでからサリナはドアの前で囚人番をしていた。

「いや……別に、私は、2RBなんて興味ないし……」

「まあまあ、教えてやるからさ」

いまいち気乗りしないと文句を言いながらもサリナはクリュウの横に腰かける。

（口で言うほど興味が無いって訳じゃないんだよな）

話をしていれば分かる。

サリナの（たまに）口から出る H S A ハイサ、2 R B の知

識は一般人のものよりも高度だ。

クリュウは昔彼女が H S A ハイサ をそれほど嫌いではなかったと確信しつつあった。

（何がサリナをこんな H S A ハイサ 嫌いにしてしまったのだろう）

クリュウが好きすぎる意味で H S A ハイサ 馬鹿だというなら、サリナは真っ向から逆な H S A ハイサ 嫌いである。

「……そんなに私が H S A ハイサ 嫌いなのが気になる？」
クリュウは驚いた。

「顔に書いてある」

「そんなに分かりやすかったか？」
「ば〜か」

理由は絶対に話さない。サリナの言葉はそう言っているようだった。

「私は H S A ハイサ も、ライナーも嫌い。アンタがいくら私に好きになって欲しい、と思おうが嫌いなものは嫌い、好きになんてなつてやるものか」

その言葉はかたくなな拒否。

しかし言葉は続く。

「まあ、でも……夢をかなえようと必死に頑張ってる 馬鹿ぐらいなら応……気に掛けてあげてもいい」

サリナの言葉の後ろは小さくなっていた。

ゴローシフトカラーズ！！

空気を読んでか読まぬか、テレビで二日目の第一戦が始まった。
気まずい雰囲気はぶち壊された。

5番と6番の試合が行われる。

「ひとまずは堅実に攻めるみたい。どっかの誰かと違って」

「応援するとか言う割には……やっぱオレのこと嫌い？」

「それとこれとは別、馬鹿じゃないの。開幕から大業ぶちかますのなんて、我慢が出来ないただの子どものすることじゃん」

テレビの中ではお互い先にも後にも出ずという展開。両機とも出方をうかがっている。

（これはブラフ……）

クリュウはそう睨んだ。

H S A ハイサ に乗る者と乗らないものでは、見方一つとっても違う。

「何やってるのよ……早く攻めなさいよ」

サリナはじれったそうにしている。

見る方は派手で、予想できない展開を待っている。

だから演じる方は相手との戦闘に集中力を裂きながらも、この顧客の期待に答えなくてはならない。

「そろそろ、動くな」

動くとなれば6番が先ではないかとクリュウは考える。クリュウがソーサラーではないかと思っているH S A ^{ハイサ}だ。

「ホントだ」

クリュウが呟いた直後6番が加速を始めた。

ソーサラーの戦術は、加速したふりをして相手の加速を誘う、そして宙返りを行う、後ろを取った6番機は後ろからE O M ^{エオム}によるドッグファイトを仕掛ける、のではないかとクリュウが予想する。

ライナーは人気商売である。

人気と一重に言っても、スポーツであり賭け事でもある2 R Bは、人気にも種類がある。

まず、”勝つ”人気。これはどちらからも応援される。

また、”魅せる” 人気というものもある。スポーツとして観戦する側の人間からすれば見ていてワクワクする試合というのは受けがいい。そして派手な演出は私設大会等でも良く好まれる。

この大会において、賭け事としての人気はあるのに、嫌われているライナーがいる。

ヴァインのという名のライナーがそうだった。ヴァインは賞金稼ぎとして悪名が高かった。金の為なら、勝ちも負けも関係無い、という姿勢がライナーとしての株を下げていた。

ヴァインの飛走は二日目の第二2RBだ。

第一2RBも終わりが近い。

戦いは、ファイターの5番機よりも6番機が有利であった。ソーサラーの6番機は巧みな EOM エオム が5番機を翻弄していた。

5番機はドックファイトを仕掛けているのに、トラップ型 EOM エオム ”火罨” によって逆に追い込まれていた。

5番が”火罨”を避けた瞬間、形勢が逆転する。

「これで、終わりかなあ」

ため息をつくようにサリナが言った。

6番機が宙返りで後ろを取る。

ソーサラーの本領発揮とでもいうような、”火射”と”炎射”の追撃により…… ついにダメージが限界を向かえた。

脱線後落下、5番機は海に波紋を作り上げた。すぐに救出用に待機していた3機の HSA ハイサ が出動しクレーンで5番機を引き上げる。

「割と普通の試合じゃん」

ギリギリの戦い、冒険心のある改造とかが特にあった訳でもなく、凡庸な2RBだったとサリナは評価する。

「いい戦いだっただじゃないか、危なげなくないし」

古い機体に戦術は危険極まりない、そんな戦いが評価されているライナーが口にする言葉とは思えなく、

「ぷっ」

サリナが嘖き出す。

「ちょ！そ、それって、クク。ア、アンタが言うセリフ？」

「わ、笑うなよ！」

空に描かれていたスカイレールが消え、準備が整った。第二戦が始まるうとしている。

目玉はやはりヴァインが駆る8番オーツクであろう。

だが、その紹介をされても7番機の紹介に比べて歓声はない。

「露骨ねえ」

「まあ、賞金稼ぎだし」

ヴァイン自体も観客なんていないものだと考えている素振りで、
HSAハイサに乗り込む。

その行動にブーイングすら起きる。

だが、現在の一番人気は伊達ではない。

対戦相手は《283系》という主流HSAハイサであるのに対して、《オーツク》は《183系》という2世代以上も古いHSAハイサである。だが、《オーツク》のオッズは0.2倍　すなわち、《オーツク》に100ウエン賭けても120ウエンにしかない。それほど、賭け事上でヴァインは揺ぎ無い人気を示している。

さあ、空の色を変えろ。ゴーシフトカラーズ！！

掛け声と共に、2機ハイサのHSAが走り出す。

グンと《オーツク》がスピードを上げる。

「速い！！」

その加速性能は群を抜いていた。あっという間に7番機と差を着ける。

「ちよつと、今EOMエオムでも使った？」

「使ったんじゃないかな」

クリュウも自身がない。だが、初速というにはとても速い。

7番機は慌てて、EOM^{エオム}を使用して、加速する。

だが、距離は縮まらない。

「てつきり、旧世代の機体を腕でカバーするタイプのライナーだと思つてたけど、違ふみたいだな」

確かに圧機体性能は高い、だが機体に振り回されているようにも見える。

ヴァインの2RBは蓋を開けてみれば、機体性能の暴力。

2RBは、《オーツク》のEOM^{エオム}が吹き荒れる、凄まじいスピードで切り抜ける、たとえ被弾しても傷一つ負わない。

そんな一方的な試合だった。

戻ってきた《オーツク》に与えられたのは大きな罵声。

それは一方的な試合に対することであり、ヴァインの2RBに対する態度であつた。

だが、クリュウは別な見方をしていた。

（すごい試合だった）

《オーツク》に違和感を感じる。観客とは違ふ、ライナーだからこそ分かる感覚だった。

それは、全てのステータスが高いこと。2RBのHSA^{ハイサ}独特のいづれかのステータスに裂いたという改造が見られないことだった。

（どうやってるんだ）

疑問と好奇心が沸いてきた。

二日目（後書き）

こんばんは、呉璽立児です。

今回の内容は前回の話で本当は書くこうと思っていた、裏の内容となりました。

短いですが不気味なHSA^{ハイサ}の登場です。

このHSA^{ハイサ}がどのようなHSA^{ハイサ}なのかというのが、SCの鍵となります。

ご意見ご感想を募集しています。また、分かりにくい箇所等ございましたら是非是非教えてください、加筆したいと思います。

最後に、レビューを書いて下さった上沢様、お気に入り登録して下さいました皆さん、大変ありがとうございます。自身と書き続ける勇氣をいただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3223v/>

空闘飛走スカイライナー

2011年11月20日03時21分発行